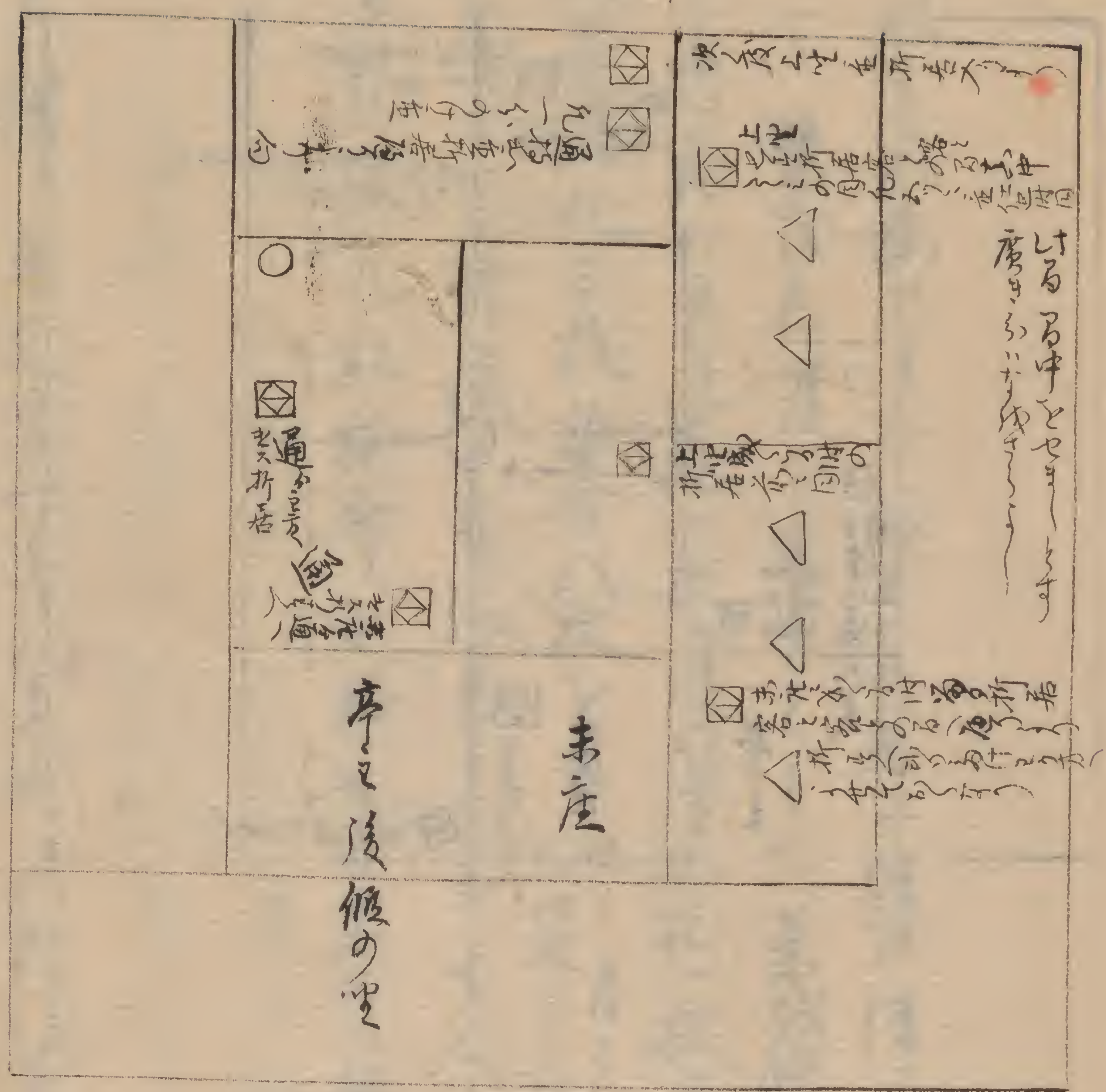
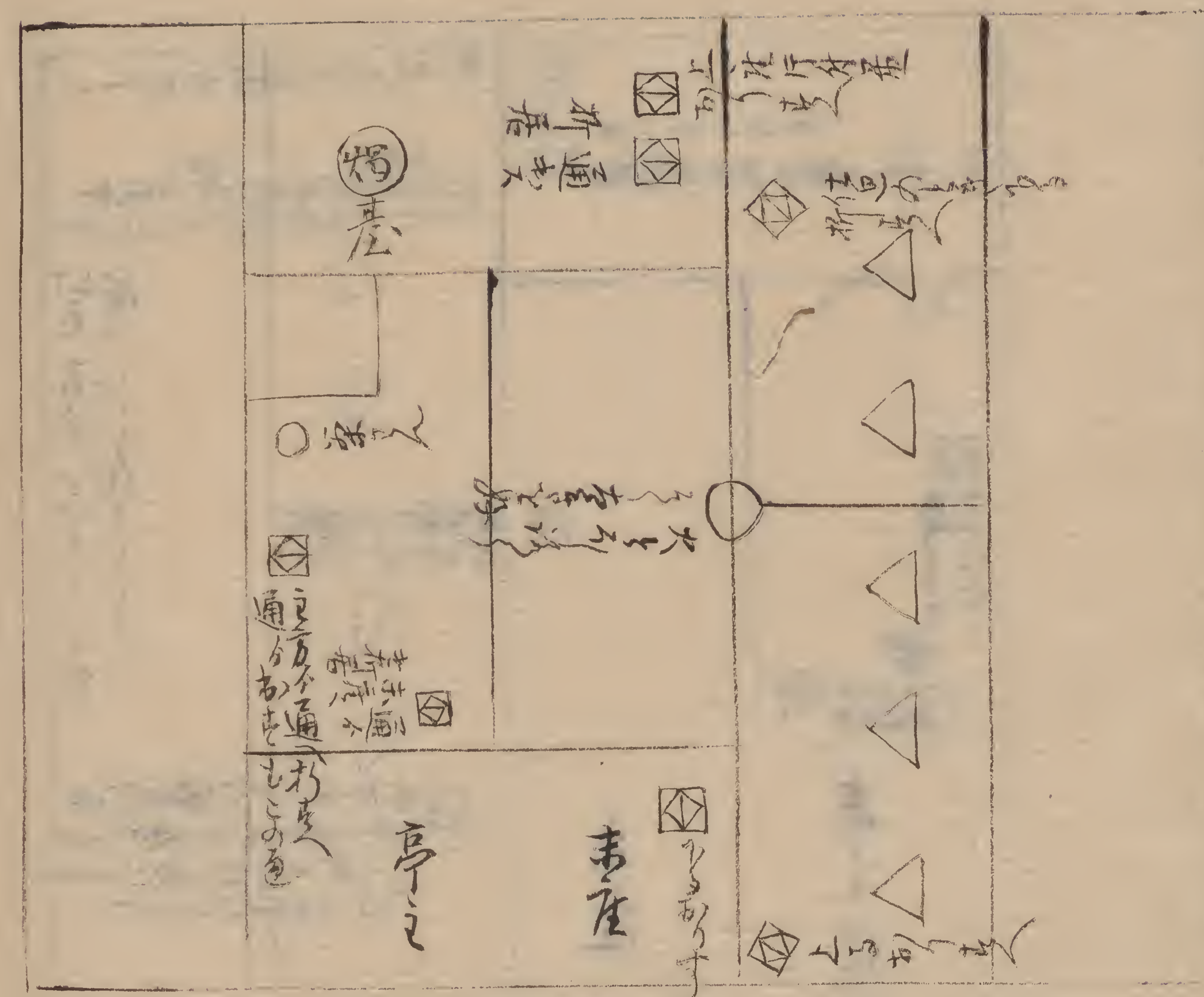
553

花月圖式





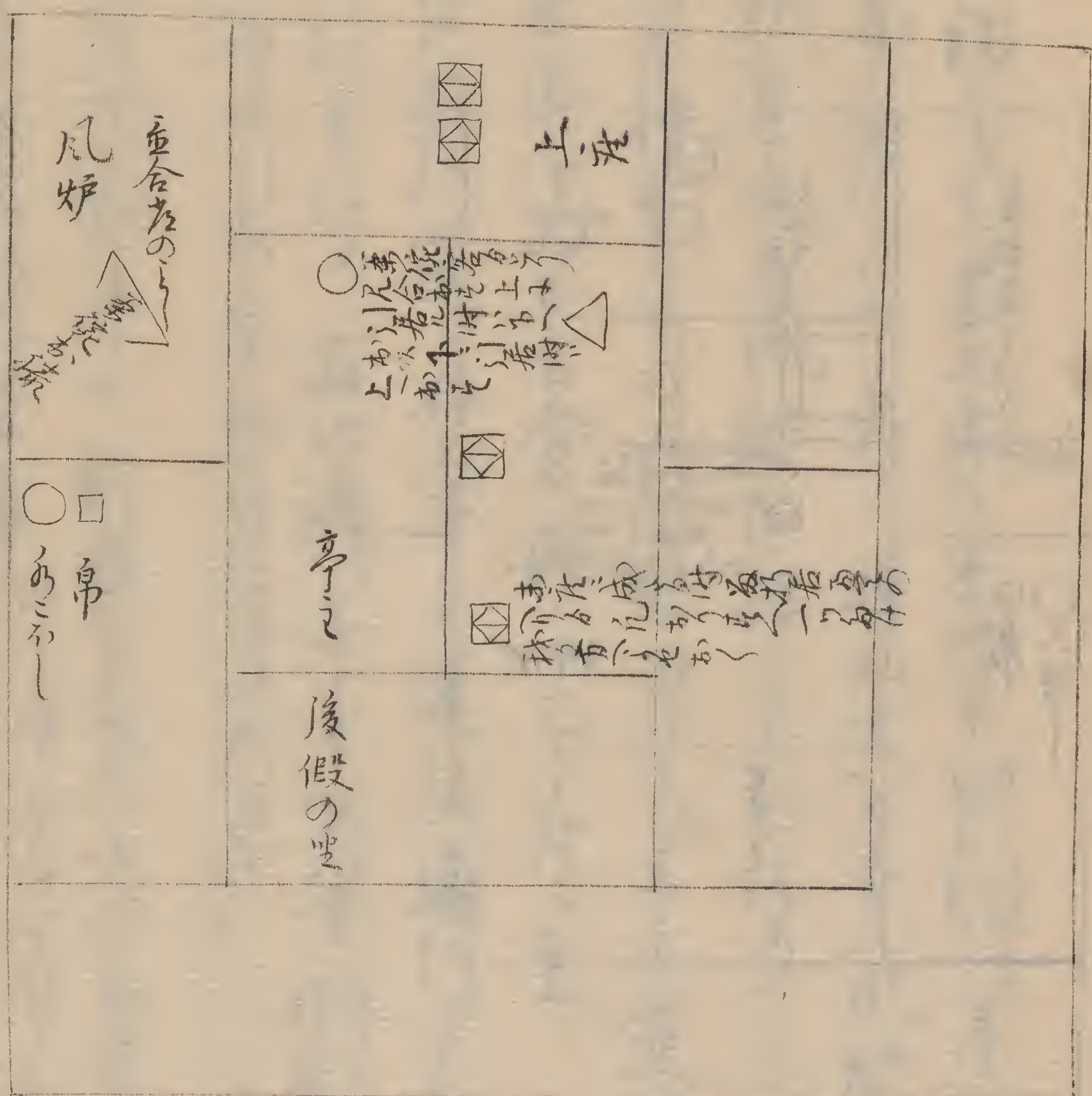
十種香は札

或は松の紋菊はならん梅乃もん何連にても一組ツヽ借り用ひ
花ツヽ主方として菊ツヽ客方として菊ツヽ陪賓
と五種札十二枚の内花の中は札一枚月の中の札一枚月花
の中なき札三枚客は札三枚都合八枚を用　但し月花の札四枚のこる
札はシタヽコクタヽタカヤサヽ竹桜其外何連にても其人之札
所持によりまかせて用札の紋凡松梅菊を好其外名のり紋
を合用るなり

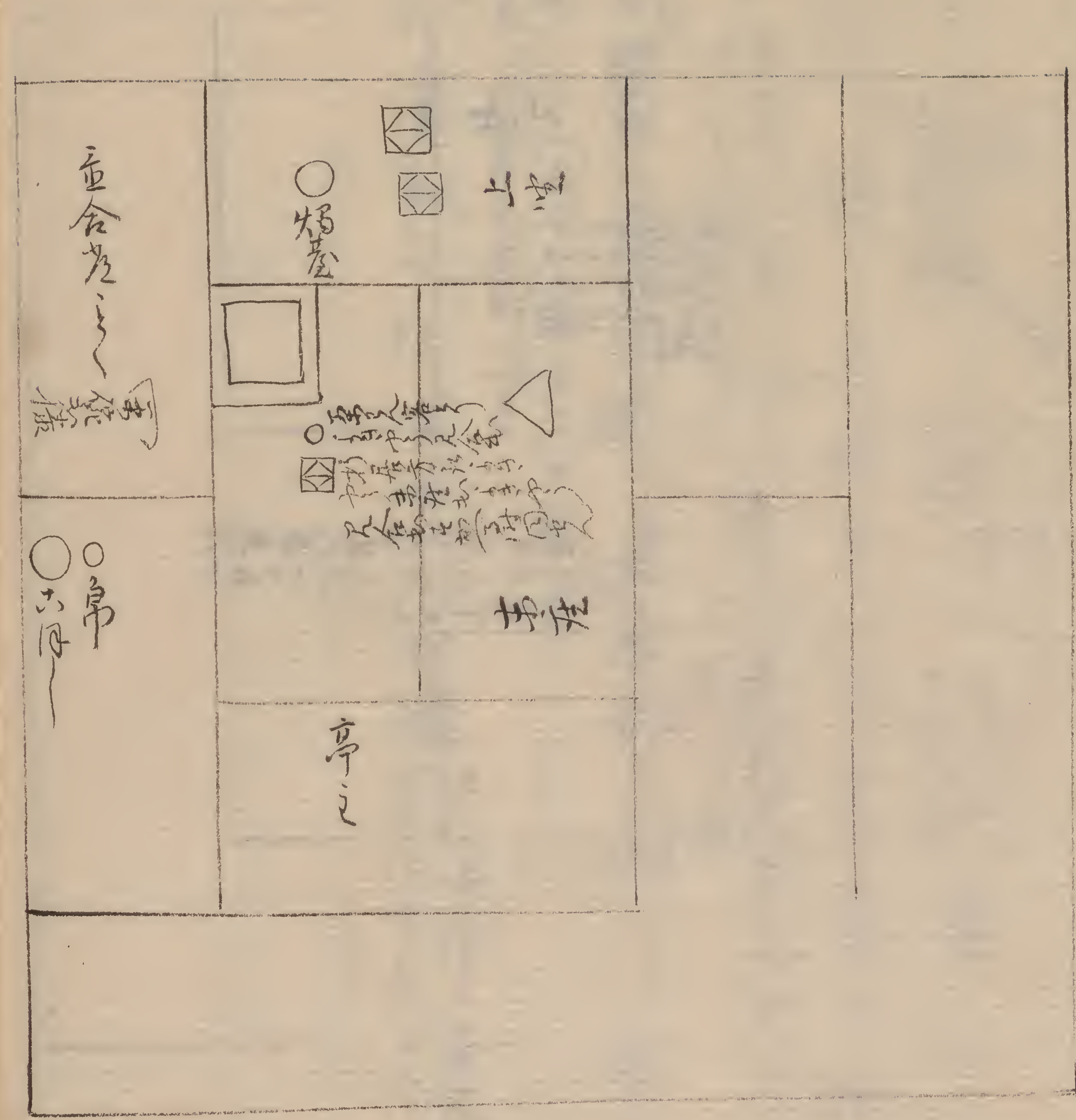
十種香の折居

札に四所持候方借り用文字一より十まで此内何連にて

も用ゆるなり
八畳敷にて御ある書流に人数八人 名札拔に足袋を用 通ひ廿五札
花筏用 生序とおゐて札伏 その身は始終無言 総く帛結帛は内用也 菓子 桝組
も用桝居も錯る 札の数は人数に合せてくばけましてて桝居へ入盃なり人数すくなき時は花月の中なれ札にて除
時宜によりて 風炉先屏風とも 用夜桝の間は其所の夜桝
杯用ひし 但なるへく人数は主客五人と好 札は月花二枚客三枚也通也
菓肉を亭主出す 通出す 延喫續出す 四通 但延喫續は客数多き廿七人より七ッ又八人より入り



客右お客へ一礼して末の如く着座す　少し跡より亭主揃て
お仮の座に着　亦ハ炭ならバ続く持出火を直し風炉を拭ひ
羽箒并持出炉ならバ式之風炉を掃ともゆり
通の者折居持出上座の前に直し置き立て右へ出て揃
一　入法の茶具を持出直合せ続て己が座に着
一　又亭主茶具残らず運び始め亭主運後通引之始終
通運後亭主引とゆり右ハ通り亭主心得也　但し何れとも折居ハ通運
続て亭主茶具引時亦引続又お仮の座に着後折居を引なり
一　上座次へ一礼して右手にて折居を取左手ハ上にて添へ
扎と一枚取り様の前にうつむけに置　但し順々に二ツ目に置也上座置
余り通ひ之置



折居をたゝみて次へ出て置茶器の如し　但し折居を置手假に合めを違ふへし
置き所一畳緒の並札の置所等に致して少しもひつミ不同なき様にすべし
札数のならひ　右にまて　順々如是末座札をとれ右に
一座同時に札数をとりて花の札を取替番手是を名乗
但し月の札もとり替
扨末座より札を折居へ入順々上へ戻し
上座に至て先の所に置

一 主方退而立して済の上にて此通り静に出水建茶
但し後に帛帯を付置結ひて帛を前かけ腰にさす
主方水こぼし茶入を着
主方此跡へ次の間より一度に出てりとけ置て右此
内水こぼしと持茶前に着

一 附点にて主方立て跡を主座順置茶を点前して
後則主座へ居る始終如是なるへし上座入替りす上座立
附点折居下へさけて立帰附まゝ客様聞間中順々
附折居之札置所にて下座方より膝を開き合せ折居を
かへ取りて同茶
主方柄杓蓋置とき付け満座各一礼
主方茶を点る度此様如し　湯に帛まて置附は茶杓を拭て
後帛出帛置て水こぼしの先東通り置
主方茶碗を拭て茶杓を取附上座札をとれて退き茶の
如し　但此一礼を最初手なり　末座札を取揃て折居を通の膝の脇茶の前に
置

一 通の者茶筅取て亭主方茶碗を置所の掛物の所に置
亭主方菓子を点茶碗を前にまで持膝を物の如く取て茶碗
飾の如くおし置に折居をとれ前に記まで如く札を掛なり
折居を膝の前に置かるとなし一回に札を取上け月の
札をとれ無きように先名乗は花の札をとるよう引續き名乗
但し初めは花并名乗次の度よりは月 さて亭主方札を折居へ入元の
花と月より先く名のるなり
如くおし置立て後前を見て修の如く置
通乃者月と名のり無き客方へ茶筅運ふ折居に加へて
膝を乗り諸手にて茶碗を取り風立て下に置き持て点客
に服居り風立なり茶碗を諸手にて客方の前に置

一 亭主足袋左の方へ開向編き足り通乃如に着折居
右の手にて取右の手にて末座へ遣すて亭主方月の時も
折々先折居と末座なし末席菓碗をとれなり替
の札亭主は皆菓碗運び戻りて後折居を末座へ取て
但し風炉の時は菓碗おかるとき座を立二足三足右居り菓碗をとれ立て運ぶ
へ足時も菓碗を置二足三足跡へ引戻りて元の如く置
一 次に亭主退き立て茶前に置 但し初の亭主方は折居上段まで
戻り客の所に置て待て座を
立なり次の度よりは折居持方まで足り札を入て亭主さき無れは点立てすくに又
上座主方に取る時は折居側の前に置て立ち替るように列上座と取なり
又時亭主より無きさ始の亭主と後亭主方引達て置きなし修の座へ戻りす上の合
右の足より引出る前は人は左の足より引出る座に置し上る人は右より始
ここに下る人は左より始と並なり 如是也
一 始乃亭主方又退き立て次の亭主方の立無る跡へ入替り座を

一 客方茶碗載き頂候ハ茶碗元の所へおきて 但し茶碗頂附ケ折居

茶碗頂きり茶碗を返す後折居也其所ニいつく時ハ茶のまうけ茶碗かかき
折居也又右の如く 折居有る時ハ又合ね居也 後茶碗頂右三度時宜ニ依て

通乃者其時茶碗を拝見して扨亭主の如く也又袖の茶
碗を亭主通り居茶碗を返し膝を開き其ま元居亭方
まを見るに中まて為る時ハ右の如く茶碗を取其膝を立上ハ猶遠
中程ハ向へよりも成る亭主居り左の爪立茶碗を客情
茶見合法にて座敷をはき引志きり待居 但し引去りて主客人をく
ふとよりの志きりに是又附きも 膝を少しもうりなり
通座ニて茶碗客より返す時 但客茶碗返す時 通よりも見合す
通座ニて茶碗はき膝をまりお法にて茶碗を右立て通へ
其れへ入中まて志きり居へ見り居りて茶碗を亭方へ返し膝を

開き元の通りに居して右立て出るも立て志きり置茶碗
わたし

一 亭方茶碗取戻茶碗置きの常の如し 其内に客礼を取る
以下いく度も前の同

一 亭方花れ札を取ある時ハ各客く後例の如く札居を出し
まてえれ如く居直し茶碗置きなり 月れ札を取る時も
例の如く 假の時に是き茶碗頂く茶碗を返し後立膝に着
亭方月に當り 假の時まして茶を頂く時ハ通先折居を取
まて遣して前れの如膝を廻し茶碗を取爪立右へより
見り服より茶碗直し居る 通へりの上に 茶も人返しの時も通の仕方
見りても客

十返しある作法之

一 茶仕廻ハ八人ニハ八炷ニ五人ニハ五炷ニ人数ニ応して出香ある時 但附の上座の人焚て 出香へし 但し下る
ありすへし 札を入れ打居と申を時折居を湯桶ニ在足仕廻の事之
打居ハ左へ角うけ上る打居ハ 右へ角掛るなり 涉く如色さて例の如く回附に札をとり
此札を入ある点半名香 香附の上方並ニ菓本ニ仕廻 さて折居を
炭並附と湯桶ニ在 放ニ花の札名のしきを 上座ニ而て例の
如く在 上方札をも打居 仮ニ本ニ本在 時もまた並ニ在

一 客方菓伐飲済し茶碗を直て上方取て本座湯桶
一礼して 此時上方月の札を入ある時ハ膝を開て茶碗を立並座
済て菓さん持ちなし居並り菓さん本ニ在一礼あるなり
並客一同ニ挨拶して志まつ始のしく入替る上より上へ本座

人もかまり上へ上る人と挨拶して夫より次第に遠く本座
ニ居る本座ニ居る人ハ立て客此内茶を仕廻附ハ志つ
かに其人の坐併に挨拶して本座に帰る

一 仕廻ハ小炷て此ハ少し 挨拶の弟子てなりかきの茶杓拭時弟子より持参て茶杓をとりぬき済て挨拶につける と持立返き志まつ仮ニ居り水

一 柄杓蓋置を取りて右の手へ持て水

建を最初通置ある故ニ置 柄杓を水こほしへ置蓋置
建を置合を 挨拶の弟子てなき附香挨の弟子を 右本ニ置りける
 いりあみて本建の掘ありし

一 通此者客次立て右の手に取りて此の仮置て此ニ中ニ居り弟子を
挨拶ありて 柄杓蓋置を右の手建持ありしさり 左へ上持上へ
入替りて 法のしきし茶碗とし

一　月指候ハゝ亭主と離るゝ時に坐折居と最初通り
若無之候ハゝ無之
通のとふり折居ハ持入なり
一　通の者折居をハゝ亭主と離るゝ時客亭主同時に
一続して亭主より順に出し亭主ハ勝手へ入
一　客七人亭主とも八人の時ハ是の通りニ客七人の時ハ
下の隅一人出明る六人の時ハ一番に一人右六人の時ハ下ノ隅
出て明る四人の時もそれに付て出来て出明る也
札を引事
一　花乃札残ハ引ハゝ名をかりて後札を仰むけ置べし

折居の廻りある時先札ハ入る折居の内なる月花の方に名紀
札一枚より初の札に並べ仰向置させて初の札を名のごとく
に引向く折居へ入よし〳〵書にて引たる札を持て立菓前行札を
水建の左へ仰むけ置（是より見る方へハ亭主方に置く）菓残点供を開き菓碗
あとも折居より折居の亭主方へハ出て来て持て当置（然して来る也　札をとう）
（折居置るゝ一つより所り）亭主菓子を置て其のまゝ一同に札を見る名のる
ありさて札を持立ニ弐ニ者ハ剣膝の前に札残仰向に
おく亀し（仮の名まて同）さて次度よりハ折居見る時若の事くさ下
へ此度迄まて札を見てさる也
但し最初の花も引かんと思ハゝ引し札をあらかしの先へ仮り
おく帛ありみある後こそへおくなり

一　月の札残れしりんと思ひて右札〳〵として札残れる所へ出て
前より出茶を服なり
一　亭主は時又花の札残れしりんと思ひて亭主札は前に御守
おき折居と取て押開きて開き箱の中より出して来客へ
出て通ひ茶碗を運ひ戻り亭主亭主より来る箱の
折居を来客へ立て又来より出る折居を亭主方へ立て亭主方
札を入り候へ亭主おる時又来客へ出り候なり
一　来客手札残仰むけまして折居へ入開きありまして亭主方へ
出して亭主方にて札をとりて神の札に並出させて神の札をとりて
也をもし折居へ入れ亭主へとおとの出し亭主て来客へ戻しり

亭主札残持て居出り札を取りて出し候ところ立茶を
出より以下同前
一　亭主は時月の札を取てしりんと思ひて右の通り折居へ
入れ来客へ出して出より札を取ち飯の中へ客附来客より
折居へ札を入れ来客へ出し札をとりてむけ前の出
茶碗残出し後又札を持て立出り客札と前出て
亭主月小しり折居へ箱の中より出して亭主附通茶
碗より前より来客へ出して内亭主飯の中へ出る折より
茶碗を点開き出り亭主前より出て相附折居通へ戻る迄
なし

一 末座まへのゝし札納入候の中へ末ゟ主方へ壱ニ折居をよきを
ぞ無之座り有る時巴そこし花のゝし
一 右札通り主方ゟり折居を開し末座へ遣り附末座
又並の月の札納所有附候我札を入る折居其候
主上者へ遣し上札よの我札を入へ末座へ戻し末座ゟり
主方へ返し
一 末座花の月の札を開き返しても先達て札を引居る
附にも如是折居をとへ遣し入へし遣し上座にても末座
も札を引ゟのにも座外の道理に故り末座引居る
附候上札者と主附の末座とも上座引居る附候

主次のものと主附の上座とも幾人引ても同事なり
前文右之通主方ゟり折居を取りき末ゟり附末座最前
ゟり引居るとも又入まへとおもいて附なしに我前に
附とも其ゝ有る札とまて折居へ入主方へ遣し
一 右札ゝし末座にも末花の月乃札を取り乞も同引入と
有りし我札を御命無ニ主方ゟり開し末ゟり有る折居
とも主上の者へ遣し附迄ゝき有る候隔け無之へし附
一 主上札者ニ主方し末座と二人引居に登の札二枚入とと
心得ゝし右札折居へ先我札と御命し入主上の者へ其の
中し遣し上札者又我札を御命し入りへ座を史々

末座へ席を元に直りましてハ 折居隔なく直末座より
主客へ近附なれハ夫くにて取之 さて主客 脇のとく
札を取替折居を置て末座へ席を末座まで又一
枚の札を取替る也
通主客へ末座より前の折居へ従来を以て通り
右同断

一 主客此時ハ花月かとも引かんと思ひて折居に月ハ花の
方なれハ札無し附ハ右の法に准し折居を開きて
其ハ札を取り入置し 此附ハ次のものと上座と
末ハ同様なり

一 一旦札を引こして又入んと思ハヽ 客方主客の名乗をかし
引續して我前の引有る札有る札を入紋を名乗る 但し松ハ松
上名乗随し さて折居の廻有る時引有る札を入次の席よりハ
花のとく札を取替り 但し正客の方又ハ末座の方まで
折居廻りする所よりてハ主名乗ある者の方まで折居を
廻して 但し茶前りも入らんと思て名乗し 札ハ仮の生まて作る者也

一 仕廻ル時ハ必す折居を主客より上座まで廻し引し有る
札とのけて入折居上座ル方に脇のとく直すなり

一 札の引有る者茶前を仕廻ときハ例の通り膝を開き
あらみ 茶碗をおしさて客月とたまり名の主ハ仕廻席

是ゟ次第建の通りに札を取て條々開き出して置き
折居を取て入札をしへをこれのことく出し居並て茶碗
道具次第のこと仕舞て出候

一 或附書院に楽太鼓を持ち出る人より征眞の香花
月と申すへ半分の大鼓まて出へきり 鶏口又は板仏雙又は茶の
湯に用る品をもて花月を出し何にても出へきり

一二三之式

一 客方九人まて十種香札を備く上中下の位を付也
但し月の一二三を上とし下なる三段を中とし花の三段を下とし
客一枚を自由に取りて月は上花は地と見るへし

一 香札札小箱にも入人に出し九人より九答借用ひ

より二枚客より札を蓋して直 硯蓋に載せ札居十と
内一つ借りて同 硯蓋に直合

一 宗匠には扇子を合 但し宗匠亭主ても扇子を出す 宗匠なき時は扇子
いらさる札持請なり 但し主方札持出に及ばし

式法 但し宗匠なし

一 客方請合之後も出香二を附て書院に水指茶入払帰
付書院にも残なく

一 客方名聞に置所より侍 但し扇子持参すへし 主方 硯蓋
前に置 上客取てとの方へ 主茶碗持出し上客の
前に出 上客取て次へまはす 主茶碗持出し上客の

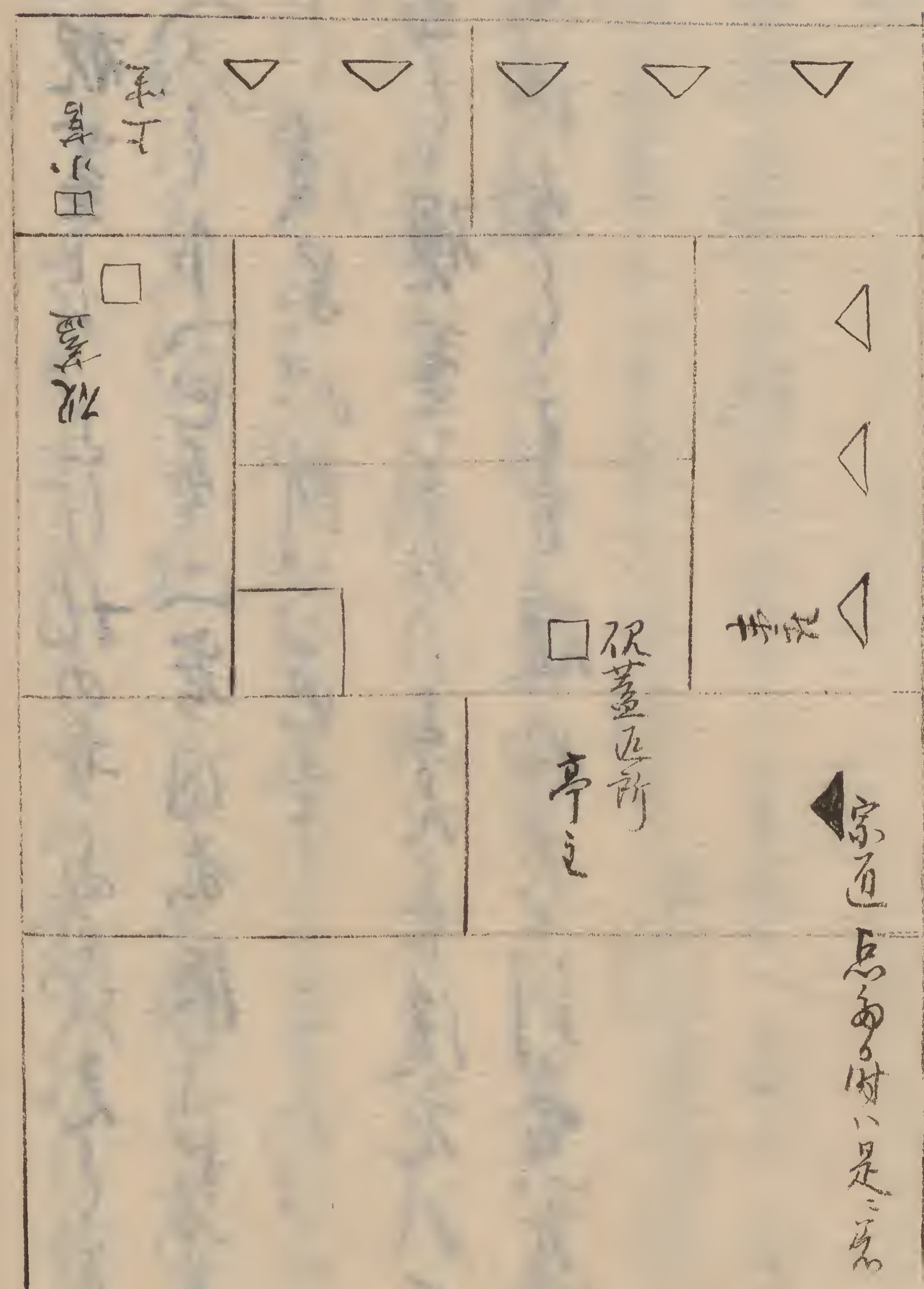
一 上客仕出後一礼致し 後下へ取し申して小箱を取く

右札銀呈の所ニ置 硯蓋下へ廻し 隨て末座まて出す
有る時末坐 硯蓋を 上坐札取へ持行 上坐より元札
取て置

一 茶入并袋三種末座より主方へ渡し主方 引り
出る時付上客と主方と一礼也 一礼なし 但し二客目よりは 主方取て
引て又袋離る時 上客小袋とれ 是札をおし 但し詰は客
よりはなし 一同札とおさせ 上客より隨て 札と本文字をおしむかて
入る事なくおしてる人は小袋札を手にかくし置末座
まて札取手結る札とも手明け 硯蓋にならべる
但月中花客となし さて末座上坐の前へ持行置元の坐ニなる

是上坐 硯蓋より上け札の手あり袋見てその後小袋を
硯ふた入へ入て下へ廻し 二客同前 隨て出り末座小袋
と入置て 後呈札所へ渡す

一 主方出て 硯蓋を取りよせて 後元札取へ置 満
坐香出て積取て主方 硯蓋を引香座へ出す



一

式法 但し宗匠ニて

一 宗匠ニ而ハ着座 但扇ハ常ノ如くさし置き其の座上ニ並べ置なり 其後亭主
取出し持出付宗匠小筥より札銭出し同小筥の如く
並札銭出す其ニ札銭出し二客めより札を出
有て其外ヨハ取て札銭出茶ハ取て宗匠前ニ出して
宗匠札を見て自分札と並べ而札の客に渡り
札をうけとり並小筥銭を入れて出して宗匠扇銭出て
但し一人も合札なくとも扇子宗匠前ニ置なり 二客めより見て小筥とも入宗匠取札
また合ぬ人ハ扇子合ハ札合ぬ人ハ扇子前ニさすなり
末座より亭主へ渡し引せり茶のうく

一 宗匠ハ寺ニて茶を点る時作男同茶ハ前ノ通り

宗札所ニ宗匠茶ハ（但宗匠の札一枚扇子ニ添て持出扇子ハ左の方ニ置て出す）其時末座ニ

て札残らず並て下ニ居る宗匠へ出す宗匠茶のごとく

札を蓋末座へ戻す（但其札ハ末座より上ニ）次ニ宗匠ハ扇子出して

末座上客の茶へ持行亭主ハ座ニ休く（但上座宗匠の札を出して見て）

（とり入ます）眠く見て宗匠ハ札ニ合ある人扇子を出す

宗匠へ出る時満座茶禮なして硯をとり客名

書残る也

同薄茶式

一 亭主案内なく客座定て後亭主硯蓋を持出て

一 上客の前ニ置なをして薄茶点事常のごとく一服点

（但し硯置付ハ何やうにても）（まぜてよし）上座仕舞ニ至り其外ハ常のごとく亭主ハ後一禮

なして硯蓋茶碗取て上へ出し水指引亭主同様勝

手へ入る時札を手ニ取り其人をよび茶のごとく宗匠なし

又宗匠勤しも如斯

同花式

一 亭主案内なく客座定て後亭主硯蓋上座の前

ニ置同様離座ニ出る時返へ一禮なして硯ハ其取て亭主勝

手入花台持出次の間ニ折居硯蓋上座へ納りて後亭主花

台持行花残生ましくニ花台引て入る（但花入ハ床内前ニ掛置なり）

主有茂離遊ゟ附札を手へとり出す等前のごとく 但し花ハ
客居 宗匠ハ宗匠ニまかせ宗匠勤ても前のごとく

同炭式

一 亭主東向なくし客座定て後亭主硯蓋を取
て炭取灰器湯持出法のごとく炭を直し客前にて炭
をみん手出し元此座ニ而 但し香合見て後ニ 次へ一礼なして硯
始ニ出し上座にて宿亜主炭札を出し主間を離遊ゟ
附札を手へとり出す等前のごとく宗匠ハ宗匠ニまかすへし
又宗匠勤ても前のごとし

一 風炉の附と候者同主香茂替て後香合所望也

一 濃茶いつておし上座にて漉へ一礼して見くし亭
主一席茶入を添て持出て次の間へ退客上客より順に
次へ一礼なして炭を見ん手出各座定て主香合を掛
拝見ニ硯ニ出して主間茂離遊ゟ附札を手へとり
出さば前のごとし

一 右四色ハ一二三を用なりんて濃茶ハ重用

一 札の手中に読たまくとの事上達の人目標と知べし

一 札を手心持ハ古歌に曰心のとハいかにとへんと有

一 十目視十手指とも言ハ自然稽古に成べきこと

一二三式終

廻花之式

一 時節此花にて候花台に 但其後の上に茶巾并盆
花切小刀何にても花台に並添持出花一返二返或
は三返にても各花を入る也 但茶の湯に用て花も時宜に寄て是を用
或は行菓子椿のときの花生なとに用

一 床例のごとく花入を掛置東向に座ス客中に出て主方花
台持出し中段の口にて花台前に置て一礼客各熟
読ありて主方花台を持行床の左の方に置くなり
但し中しきりより見合せてよし
始より花台を並べても置なり

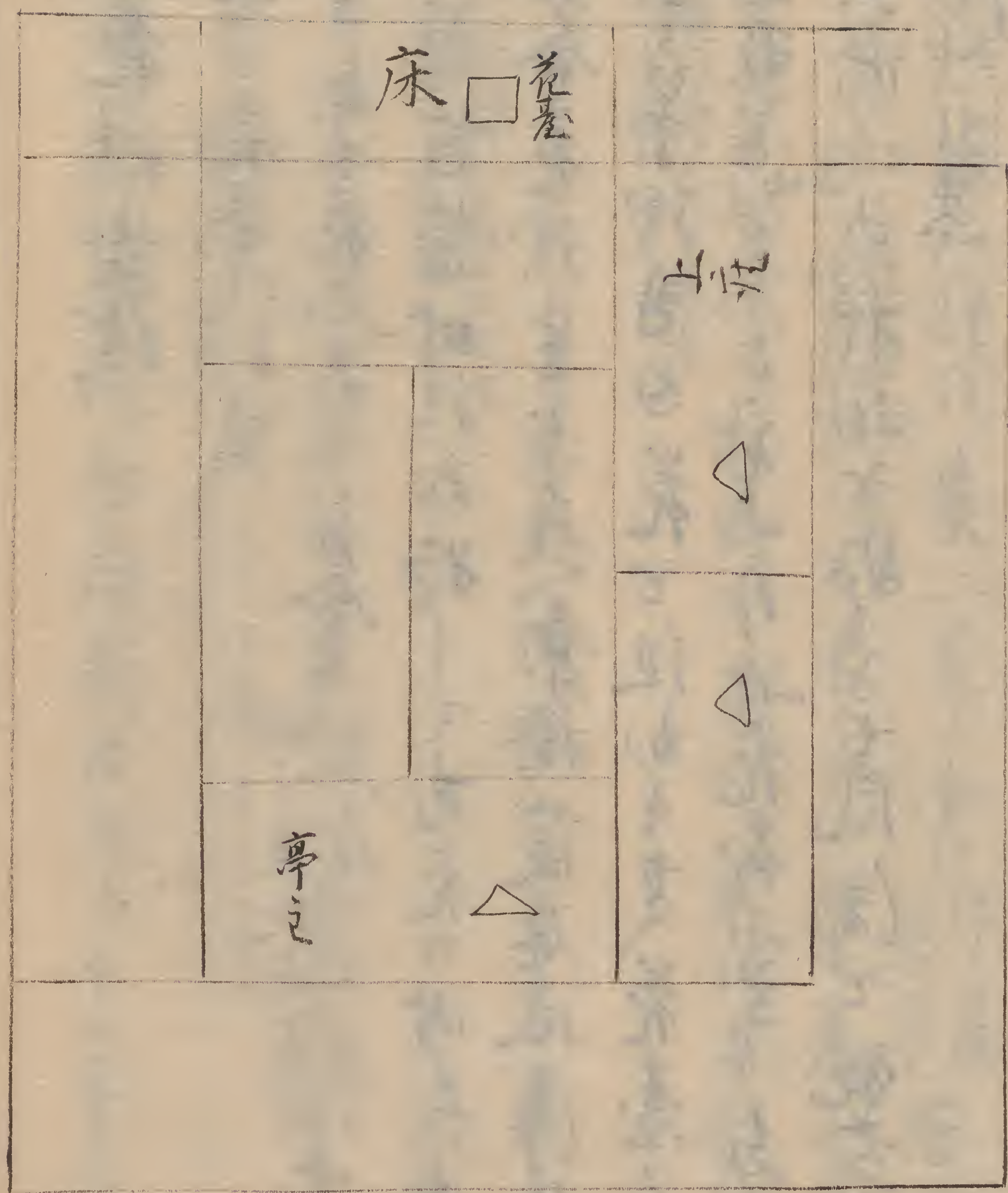
一 主と上座と一礼ありて後上中下へ一礼ありて花を其後
下中上茶の客又は一礼ありて前のごとく行て花

とりんと存へ一礼ありて花を揚け又自ら花入て出さ
はす　但し花台一礼は重き故へ一礼しさかりまて下座まて上座へ一礼　ばかりて立もよし席ありてなり

一　何匹出りても如此二匹めよりは次への礼花揚の礼無
し又ふりんと思ふ時の亭主へ一礼も有なり

一　位也の花も主方上座附座に依て何れに成とも仕出之
花上客の花よく位也りんと思ふて上座花又亭主附ころより
水の挨拶有べし亭主花ありて仕出へは上座より水の
ばいさつをへし　又は中にて秀一の花ばかりは亭主より
挨拶ばかりて位也亭より附座りまで有へし　花の内閑話
[illegible]

一　茶此湯之事与茶の附重き茶屋の礼は生也みえし



巴花札式終

附り花寄札式

一 花入ハ定り無く花入不足ハ壺合も 但し異風成花入も壺合に依て少々ハ用ゆる 十箇
廿箇 三十箇 百箇 時花札を好して尤花ハ時花色々
をとりつめ壺合花札生なる様く葉捲 葭屏風 薄板式
に香板 是も等式用ゆ 花を組出し支度 花臺をれ
皆花銘数をかきつけて その外共花寄ハ定り無き式
法なし 只時々の趣向を好く風流と競ふ也 但し花の
生のこり花入の少く寄り無るも一興なるべし

花寄式終

菓子好茶札式

一 茶四種より客一種ツゝ棗二宛に合け 但し四種式の菓之 客一棗て
加へて茶合九ツ 但三種の客式ハ二種ニ客一種ニ客なり 長盆に茶も菓子も盛ハ
棚に餝り並点出 切掛の札紙と用て 菓子廿合也
但式の菓ハ棗ハ蓋の上に名を書付
きく菓ハ蓋の書付下に何り

一 茶ハ茶師の名字と用 棗札紙添何れも名字を書之
但し札紙ハ上に茶師札名字を書
下に客銘々の実名を書なり

一 掛板ハ亭日 但合も無く茶師の名字を書付 書院床
錺所板に掛る 但し端手の方にても客より見る所に合無之ハ葭屏風にかけるなり

一 札紙ハ人数に合切掛紙両端折居 太りよ泊に一束ゝ包束

一 書硯箱ニても折居札紙を重の也文法にて押入書院
次の間の床或違棚なとへ勝る也 床なき所ハ違なき
所見合 帰るまてハ勝手よりもちいてもよし
一 通り付通なし 勝手二人 但一人ハ客方一人ハ亭主方 一人の時ハ亭主方の勝手兼る 坐席同法
ならしかしまし

式法

一 案内なし 客名呼よ次第 亭主方 茶碗持出 傍に並べ札の
東線取る茶碗と並合 但し菓子なしハ炭火おこしとめき点つる也 水とほしなき時ハ 又今のあとへ持出るなり
次附通帰る 折居札 前へ引寄 文法を取り 折居へ
札紙と共に取越し 文法を元へ並べ 折居札を手に持上座

此前へ並 通れ呼よ出 但し折居へ札勝手より附ハ勝手より持出
ニ付ハ 菓子此時ハ亭主方菓子へん持出る也 さて
いそれ折居持出し 又ハ亭主方折居を持出 上座の前へ並 又より菓子へん持出るなり
ときハ神より亭主方 勝手より持出る時ハ 何とへ出るなり 通り次
通り折居を持出ある時 挽茶此是持出て 硯ぶた傍紙と
並しく前へ並べ其の所に着 但し余り坐席よ 依て見合也
一 上座折居へと並べ上へ並へし並
一 亭主方 柄杓をとり一注なり 茶点る 亭主座此ごとく
茶を点出し ある時 通い茶碗を取て 上座の前へ並
其次第 但し通り次付ハ上座主より 又ハ亭主座とかくなり
一 上座其札なし 茶碗頂出て 下座のごとく
一 此内亭主方 茶杓を取り 柄杓を持へ並蓋線 前此ごとく

一 盆へ入ましニ此棗と取り並合茶杓を立るなり
一 末座茶碗取切り茶をんとも戻もと　但通ひ口時ハ末座より入べし
　通茶碗ニて主方へ入し吸切り茶
一 主方ちやをんと取り茶碗点もとしいつ迄も同し
一 客各次乃茶より一礼なし只茶を戴き茶碗を渡して一礼するなりなり
一 終れは茶四つ点ニて二客へ廻り每々付主方上座へ一礼して茶杓を取り茶のことく棚の前積へ並棗茶碗盆へ上け茶袋を取て戻し此先へ並盆を棚より出し廻して茶杓のことく棚へ上け置て棗茶碗出し　但しきて茶の始めなり

並付て茶杓と棗を茶せん並合する也
一 主方盆を出す　但し右のとをりにいたす　間ハ茶碗ハ末座より段々並て
一 主方棗と茶碗並合を附茶碗を盆へ戻す　但し段々茶せんハ盆へ戻り内へとる
一 主方盆を出す附桃香記録を書始なり
一 主方盆を出す間上座へ一礼終て札紙を取り右札方へ並き析せ戻して出す座札を取り迴らせて
如此
　通末座より段々めぐり茶せんと出しよる附主方へ戻し
　吸切り茶
一 主方茶碗を取り茶を点出す事前のことく

一 通菓銭なくぬく前札とこく

一 少菓盛出ニ附上座より一礼して菓銭取出しさして

札銭折居へ入出す　但折居ハ一度ニ通へ出し置ふ事ニ及てぬきハ附
書き札ハ置く折ハ一ツ宛にて入置のこらす札ハ方丈座

角ニ於ル勝の方より仕座風合ニ入と思ふ
扇子ニて払ふへし

通来ニ往菓盛ん出る附ミ方へ戻し方丈座

一 ミ方菓と点出るミ前のことく

通菓銭運ぬし前のことく

一 客方菓銭取出し札と入折居出し度へ出るとく

通菓盛銭迄折居取て執筆へ出し方丈座　但し通當

執筆札銭取し蹴て札と合せ泥掃へ書下

札と前のことく折居へ入補ふ遣す

一 口銭折居と出ぬるに積して入れ折居へ済み札一枚差

出し候と是より末座にて何れも座通へ出　但し座方丈座ハ

末座ニ出しも銭
勤むべし

通折居と執筆へ出文仕出候菓盛をミ方へ戻指

手へ入

執筆泥掃ニ下て前のことく

一 仕出候菓盛ん前ニ盛名一礼也ミ方仕出支へ前のことく

菓盛ん仮り置來盛候囲へ盛合候ニ詰しけり

一 入と法のことくさて亭子れ前ニ盛り盛銭折り出

まゝ立て挽茶れ茶入の前蓋状共迄し点状
かけさせ置き扇にて扇へよるか又ハ持手へ入るゝなり
又ハ挽茶れ茶入の記様とれて点茶の茶湯
其の客も戴して之を一礼なり　客さきのかゞ目しるとるれハ上るる　客へ記ゐく湯点えきとなし記附ハ

一　客方各座続立ちなり
記ゐくいてさまを上ぐ中　あさを一礼あるへし
挽茶挽茶茶続くゝ往迄え続けるくかぶり付持手
入

一　通ひ記附も即中にありて茶く式神の後浴の悉くに
茶き中流り而後もなり

一　中まで切り点ること〱なり　但し神堂式斗して往迎後中客　茶湯点迎し挽附ハ中客茶の神のハ打居
を茶すり挽茶あるも是とし
中立の内より置迎茶なり

一　試点ハ持手持れ末茶之続交ハ双点続点る茶よ高くし又く
共入りし双垂し何れ次よ何と云点交之志りまよ点るへし

同　無試

一　菓子種度を入るよ入茶ほとし共更長置り外家点迎　但し二種
三種式
四種

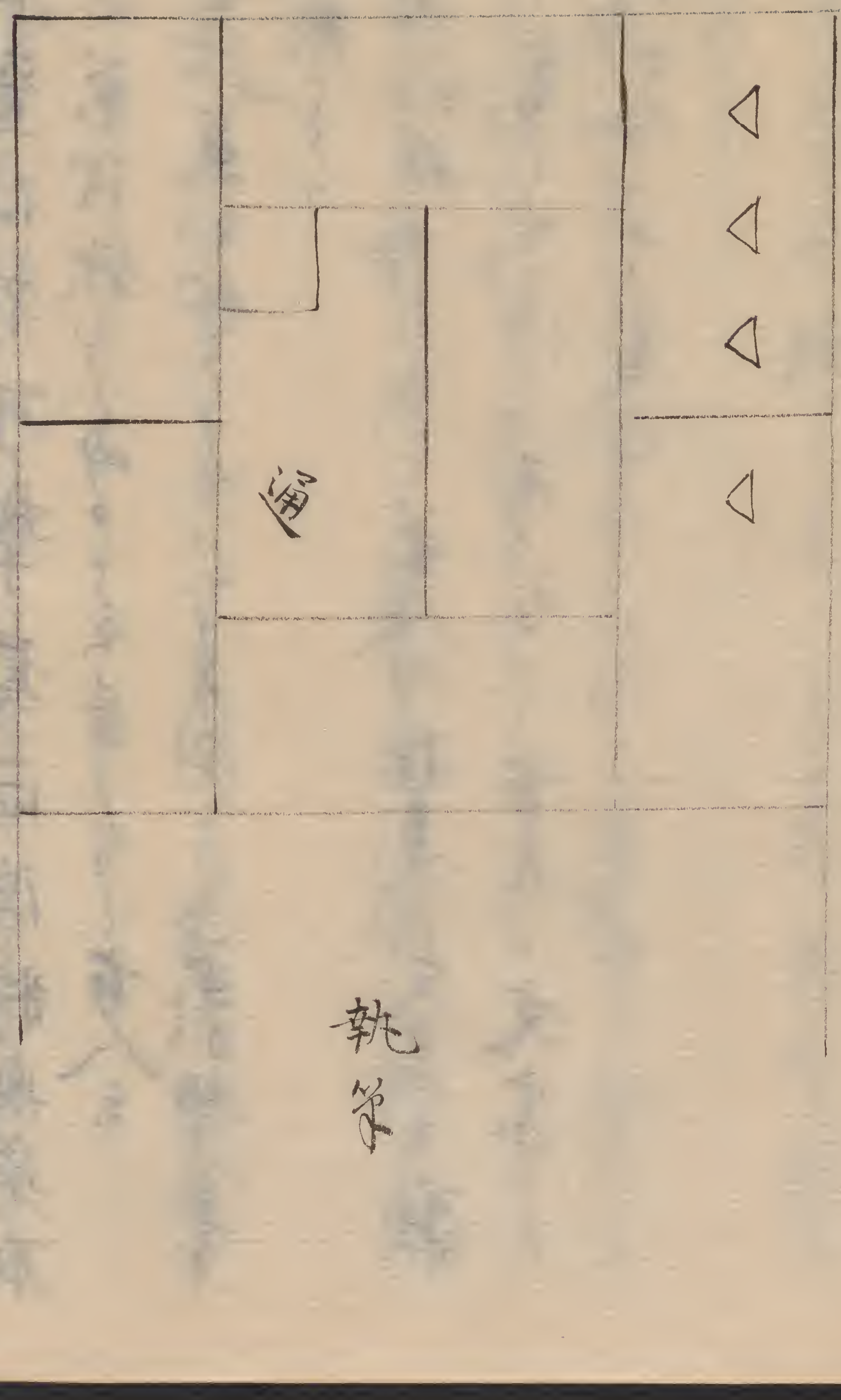
一　式法も茶れゝよ試れなり記斗して吉れハ主方挽茶通
作器茶のことし　但し札状下よ迎えハ茶出き　点あるとき花月の式のとし

一　主方柄杓とりて主客一礼ありて後主客より一礼して

札紙とあり且是也隠し是より一番は菓思の札也
に茶法のごとし
一 赤ツ札をば只何となく赤しと天狗と名付有るをはし
とあるなり理の利と見るべし
一 記録の書やう茶を用し客たる記録と識なるを
見るなり
一 茶碗二ツにて点る事もあり一客附し茶席相合し
あるべし
一 試茶の紙は猪子の板の如くなる人点を立て点るべし
赤更何の順とは何点と出し点つく点取なり

一 茶経闘茶歌
勝若登仙不可攀 負同降将無窮恥
一 昔本非の茶茂飲て有ると云事有と古人云
右之此菓は嫡きにては無本意と也菓は嫡き茶を
かしと思ふか
一 菓は菓は嫡きと云て菓人の植は文字を歌
作りて書も候ふ古来の文字をあら
ためて斤は茶と書るなり

茶ノ湯来歴説



且坐之式

一　花炭ニ濃茶薄茶
世人名付所以ハ花炭香を客方へ預して濃茶薄茶
ハ亭主半東勤る　但し通付通なし東と云ハ亭主半東と云ハ相亭主也

一　客三人亭主半東三人合六人ニ定として凡客四人まて東半東
以上六人までを限として

一　坐敷ハ何連ニ坐敷ニ用ゆ志かし花月式法の坐敷を
好て　但し八畳敷ニして凡ニ床形を定

式法

一　客三人詰合ノ間ニ茶者ニ花炭香から点る　右是ヲ　但し客只人の時ハ

香を焚く分り又花
炭香ハ野と好也

一 臺子棚飾を用 但しそこに子承に通客 栗肉を東ある通ある 延ふる人ちう是ら御事也 東ハ好みにして花入をうけ栗

肉线ある也し

一 客各出て菓子を附 東ハ東あるく茶碗をすゝめ居

通ハより花臺线持出花入の据例のことく座

付て持出て又 炭斗を持出 通ハ跡より相居る

一 通花臺を座付け 亭主线離近寄り附 東ハ客へ向一礼する

冊付花线勤る 客一人是を受て花をいける 支例ハよし

一 客花を入 出て茶菓子附 通炭斗を例のことく座付亭主

花臺を持入り 一炭保縁を持出て座前へ座付入

一 通炭を座付け 亭主同线離近寄附 東客へ一礼する

冊付炭线勤る 客是受て 炉式風炉の前へ行 出て

炉風ともに炉斗合用也 但自然香合かすり座或炭斗へ入持出ても随ゑ

かりまて香ハ為りて客前より一礼して炭を直して入香合を出し 但器可

陸附也

冊付通香盆を持出 通は跡より相居

一 客炭をする 事終れハ 客方炉なれハ 炉盆へ居

炭を見る事 右例のことく 向編 東ハ東にも炭を見る

さて炭仕但客出て茶菓子附 但風呂の時ハ花勤る茶番と勤る

立てふろの前へ行見るなり 東よりハ 東ハ井より通炭斗へ返しの後一人にて

後菓子の時ハ名出へ立つる也

一 通香盒线持行て 一人の客ハ前へ座 但し香线ハ己の人へ亭主之客へ対

さて炭斗も従して入又あく 菓入を座付炭斗入

一 通の炷り炭 但風呂の附ハ初めろくと置し 通の炷ニ炭居りて
客風呂の前と見顔て 炭焼て炭灰かろく 炭丸とり 盆と持出担居て
いまだ乳よりは薬入かきり前炷は炭

一 通炭丸を持 香間役盤ニ附東客へ一礼して香炉
焚客是役受る 但香と次客ニ出ハ名 さて 懐中より香炉
一度ニ礼を交るなり
おし焚半炭のごとく上客ニ出してハ香炉ニ少き試し次
座客次の客より次へ一礼して 香炉廻し出て 順し此めく
者東へ出ニ附香炉へ一礼して 香を炷香炉と香炉へ
持行く香炉香炉聞 但し炭も焚して入して名炉を
盤へ象前へ少おし返き也 但し香炉と香元へ持行前ニ座東一礼
此ハ上客之客ニ廻り香へ香炉を 出しハ是 香元座のことし盤へ家返き成り
のことを香元よかりと始なり さて香を次し 客へ行ハ是にて

して盆次へ出し香間ニ香炉次々客行ハ順し
是にて終るなり

一 下まて香炉焚ハ盤ニ附前のごとく試し上坐之香炉と取置
上坐させて 上坐より一礼して 順し下へ聞出し二通ん
しても是にて東坐の東役作置二人まても前のごとく
但し香本の上ニ焚者一礼して附
前の次香受し 香盤返しして附通盤をし

一 持出へ入薬碗を持いて薬入て座合して順し 持
おき盤の次 濁泉の所へ座元の前へ引し さて薬

一 東座て水を注しを持薬前へ行薬役出るとおのごとく

一 掃役と引盤ニ附半東して拠礼なり

一 濃茶点畢て上座より一礼有る時亭主も一礼して立
て菓子出入口へ仮りに置 茶巳亭主膝切り有る時上座
一礼有る亭主是非又く茶碗ぬ上座へ持行亭主は
時より置上座より茶碗呑く巳もし例のごとく茶碗
亭主へ出る有る時是く取り菓子へ返し
一 菓子茶碗を取り前に直し拝礼有る茶碗を直し前に
直し菓子盆時あり置
一 亭主立て茶前に着 但し替通指入茶を持出上座に出し 其の見入志してつく
棚に置き薄茶入を渡し 帛子にて拭き直する則濃茶
入と替る事もあり 薄茶点る事も前のごとし 但し菓子は二つにても点る

薄茶一通り点て仕廻ふ例のごとく水さし蓋して付茶
入茶杓袋客より好む又亭主も例のごとく取に出し
通ひ置くも亭主の座へ出す
取に出しより清のごとく取り入さて茶入茶杓袋
返有る時引事前のごとし
一 茶入茶杓袋は亭主より前のごとく返す通い茶入茶杓袋
返有る時拝礼有て亭主立て勝手へ入待合の間にお客
但し客とも其の見入有るなり さて上座より立有り亭主に立有る時勝手へ
続て菓子返り亭主待合の前にて一礼有て亭主通り返り
勝手へ入るなり 但し上座に立つ時付菓子は直すてもよし

一 通なき附ハ茶弁勧るへし 句論通の如し 此附ハ濃茶の附
水建を持出例のことく座ニ茶弁の前へ出し是より亦の茶
菓れやし 後茶碗を見て是より来る附 茶碗茶杓より
茶へ返し 挨拶もなく後茶を請る也 又 但し茶碗上座へ持行 ふる度茶弁茶入へ座るなり
菓子盆持出し上座の前へ置 但し濃茶ハ菓子なし 菓盆是るより以下茶
のことし 但し此ときハ菓子盆を取て出る附 挨拶にて出るなり

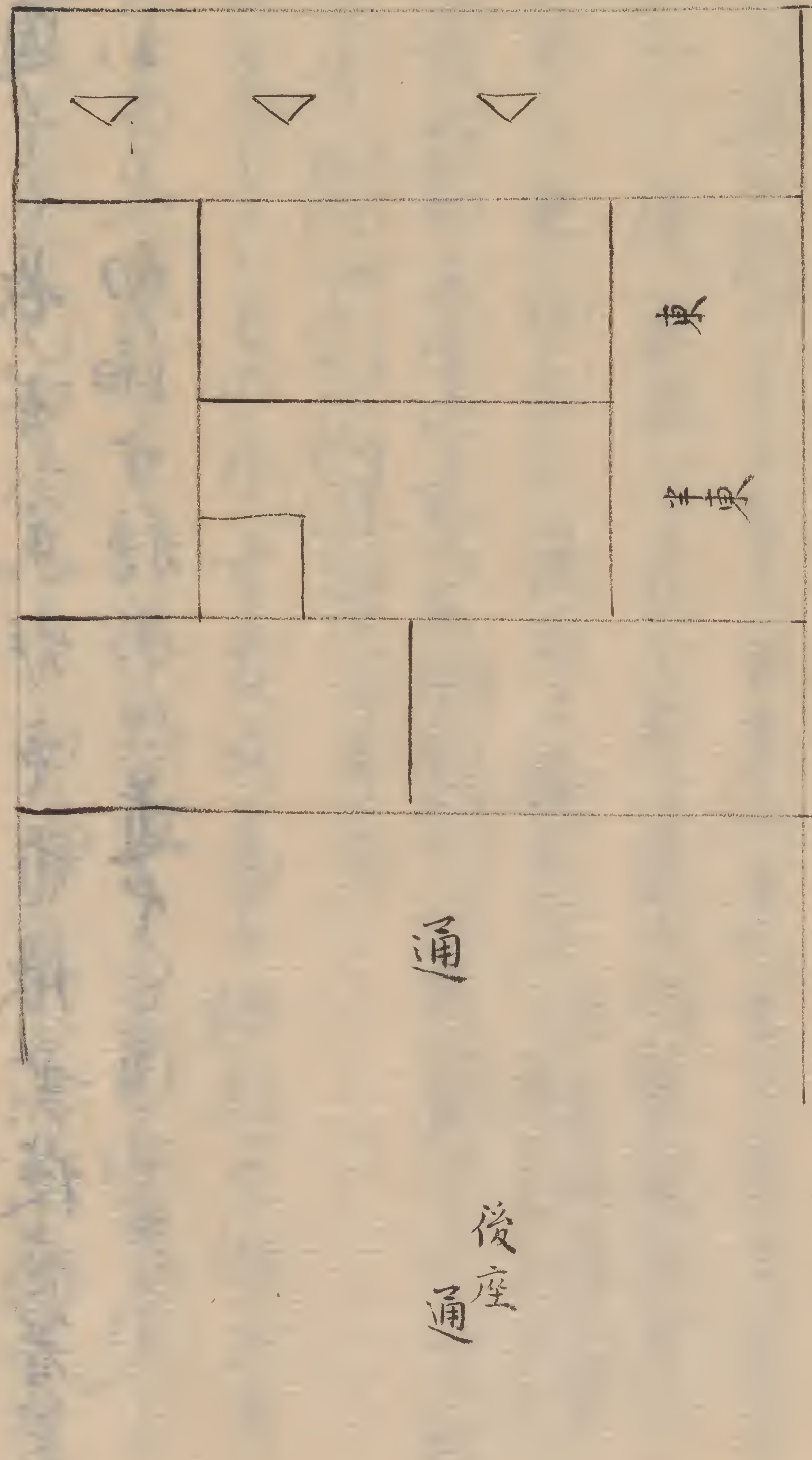
一 大意是ハことく其の外坐敷式菓子様尤ニ在付るの由い
取よろしく東ま東ハ作器まて亦東ハ其に依へし

一 夜分ハ花ニ付 謹るへし 句論茶の附々帰の様
ハつれハ是のことし

一 薄茶ハ付 菓子出るより各閑話なるへし

一 香道ハ長々香炉 香 銀葉 挟 香箸など
今も出るなり 句論十種香抔 道具を借り用ゆ

一 東半東帛可帯支



且ニ炷式法

廻炭之式

一 客各々亭主炭斗を持出掃除し炭斗前に座一礼之各拙ク礼なり炭斗を持出例の所へ座付て羽箒を出釜座を出し釜を揚け象様ニて引寄せ客も礼して炉辺へ寄る環ハ例様ニ環付様通りへ座羽箒を右炉辺を掃えのごとく炭斗へ掛炭斗と斤付け 但し所ハ象の通り

一 亭主持出入半田例のことして持出灰を左ニ右様ニしまて下火斗は火箸灰を右様ニより持添半田抜持入也灰保炉を持出例の所へ座炭斗を

相伴ハ座付茶のごとく道具座合一度ともまはし
上座ハ一礼するなり　主炭座附ハ茶のごとく炭と座
薫物を焚道具拝見し　炭後ハ入炭并文炭後其人の
所作ハ前の 所作る 但大名合ハ炭手前と合よの 座へ座てより先勝手も同 主掃手ハ入米田ハ茶
火箸添持出炭斗の座ハ座付手前ハ茶ハ 但炭斗手前ハ環通 行作ハ掃出全体
一　上座次ハ一礼して炉前ハ行ご上座ニ而右のごとく炭掛け座
さて炭を見てくして一礼して長火箸にて座面炭と米
田ハ上げ置いたし米田ハ掛座 但釜を附ハ火箸を添る　さて炭入れより
火をしとおき炭を座その火箸ハ又炭持ハ入座ノ米田よ
置ク也元の坐ハ直る也

一　脇ハかくのごとく何遍にても同事也　次ハの礼するの炭
揚の礼ハ二返めよりハ礼 但し引くと思はゞ次ハ一礼するなり
一　仕廻炭も上座より主方ハ炭なり　何遍付座ニ仕る
主方仕廻付ハ前ハて炭を揚げ灰をかへして出し
灰まき炭座仕廻火箸炭斗ハ入米田掛方ハ入置る
又其て炭斗持坐ハ直し羽帚を以炉廻茶のごとく
一　帚にて薫物をく 但し客合なり而座へ行ハかけなり 令紙掛け一度かへし
済しと立入る炭斗とりハる 但し羽なりハ付そのとき 炭斗持
帰しぬれくして勝手口にて挨拶礼ありて入なり
一　上坐始め炭座仕廻坐手前而付持手ハ入米田を持出

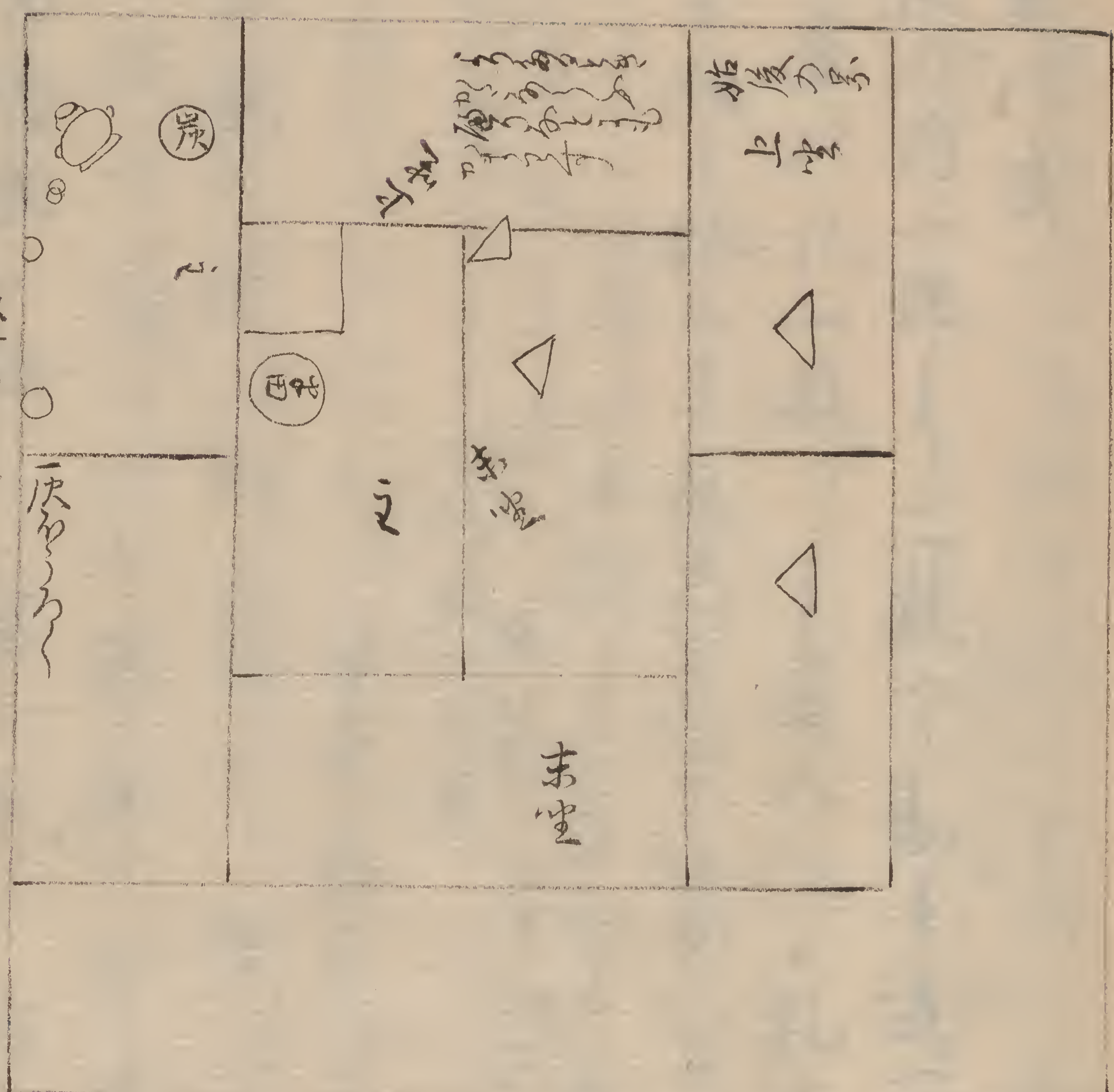
三所へ座付而坐ニ着也

一 上座仕廻候 炭座ニ而附ハ 炭仕廻上坐并坐ニ戻る
時ニ亭主会釈有るへし 茶候へし

一 菓子出様の時ハ 炭取候杉菓子座付 菓子候茶へ
よせ菓子と先へ能礼実也 左候へ相叔
見合随し 此時ハ仕廻茶入掛而 後茶のまし菓子
門出るなり

一 炭候内閑話有りてもよし

一 菓乃湯ニ付有る附ハ 前後揃手以て 礼に進むへし



廻炭式終

数茶之式

一 香之札十組の内一組より二枚にておち式一なれは
行迄も一を採 客之札一枚にて主客九人に札九枚客
の札九枚主客十人に札二十枚打出へに何をもけ入目
但し十人より多きときは同色々の書の札にて後のかはり為に綿二
まいつゝ入目 札多きときは打出へ開かし 客の札ととりはなし 後
為にも右書切合へ為ちまに入ることも打居大と目

一 亭主ゐし為すことなんとかし さて打出へをおいて
上客之前に差茶を運ぶ内上客より 次へ一礼いたり
て 客之札と一枚とりて順に出し 末座におゐて亭主も
札ととりて末座へ打居を渡し 茶を点て花のごとく

一
右通の茶まても同しかたちに通のときは其札をとりて何とかえへ
おきその札を紙を入て札箱へ入置へき也通る札とはなし置
多くの用なり かやうにて多くなりては二ツまてもとる事なし
一 末座札一枚打物置て是をまんと名乗合する客茶を
飲なり 此座にて二人三人又は幾人まても
もやい茶を出し飲よし通り 此時は二人分ては札二
枚出し上の人より 飲よし 札と共に外の者の札と
取替る事もなし 但末座札をとるは札に仕合の分は外の分と云 此ときは
紙合なる客同じ事の分は札入と外の札分は
言て茶のんとも
えの座にて茶を飲也
一 札をとりてもなし 又入てもなし 但引当る人の札は札箱へ入置也
一 茶は数十 主客五人又は十人に十幅を定とする

一 かくし置きて是も用ひ静に詰して茶を飲也
一 客多き時は金二ケ所にかけ南方一度に出る也
炭をなし出る事百幅まても続出る也
一 末座は茶を出茶銭飲通を札茶銭飲は
一 数茶は一种和なる也好次第出るも定は成合は客
一 濃茶へ花月其の式を用合作て用る茶は客人に
く併なれ秘書にて云ふ附也主人好に
但し面白き事は多くの物なしか様にして其のる物には主も
へしいかに用いる茶末座にても緩和ると
見合つけて用ひ此中後評ときしる時志し次第もやい
定る仕通り能也

以上數菓の式終

菓ハ湯刻限

一 昼ハ茶乃湯　正午刻

一 夜咄乃菓湯　暮六ツ時　古ハ七ツ半頃より

一 朝菓ハ湯　朝六ツ半時

一 暁菓の湯　明七ツ半時　古ハ七ツ時より夜也といふ

一 飯後の菓湯　朝飯後　夕飯後　菓子菓ともいふ

一 不時菓湯　時ならす菓子湯ハ菓子湯にて客人来りし時茶菓子と書けり

一 菓ハ湯ある時ハ客より前後亭より案内挨拶あるへき事

一 客後礼あるへき事

一 口切道具組の変

一 路次之儀廿弐ハ戸押ニ而天井押ニ而取ても見合ニ而可致事
一 路次之第内ハとしハと見へ外ハ掃除ハ第一と見へ尤掃除ハ毎年きくりにても可致事
一 茶箸さん箸等ハ煙草盆灰吹等可致事
一 塩ニと炉の鍋並茶釜薬缶等ハ右ハ早速可仕切 前段ニ志て之事
一 路次松葉敷詰を植也 床下見合可致 尤一寸以上ゟ外ハ不宜
一 松葉揚候の事 内路次数寄屋続ニ而も大晦日ニ揚置 春も遅ハ又正月末或ハ二月ニ入まて路次内路次を揚可致
一 風呂之儀 外路次ニ残揚置候ハ前之晩ニ於テ取ます可申ものなり

一 手水鉢掛ケ数寄屋続方ハ枚也待合の方ハ桧之
當日薬缶湯乃式
一 数寄屋之もし路次ニ而も可申し
一 四附釜之事
一 掛物を掛申事
一 路次入候之時ハ戸中門いん戸或ハ猿戸等ニ而能ね致可し
一 路次ハ待合ハ先ニ路次待合と仕舞置候處ニ而も宜ニ候
一 先待合之ニ志め切之事
一 先より内路次と構へ客待合へ何附有之ニ而も
かくさる者めなり

待合

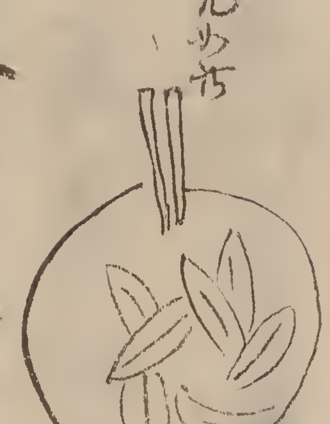
手あふり たばこ盆 ゑんざ

下座の方

夏ハ手水鉢うつし書院なとに手水鉢置
秋冬ハ内ハあんとう上の方へおく雨降り
雪降り笠客数程待合に立おき下駄
おの飛石へならへおくや

一 ちり穴ハ青葉少し入ちり箸立かけ置也

ちり穴之図



一 掛物濃茶薄茶ハ炭を組灰とらしらへ香合茶入飾支度
あつき也

一 料理方しらへ取肴支度

正午客来り案内を待合へ通る

一 亭主数寄屋へ入炭を持出しかつて精出し座付茶揚灰道

一 下火並し炭を出して莨盆横へ釜をかけ炭すらせて支度
一通り済候て茶碗を改め釜蓋切かけ手水鉢へ水を入待合
案内ある時中くゞり戸をさし数寄屋の戸少し明かけておき入る
客ハ手燭持中くゞり戸外の飛石に並び入る
客方一礼して一人づゝ手水を入る也茶入用に上座刀掛に
刀を掛附次の者手水使ひ上座より入たる附次の者刀掛へ
刀かけ上座床前へ刀を附次より入上座釜前より入たる附次
床前より上座かけて附次釜風炉へ刀を掛け入て道具
客ハ上座手燭持客一同手水済て来り手燭
手燭を右に並べ手燭を入手燭末座刀掛下の道
右の上へとき入たり

手燭とり

一 亭主は勝手口にて一礼ありたらは礼をのへ上座よりかけあの
ひらきよりして

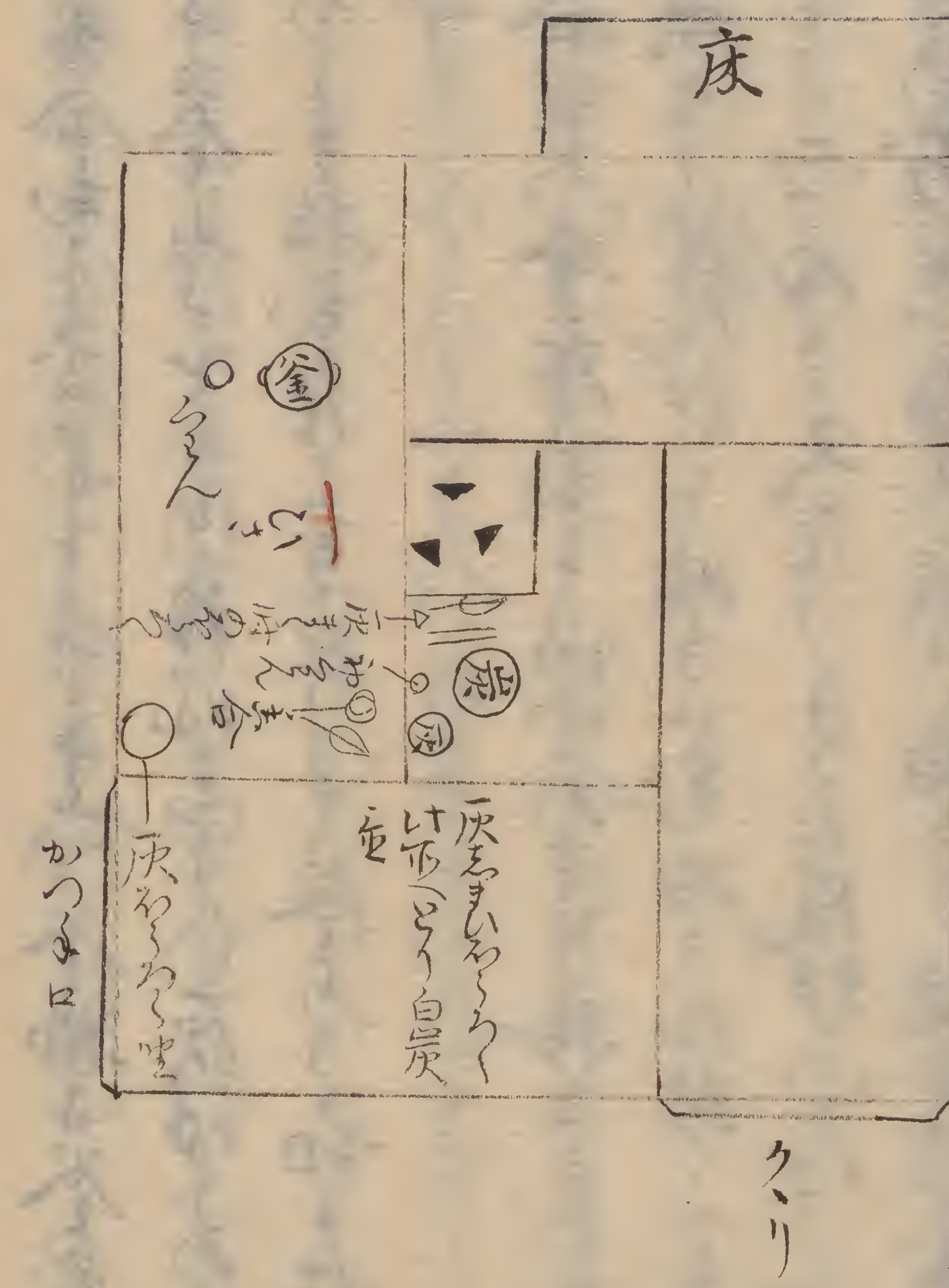
一 亭主炭取を持出座付灰なとなく持出始まりて炭を
するの也常也

炭の順

一 一ニ羽箒 二ニかん 三ニ火はし 香合座付 四ニかんかける 五ニ釜敷
あまた六ニ釜揚る 七ニかん直す 八ニ羽箒にて 九ニ火はしにて下火を寄
十ニ灰かきて 十一ニ灰まき 十二ニ灰かけ 十二ニ白炭然
くつけ入れ 十三ニ炭をと座仕舞て 十四ニかきあけ 此れ亦羽箒
羽箒と云羽箒炭入れ揚る 十五ニ香合と羽箒との出るき容れ

香合おき香合あけ蓋とり下 十六ニ釜掛る釜敷志まひかん
はつし羽にて釜のことくき羽箒志まひ灰はらへ持入る座炭取
を持入大羽かへき持出座まき迎して釜かけ切りけ香合拝見
とりいるなり

一 炭仕廻香合取入会席出して後は客へして勝手口より入る 但し風
炉の時は炭なしに風炉と申きは口へき客の座へたゝみ
風炉の右の方二ツ申き 又右の方は風炉の左の方二通ん申き
右の方は風炉の前と一通ん申き 申くさ衝立付 勝手口にて居く
会席出まきらいんへいりまなり



膳出し順也

一　膳不残出し勝手口を志める

一　汁椀（平皿又ハ肴の椀）勝手口ゟ出し汁替より可出し

一　飯椀出し煮る一通ん通り

一　中酒出し

一　焼物出し重箱組合せ物ハ又ハ八寸ニて出しとのか

これハ三菜の時なり

一　飯椀出し汁一通ん通り

一　酒出し上段飯汁重し汁飯とおし一寸ふた四合挨拶、

任まへし

勝手口志め出し

一 勝手口明ケ吸ものを或ハおそく音なとなし
出すへし

一 引さかな八寸にても出すへし 一献にて持参致し置し

一 酒をすゝめ挨拶ニ仕て酒ハ出るまて

一 湯をかけし 器を引 勝手口へ入

一 頃あひ見計ケ湯を出すへし

一 さ付客湯のミ仕廻ハ勝手口明ケ直ニ器引 又湯仕廻候

又勝手口を締る

一 器引菓子を出し勝手口を締る

客中立

一 但し風炉の時ハ器引候ハ抹茶炭を直し菓子をと出し 客中立

一 客中立後内勝手之式

客立られ後炭を継直し灰なとをこしらへ掛物へ茶碗仕込水指

ならびに花入と掛物へ花をさしらへ花入へ継ぎ物のこし掛物を 菓子

直まて掛物へ支度いたし小座敷を明け先へ戸口と

並に掛ケ置のをとりて釜のふたをとり座中拭き筆を拭ひ茶釜

ふた切り花入をとり付花を入茶指を直付茶入へ直付水指へ入

入るゝ口明け客へ案内致す

案内後之事

一 上ハ亭主あるハ中ハ別人とあるへし通と申すか

一 下ハとかく嗅燈光ハ常帰同様の事

一 どら打やう （大）（小）（大）（小）（中）―（中）（大）
但し五ツ打時ハ上の大小をぬく又ハ客人数程打也
右三通りなり

一 喚鐘 （大）（小）（中）―（中）（大）
右五ツ一通りなり

一 亭主是迄上下着之段ハ常の席

一 客手水つかひ入るなど其外常の通り

一 客入仕舞て水鉢へ水を入探りけのたるにほんへ手あらう
とうり

一 客座居亭主茶碗持出茶入と並合水こほし建水帰る
座持出始末メ柄杓一持出

一 しけ付客より花の挨拶

一 濃茶点前ハ亭主常の通り

一 客礼式常の通り

一 茶仕廻道具引 亭主炭取灰器持出炭とる
来初の通り しけ付灰とも薫とたき炭とともとる附よりとる

一 炭仕廻てんきも添たびとなおし 亭主もたびとお仕てかへる

一 後入なし 薄茶点るの花の通り

一 薄茶点ましい客一礼してへるしけ付客待合お待合出る

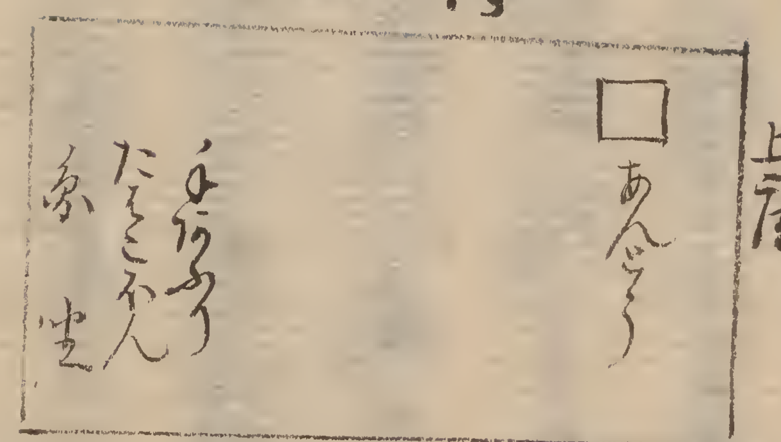
一 亭主客待合へ行附ニ座敷より出て待合まで

一 礼してへる客各へ入るたまり

一 客入りて直ニ数寄屋路次仕廻申さぬよく〳〵客衆ハ茶を
うつさるゝ路を仕廻ふ事あり
一 朝茶丸湯の残りしハ宵ノ中付 朝六ツ附より路次を
うち仕方あるべし
一 数寄屋釜を掛けて新炭入六ツ附より仕方あるべし
御炭の時灰を入候へバ行口を拵へ釜へ水残し行口へ又
改て釜炭炭を入
一 さし水極く少し付候て朝茶丸湯炊事かけて置へハ
一 夜咄ハけ釜かけて客衆に不為なきよう水少し入釜かけ置也
一体さらりと致す朝茶丸湯の加減 但風炉の時ハ炭 炉ハ同し御法に候
一 朝茶丸茶湯ハ七ツ附より夜半中付 菓子前より夜明ケ 目覚て

一 外待合へたばこ盆手あぶり出し金燈籠ともし手水桶外に
またともす 内待合にも燈籠ともす
但し外待合なき所にて腰かけあれば内にたばこぼん
手あぶり置 燈籠へ手水不ハ本燈籠なり
一 石燈籠ともす

待合



一 二畳ハ戸を残し入口内見合せ
潜りき所窓一ツ・戸あるべし
いくしあく

一 数寄屋の内ハ掛物なし 額築或ハ竹築 木燈籠中庭なとよし
但し塗台より以上ハ額築之事 以下ハ木とて壺外築畫燈臺
一 客神入て先膳菓を出すへし 仕廻て炭を以後座をおこす
しき燭の菓ハ寛く出すへし
一 掛物花極なし 茶菓極てあり 主外替ることなし 夜ハなし
少し祢よりよすることよし
一 額築とてしん数七節 長さしん 但し一節にて高さと
一 主外ハ又主し 長七寸なし
一 石燈籠木とて油ヲ落灰ハりんとて三節 長七寸程何ほとも
そのまし中より附る
以上

一 後段菓ハ湯浅方替ることなし 昼菓料理の取かきあるへく
一 客神昼飯前酒肴菓子又ハ酒肴菓子又菓子なとあるへし
右三通神社の仕形主外 昼ハ菓ハ湯にて少し替ることなし
以上
一 跡見の菓ハ湯 昼菓の湯の後入又茶をはこふなり
昼ハ客に入り待合へたまご見せ社とて神々の通りおしまい
菓肉をあけり客来の附達もり其の後のとりあへ
一 数寄屋にて神の花に水持と座付神々の菓へ菓のこふこと
住居と後あり帰り付る客座敷へ入たる内菓碗持出指て
客へ挨拶あり客も後あり済んて挨残りし菓碗
菓出る又ハ菓碗持出し先指下只に持出挨拶して後菓碗持出て菓すすむ

一 炭を直し熱くしたると見ゆるとも常の茶の湯の
時分よりハ何よりの事なり

一 花の花生置たりとも二通り今一入やゝたりとも二度まても
するが亭主の業の大意なり

一 墨蹟なし茶の銘も見るか無見合せ以上

一 不時ハ客来り案内ありて先待合へ通りたると見計らい
庭あるを手数客座敷へうつる

一 客来る時をかんかへ朝六ツ時より来るハ朝の茶の湯なり
来るハ飯後の茶九ツに来るハ昼の茶八ツに来るハ夜の茶

一 其来る時によりて亭主の茶式後段料理を何へきと
さりとせしらい後なり

一 不時ハ不時なる由へ事たらぬと面白き手作以上

一 客の菓子ハ皆るわけし合席お伴なり茶も右伴する
先極て出しさしハ不足あり誰も二重外客さ引してもよろし
する様よろしき事

一 初座ハ客へ之主座と称ひ其座式接手ハ右方へ居てお伴
支より通の者勤る湯をへへ主先我炉をかへ相客ハ接伴
川菓子出し接手ハ志める客申立

一 菓子ハ附之お伴ハ居る所に居てお伴までの仕舞客より
茶碗取出る右の外茶の湯かくらへるまじし

以上

暁の茶の湯

一 客七ツ半より来る

一 亭主ハ夕七ツ半時より寝もせす中付置より残火をいけ置す

一 或ハ夜より直ニ七ツ半時客来る時ハ火を入とも置す

但し宵より火もとも夜もあいなおとも時宜して出也

一 路次の腰掛の通りなれ共

一 数寄屋ハ行燈なり暁ハ茶の湯ハ行燈を持て 数寄屋の戸を入る

一 客来りて通りて亭主入極腰掛の通り待る事なし

一 亭主は茶を点る茶仕出し座をまわし炭をして腰掛付紙に入り

一 して客よしも行燈を直ちして置す

但し客より戸ハ窓の戸をあけるとふたりとあて客ちき事なり

一 前茶より炭を仕出しまて数寄屋に濃茶一也

一 炭の時釜の後挽掛かへ柄杓へ水とり 釜をかけるなり

当時ハ湯の水へ水を入湯さめとふって柄杓掛るよし

是ハ数寄の内ハ茶の道具ハ行燈にてハ分るとなり

一 掛物花入

或ハ掛る事なし腰の内ハ置しば行燈掛けたてなるとも

いつも事多也しかして 付腰掛も茶の湯ハ炭の外ニ茶

掛物ニ客も切出入る道し

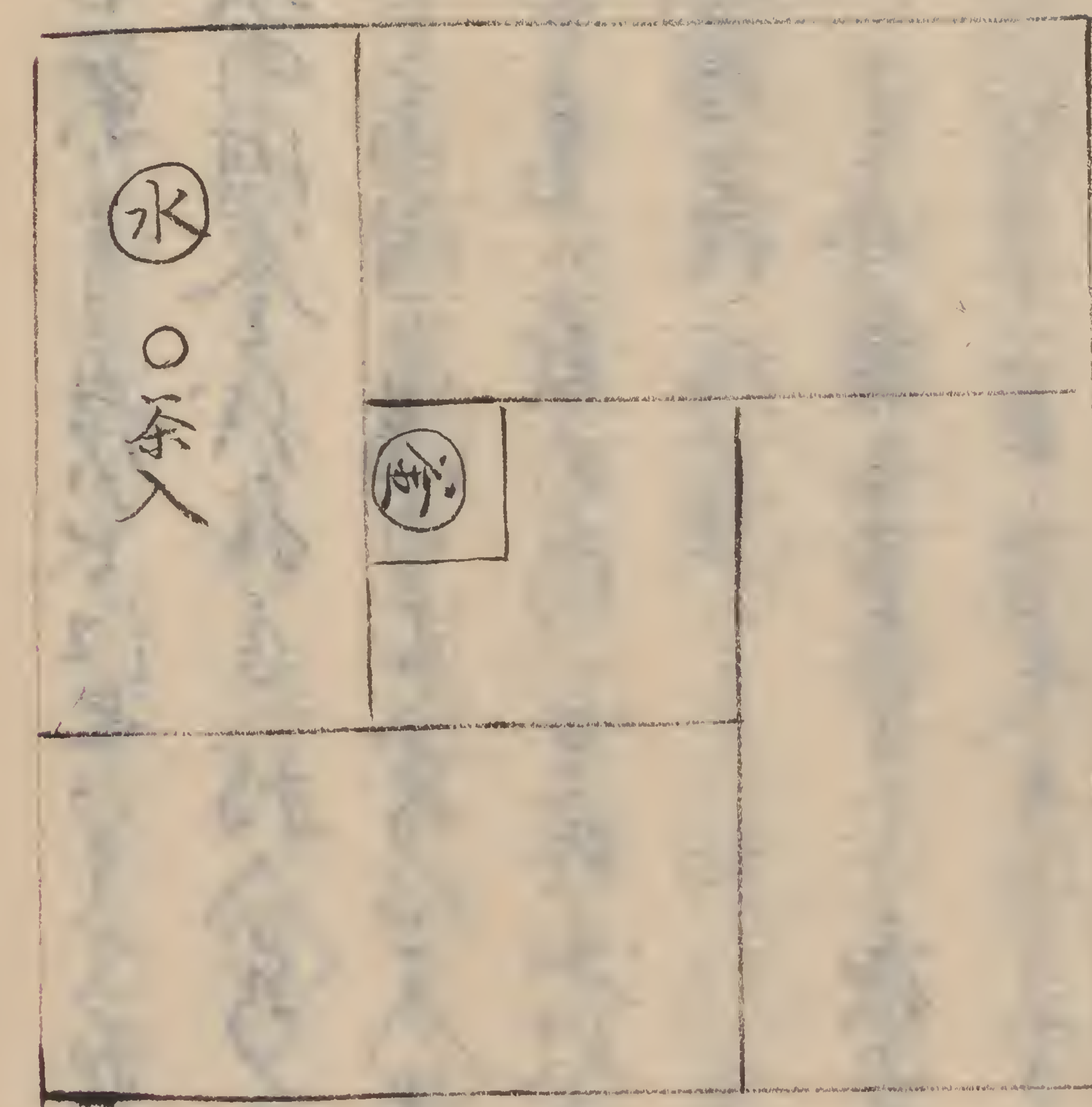
一 宵ニ釜かけて湯より水を時かへる火ニ残し置なり

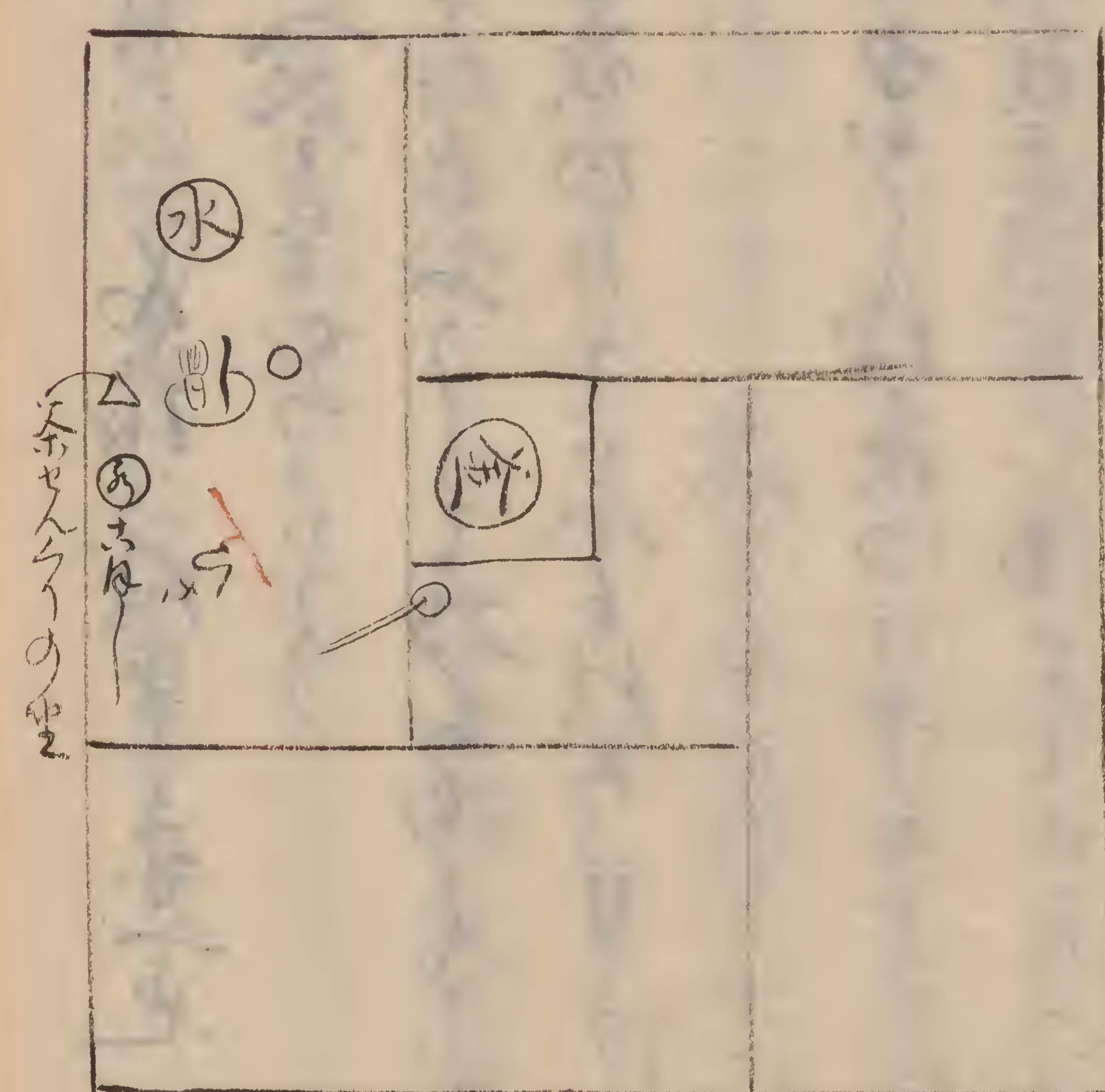
一 暁ニ火ハ火へ灰をとり継ぎしハ水を直し朝客来りする時

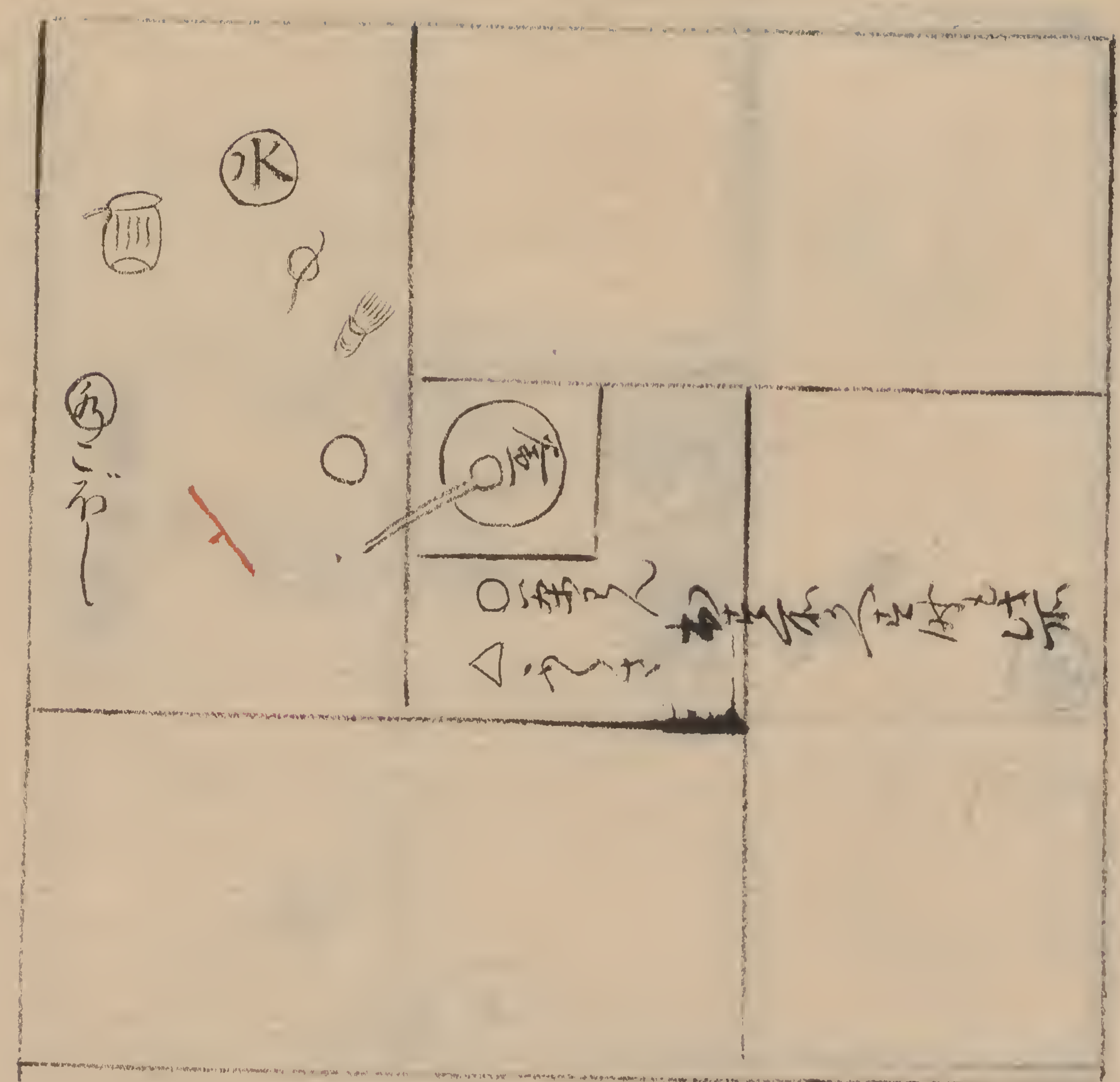
一 けさ火とも夜かけて釜からけ水へ取直し出すなり

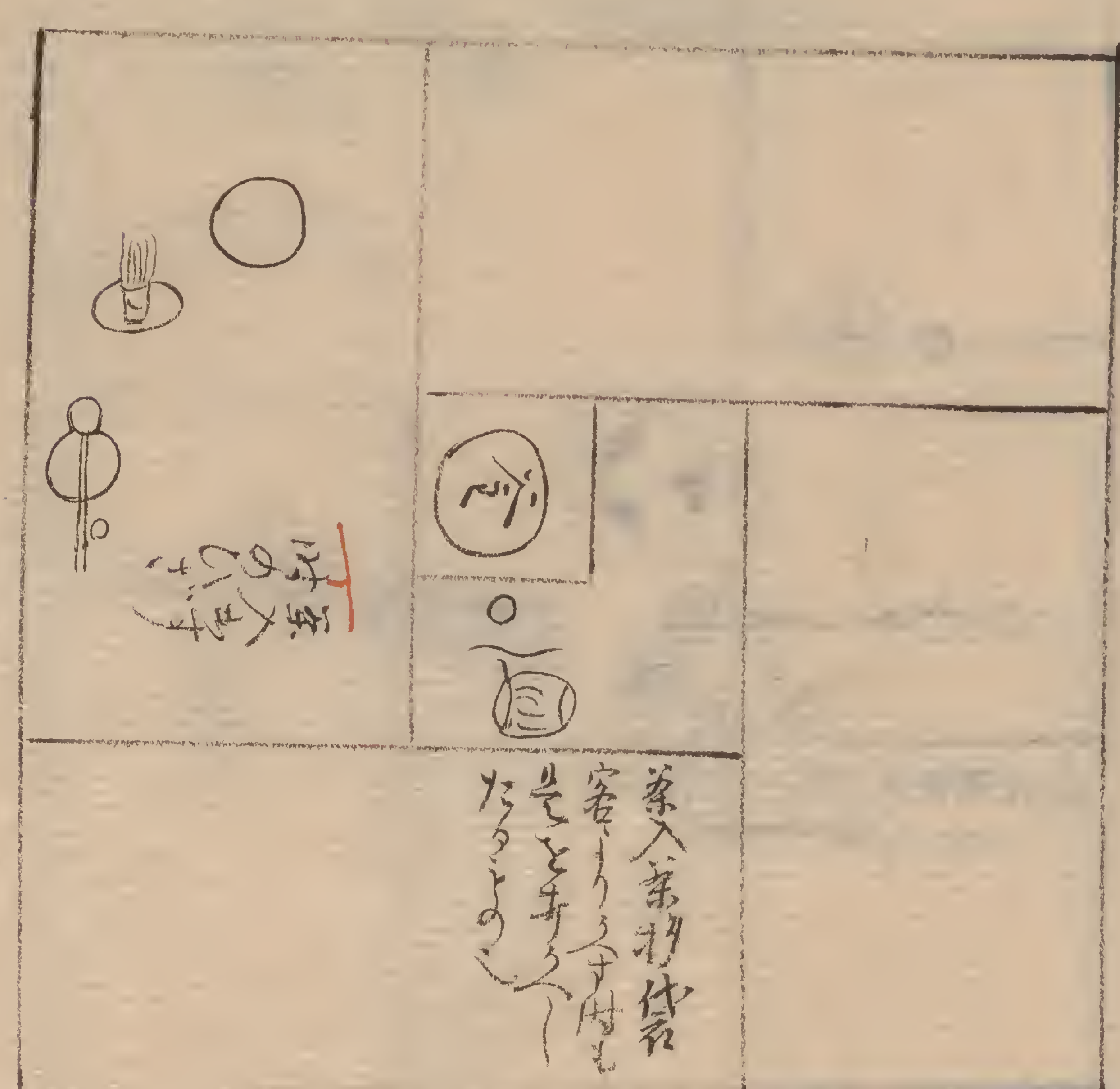
以上

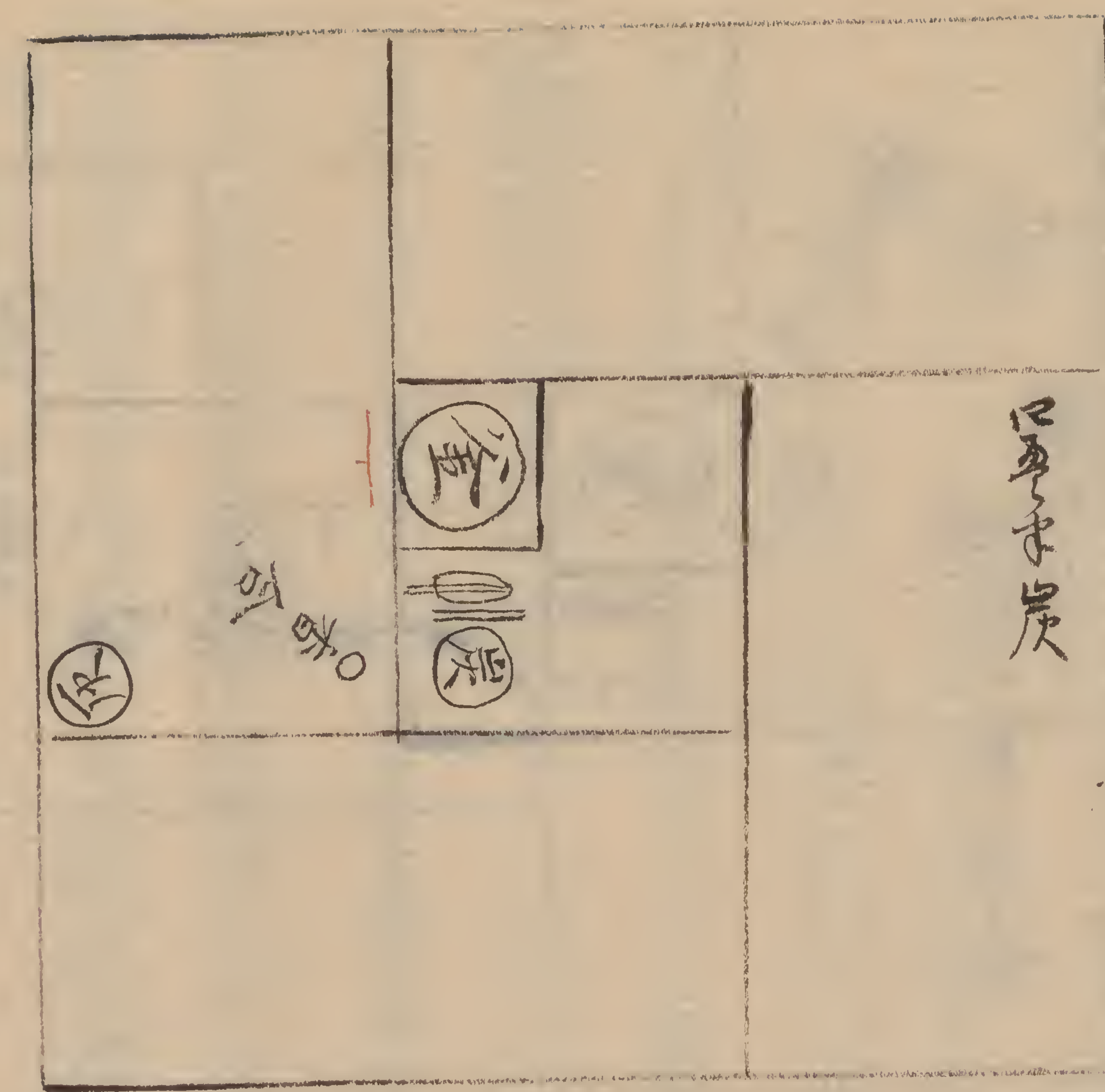
四畳半逆合

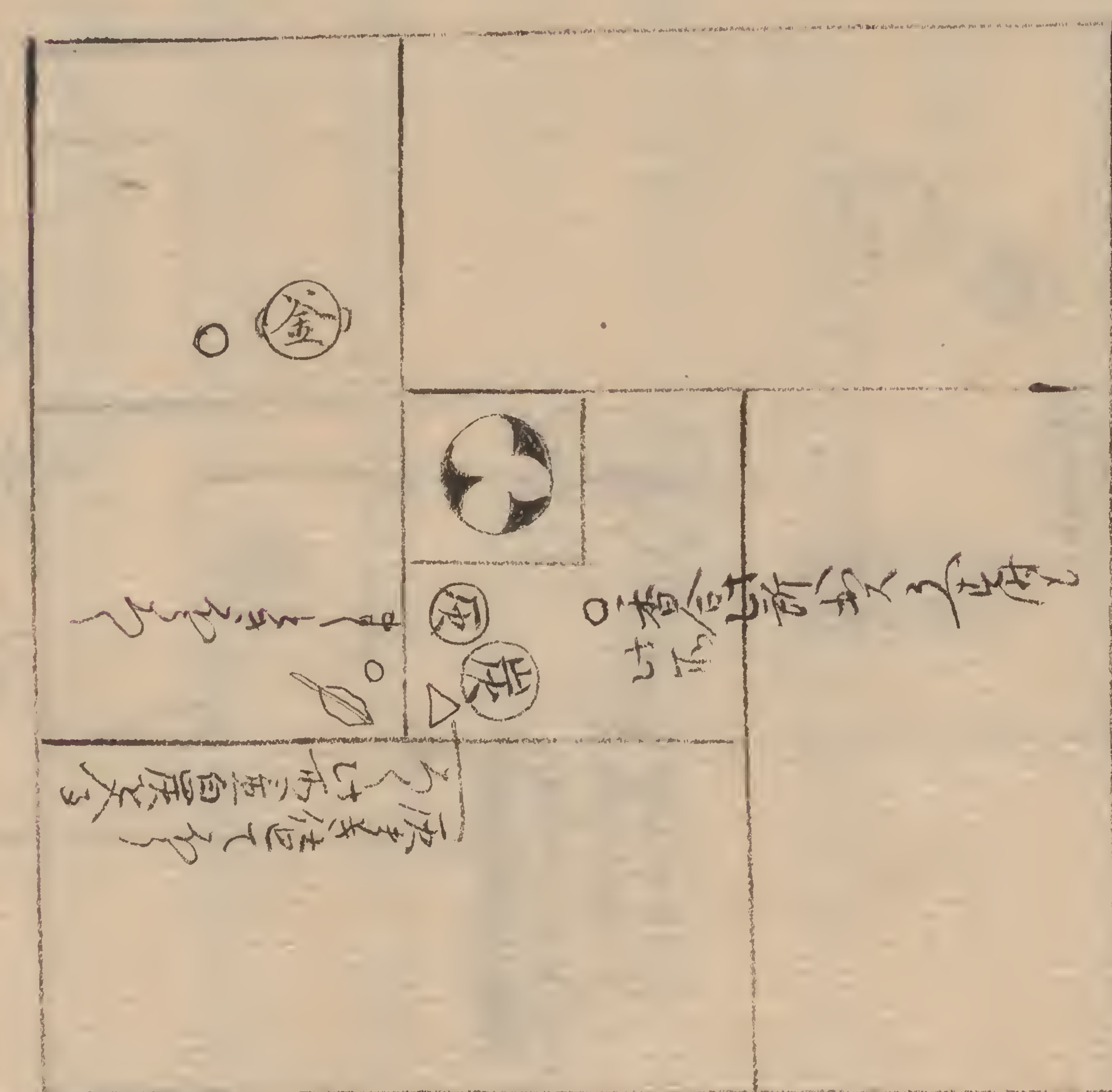




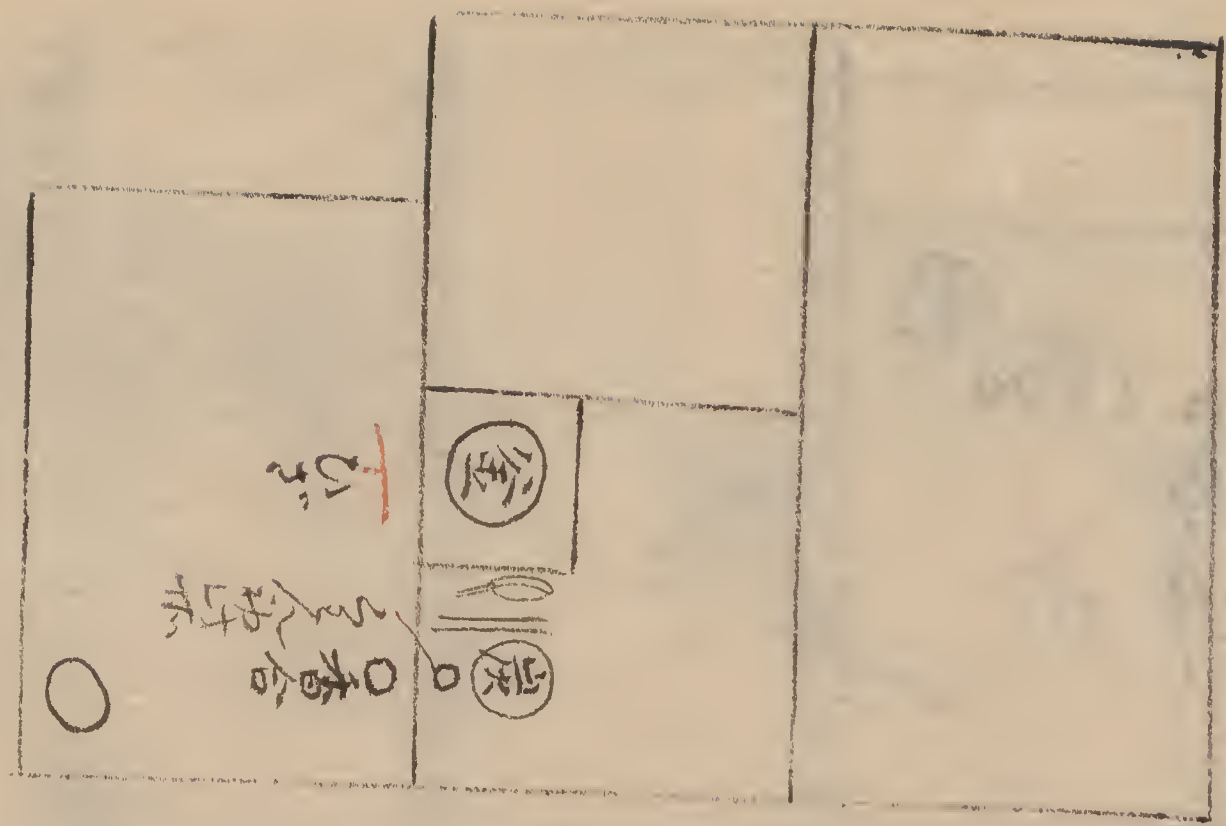


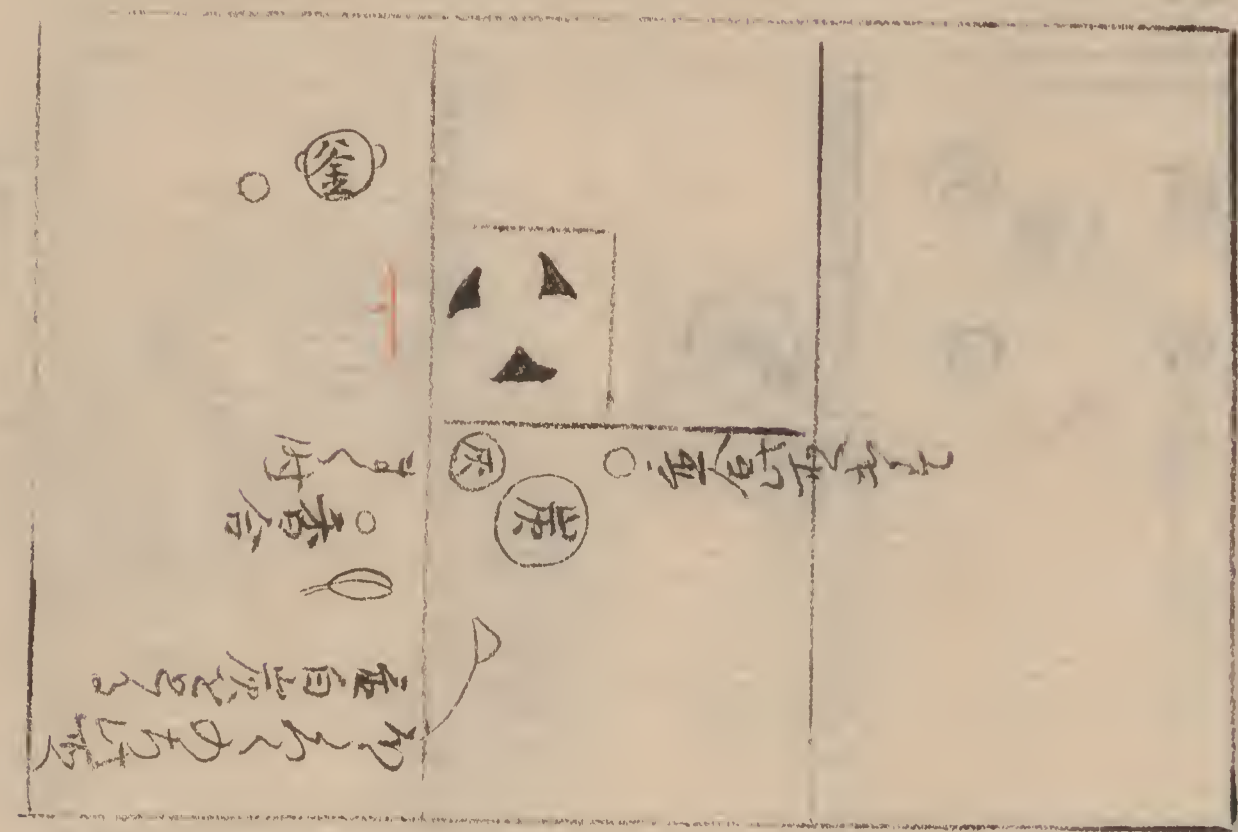


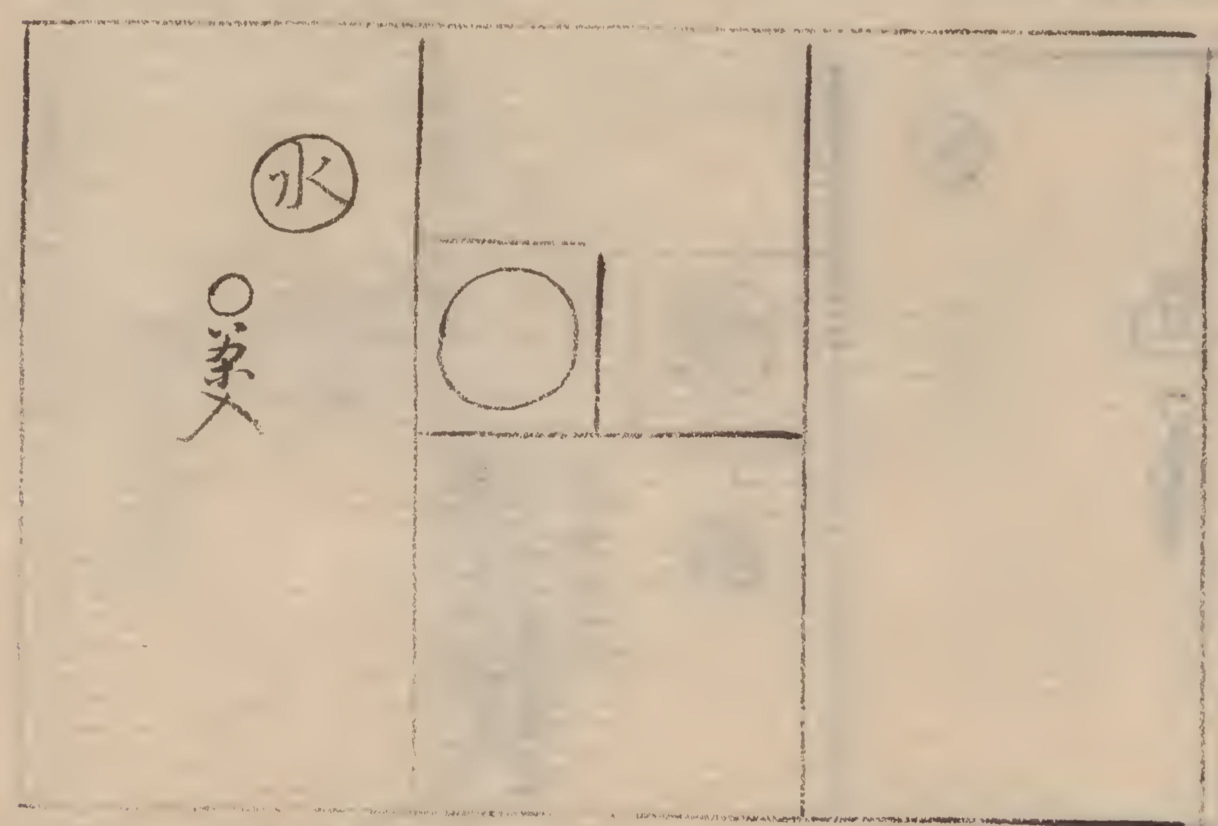




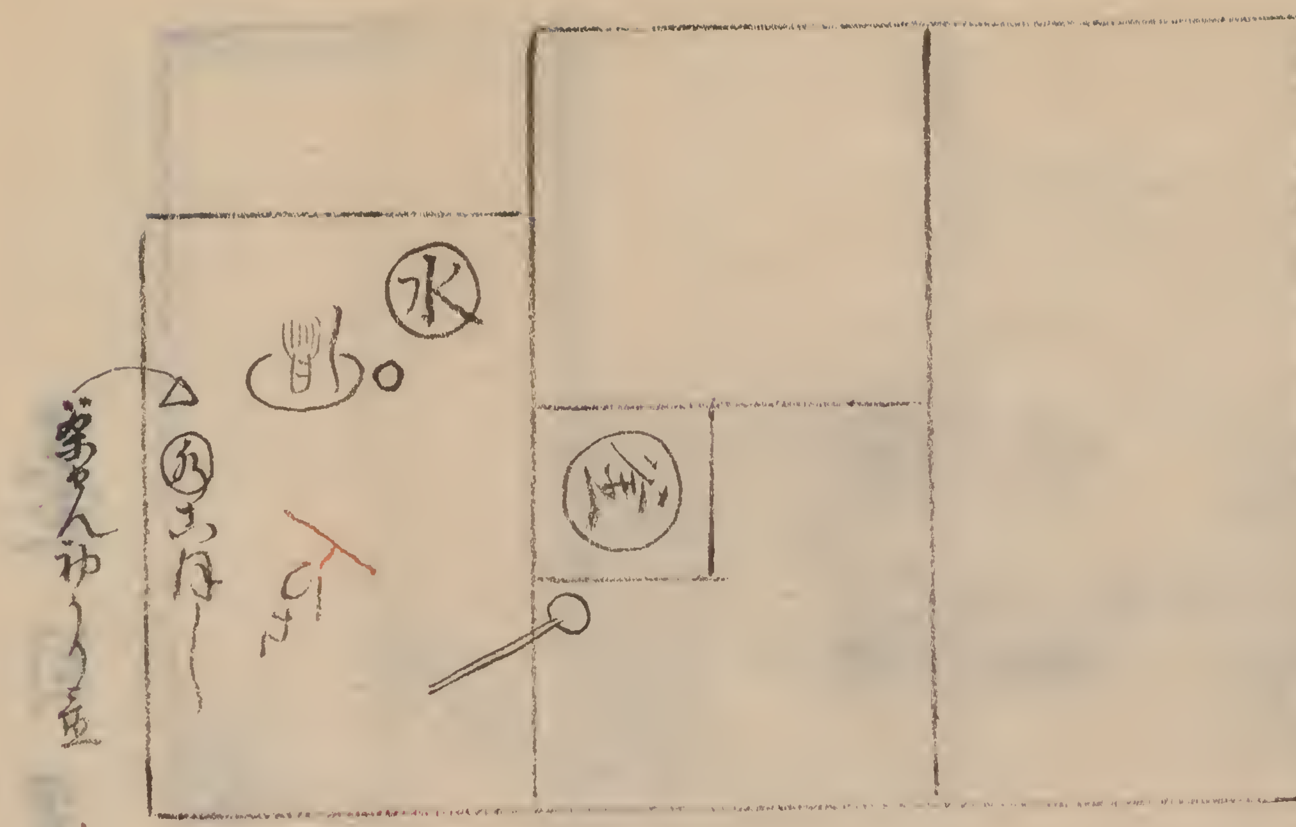
臺目置合



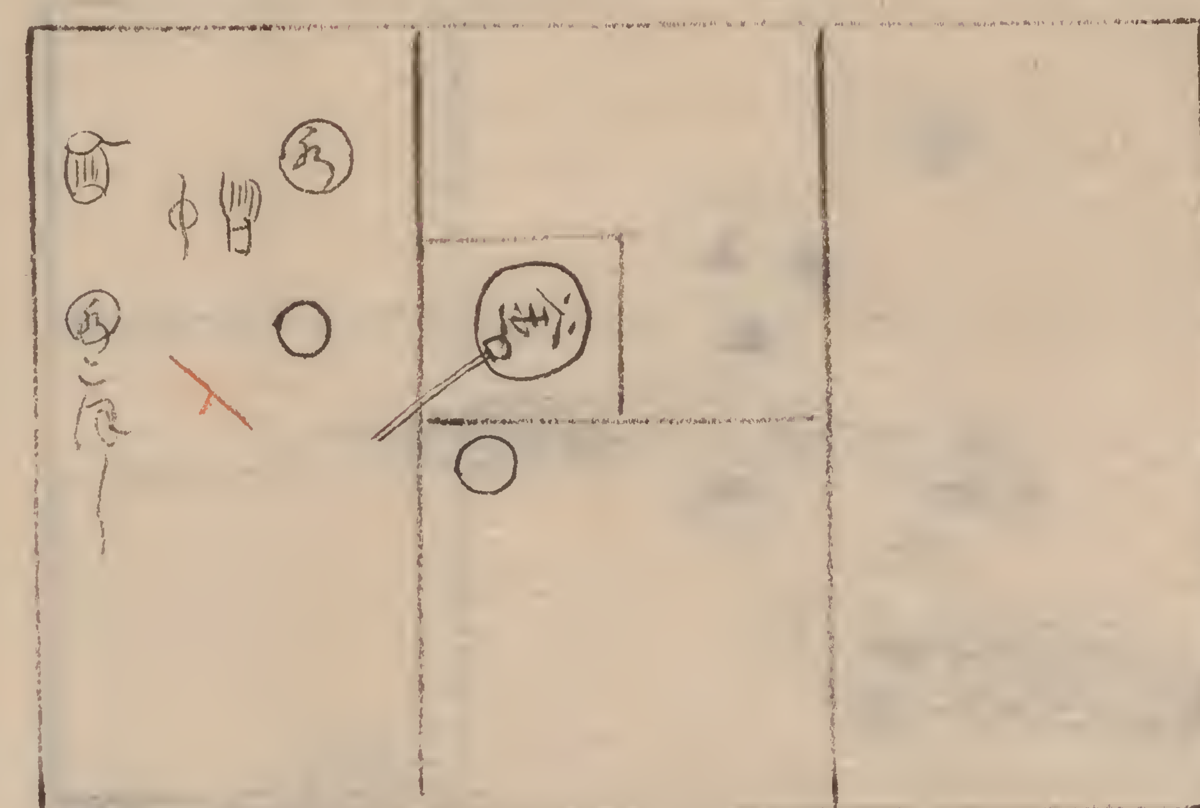




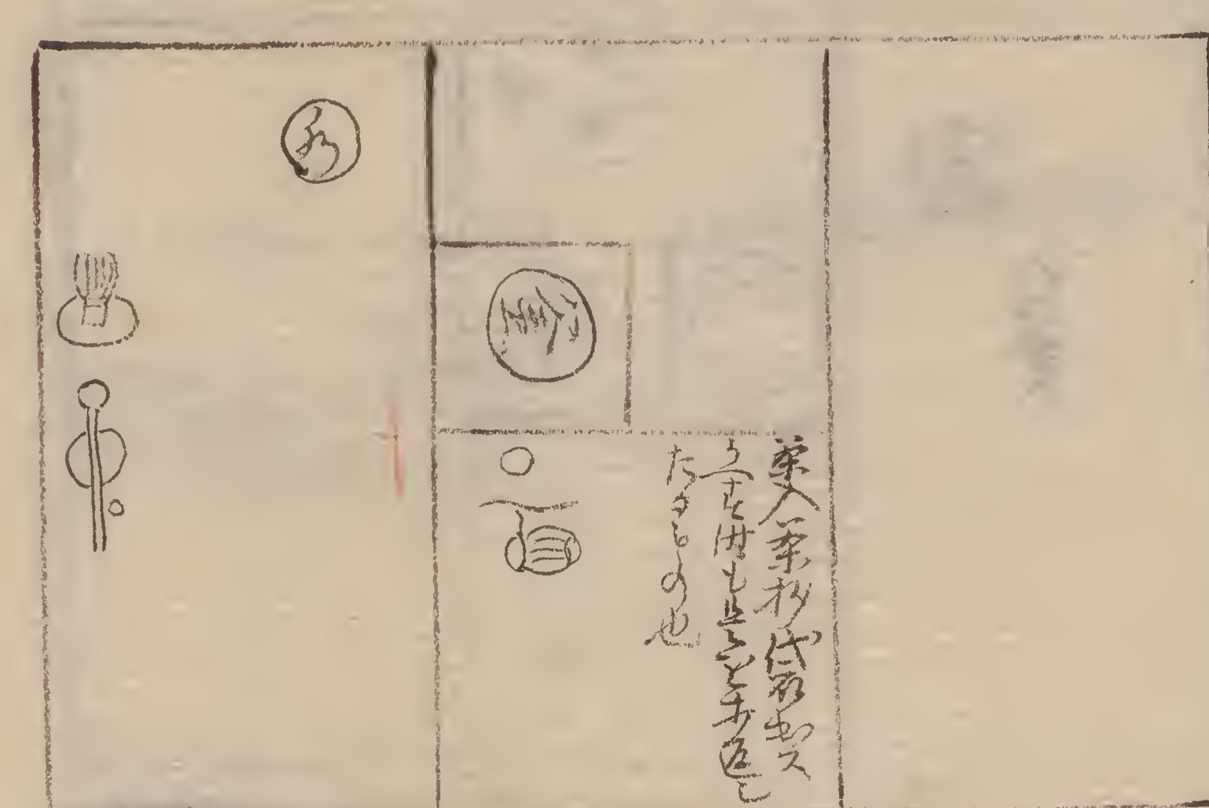
臺目



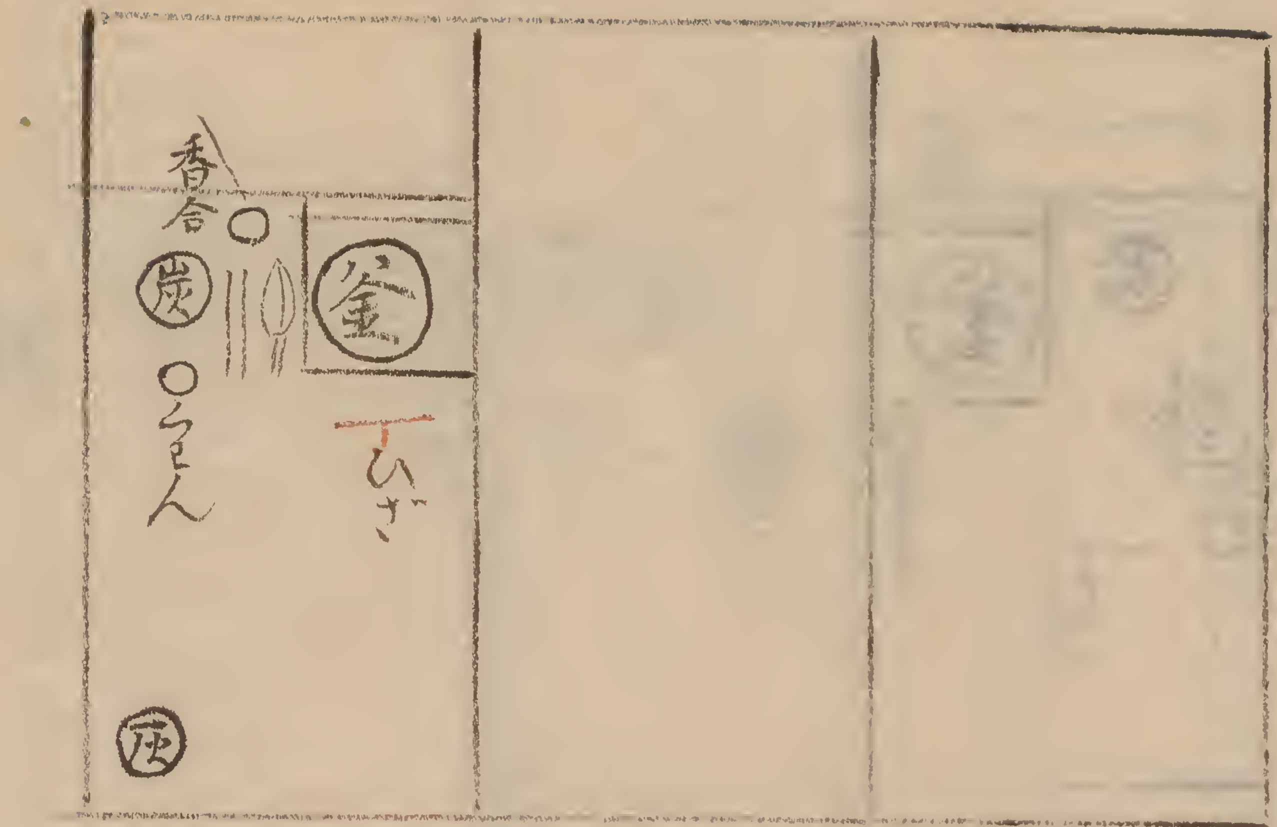
同

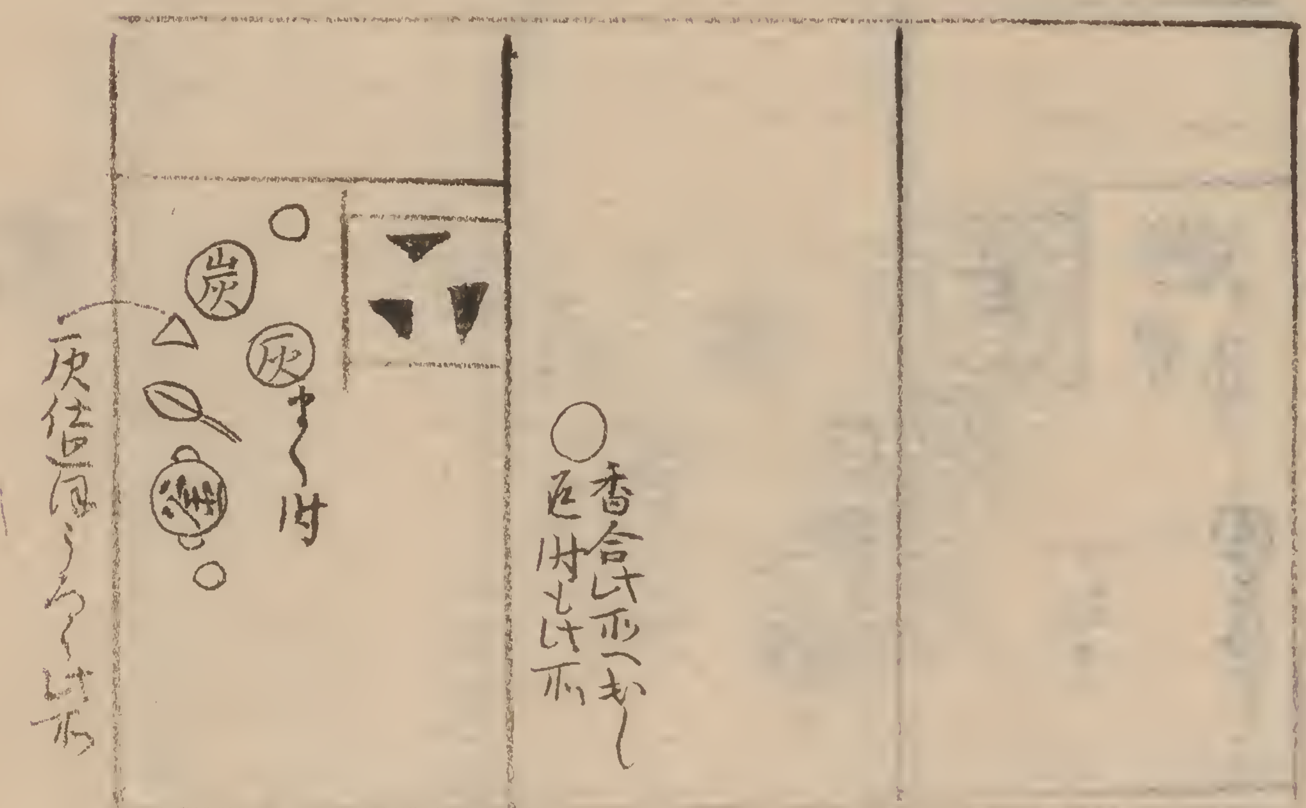


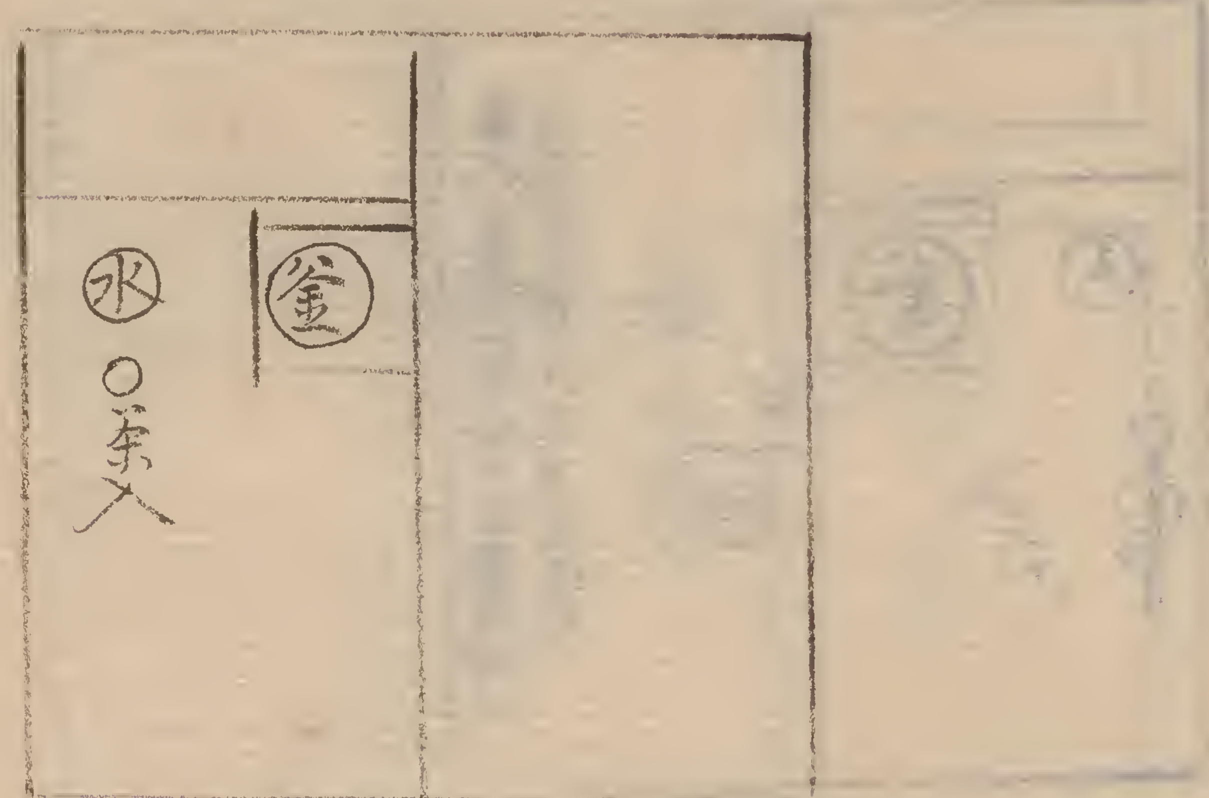
同



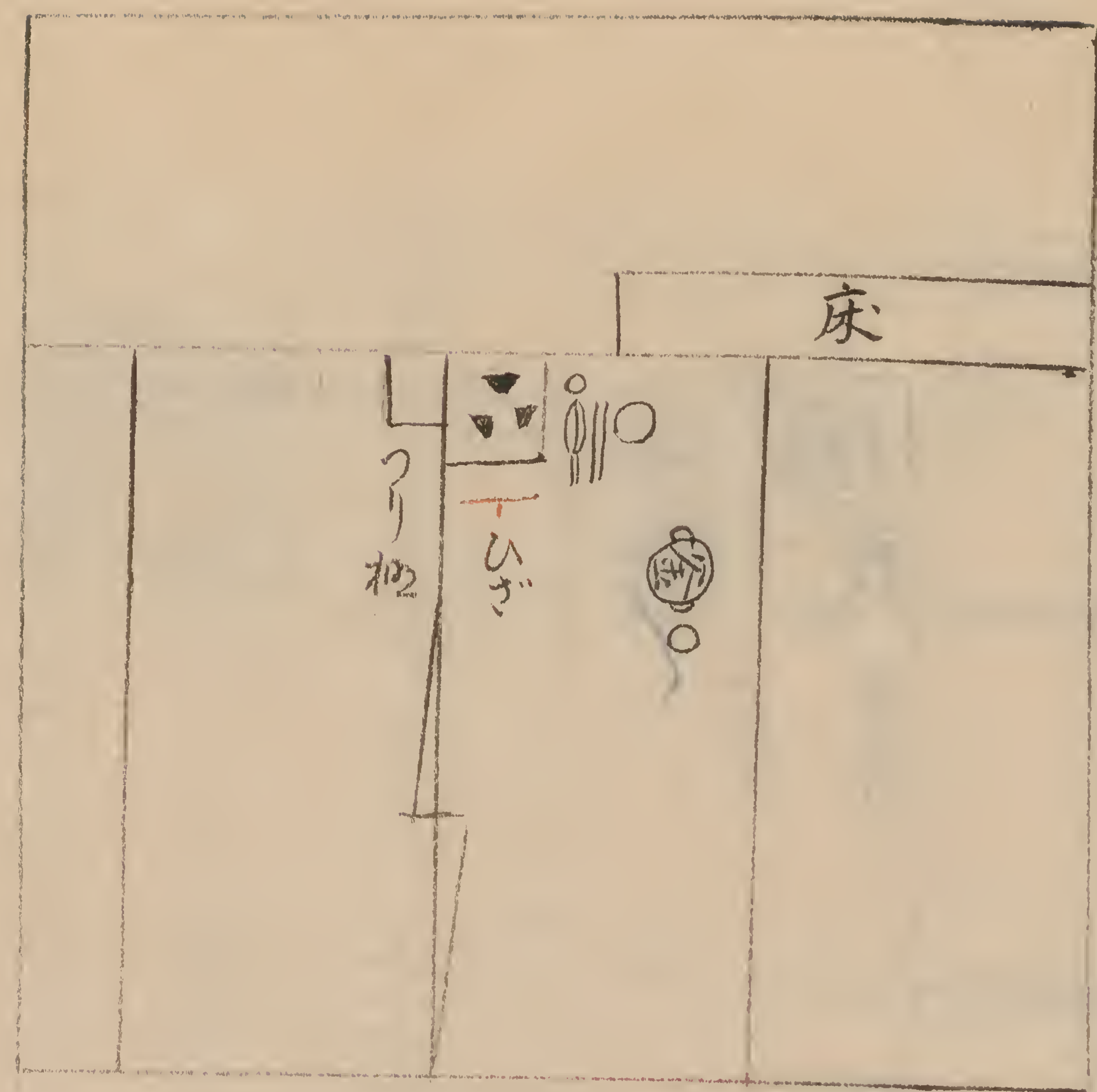
向切

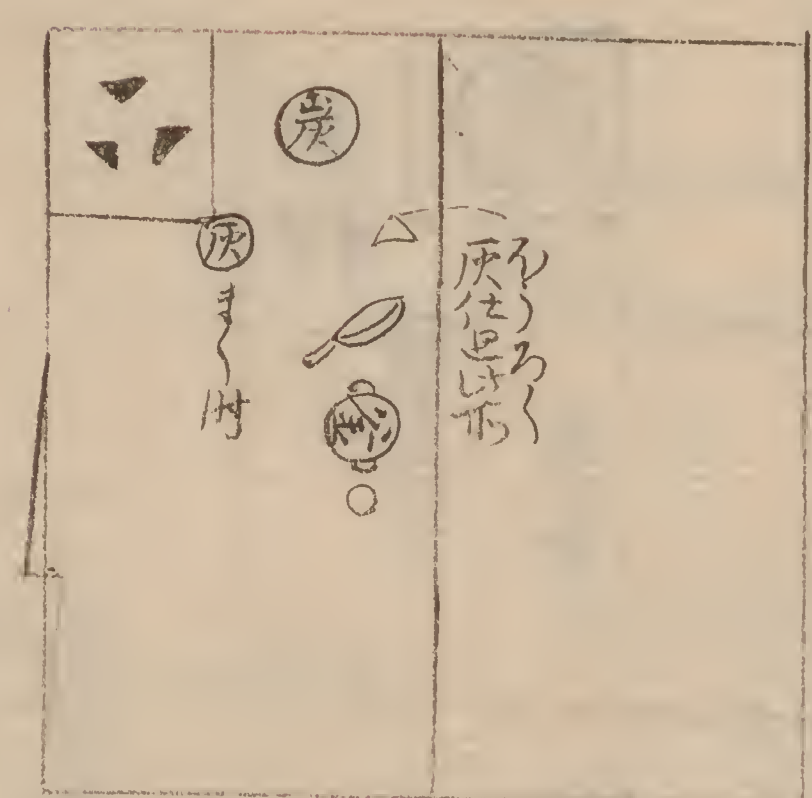


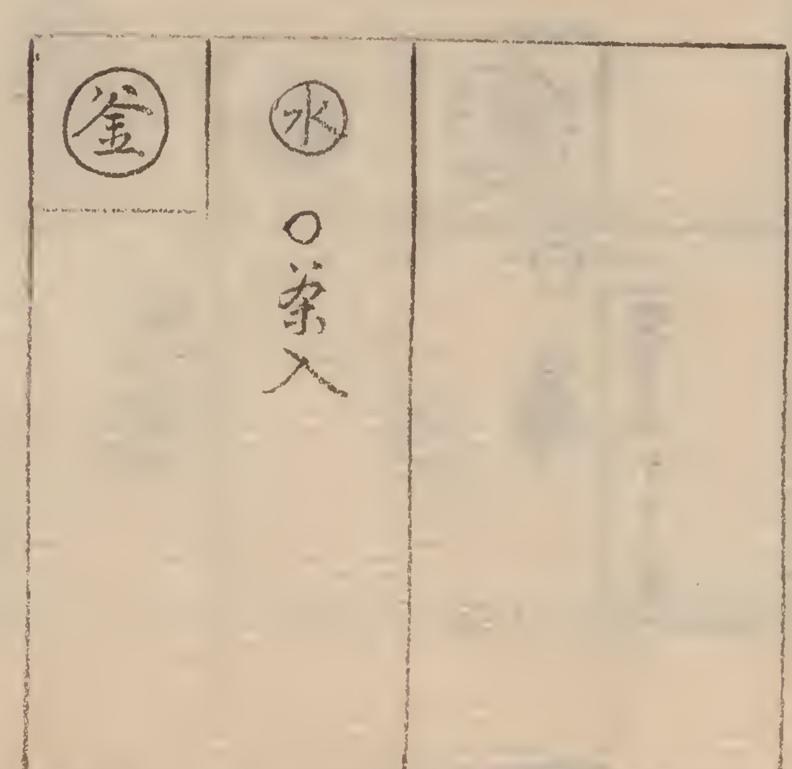




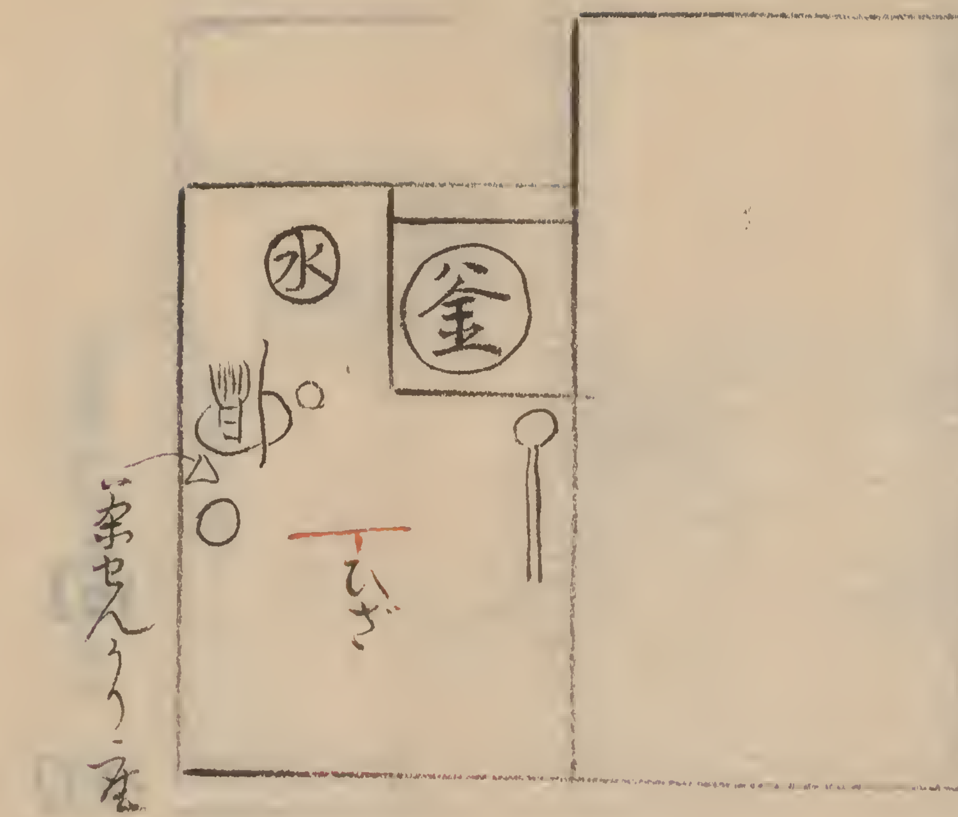
妙喜庵角炉



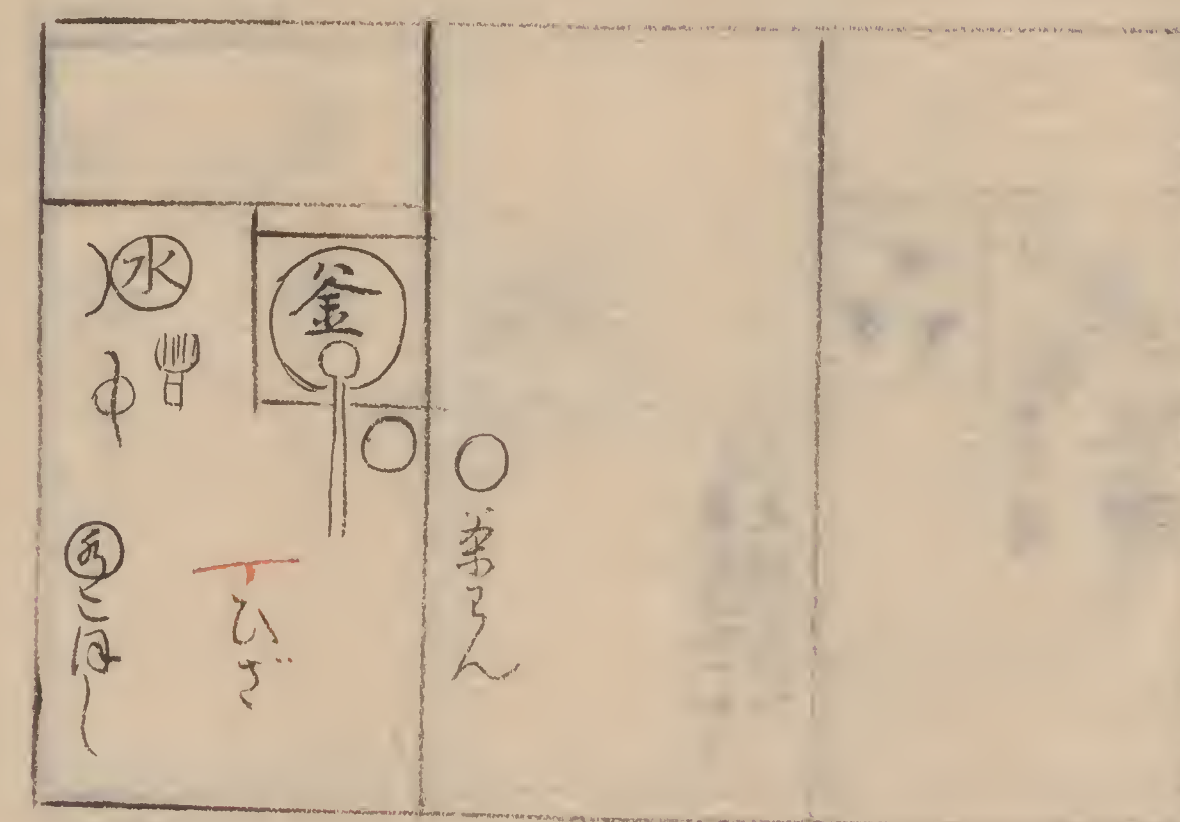




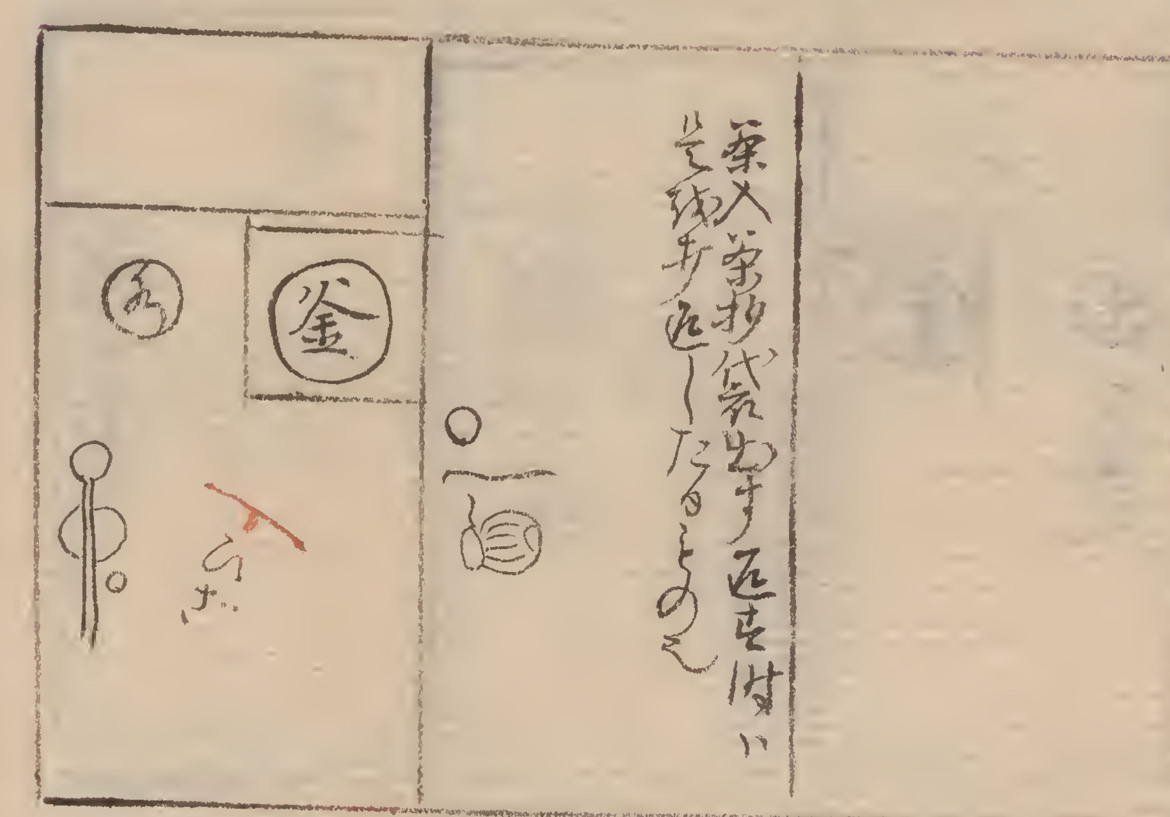
同

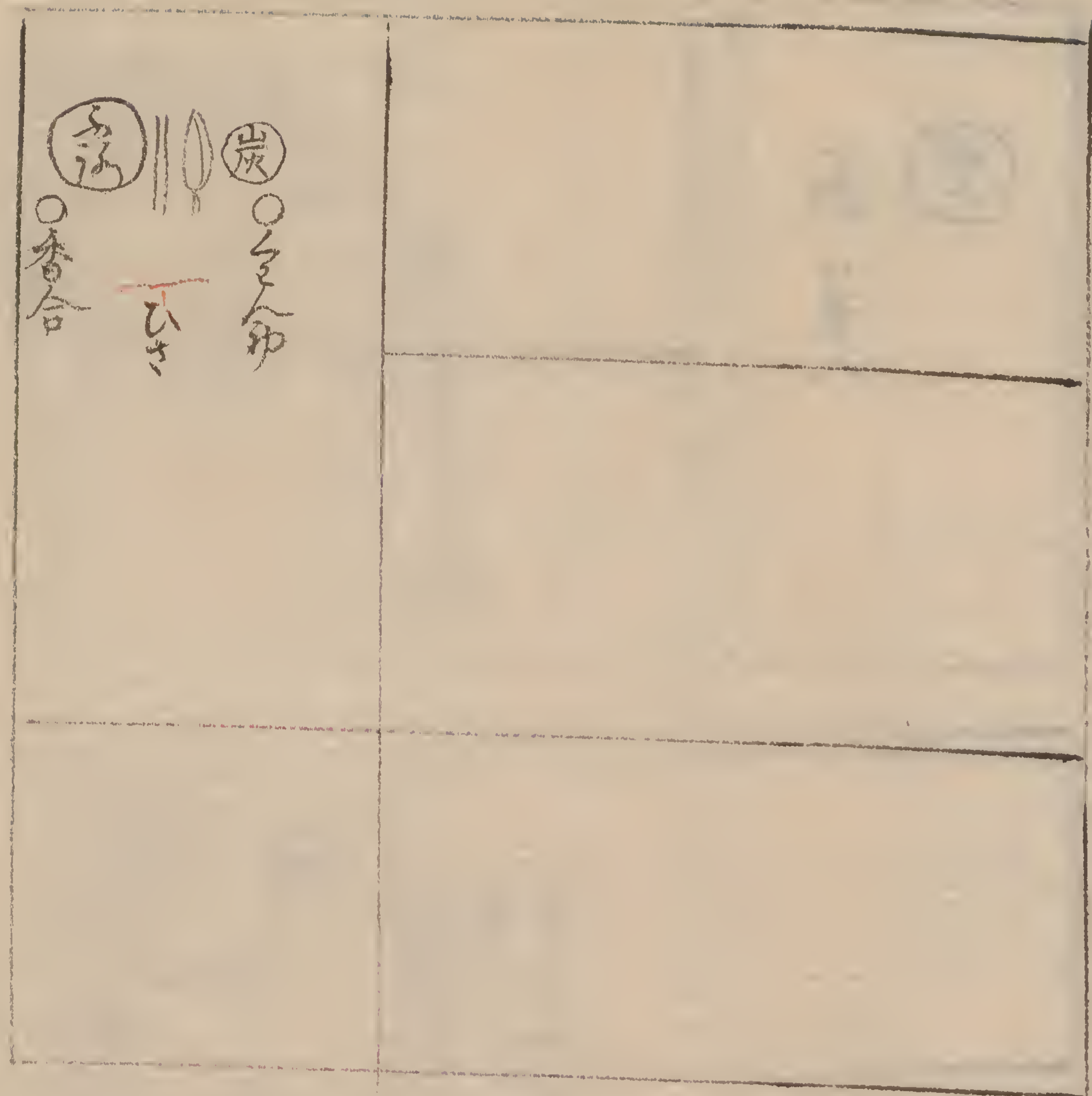


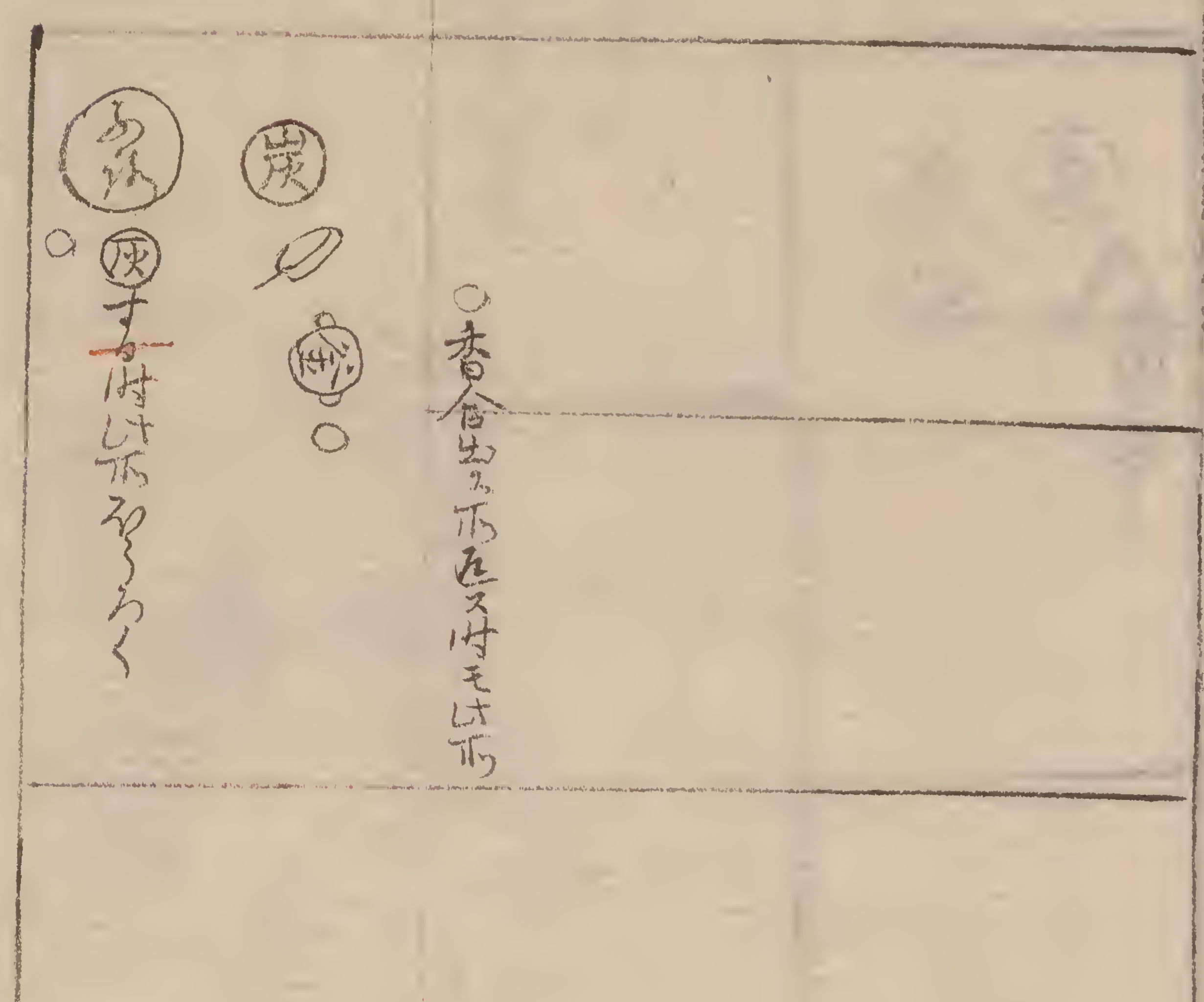
同

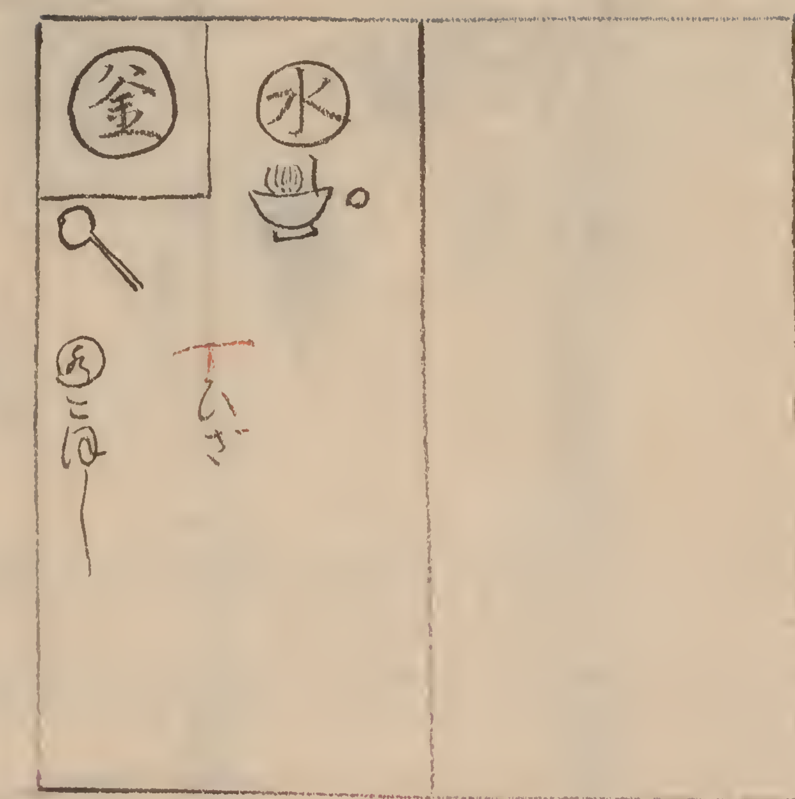


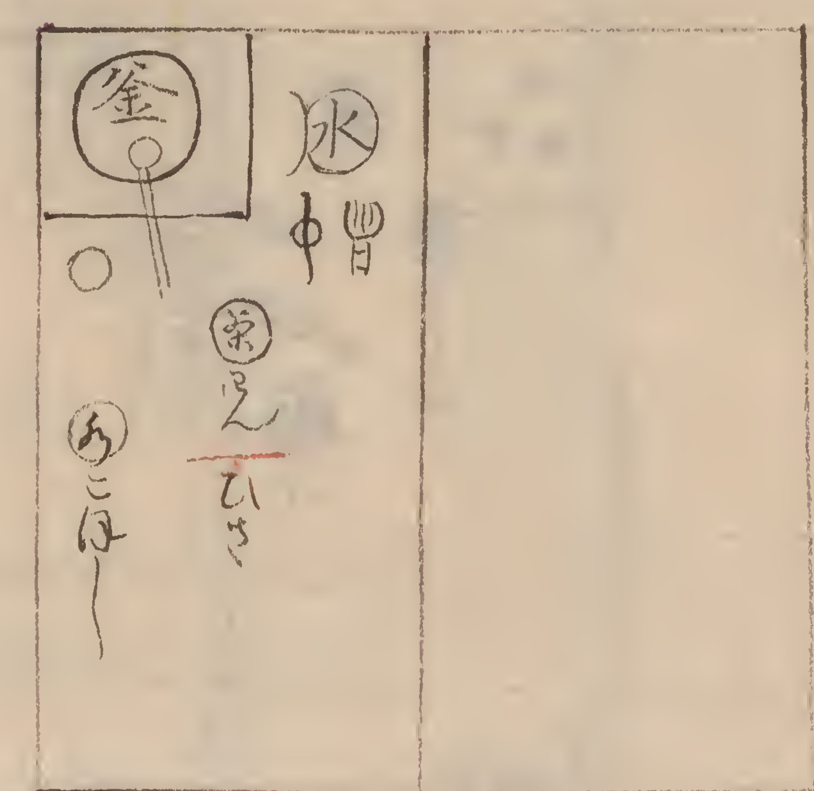
同

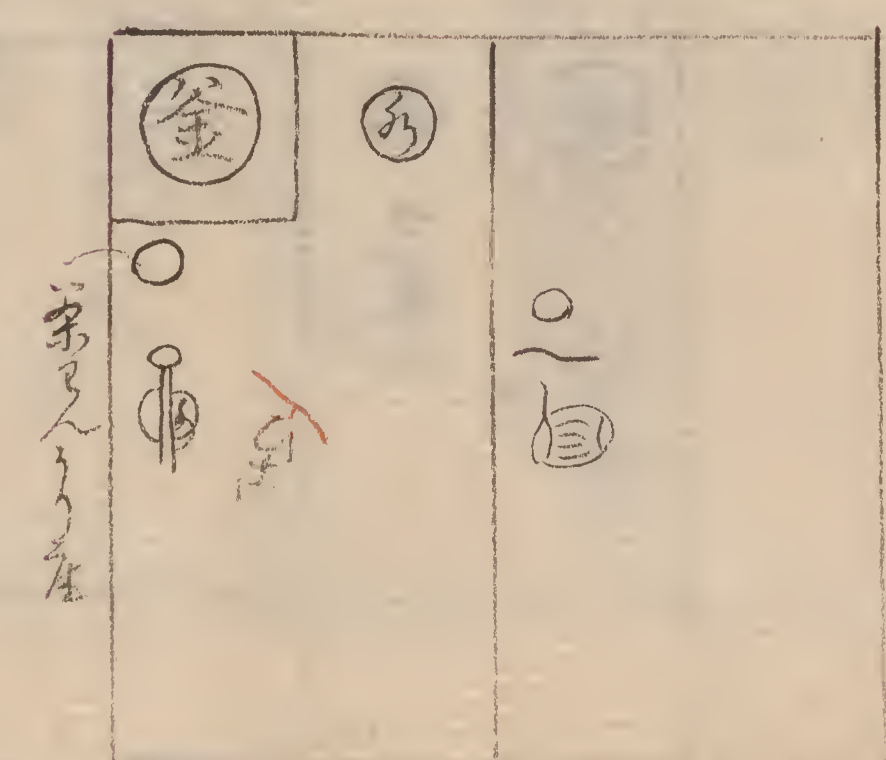


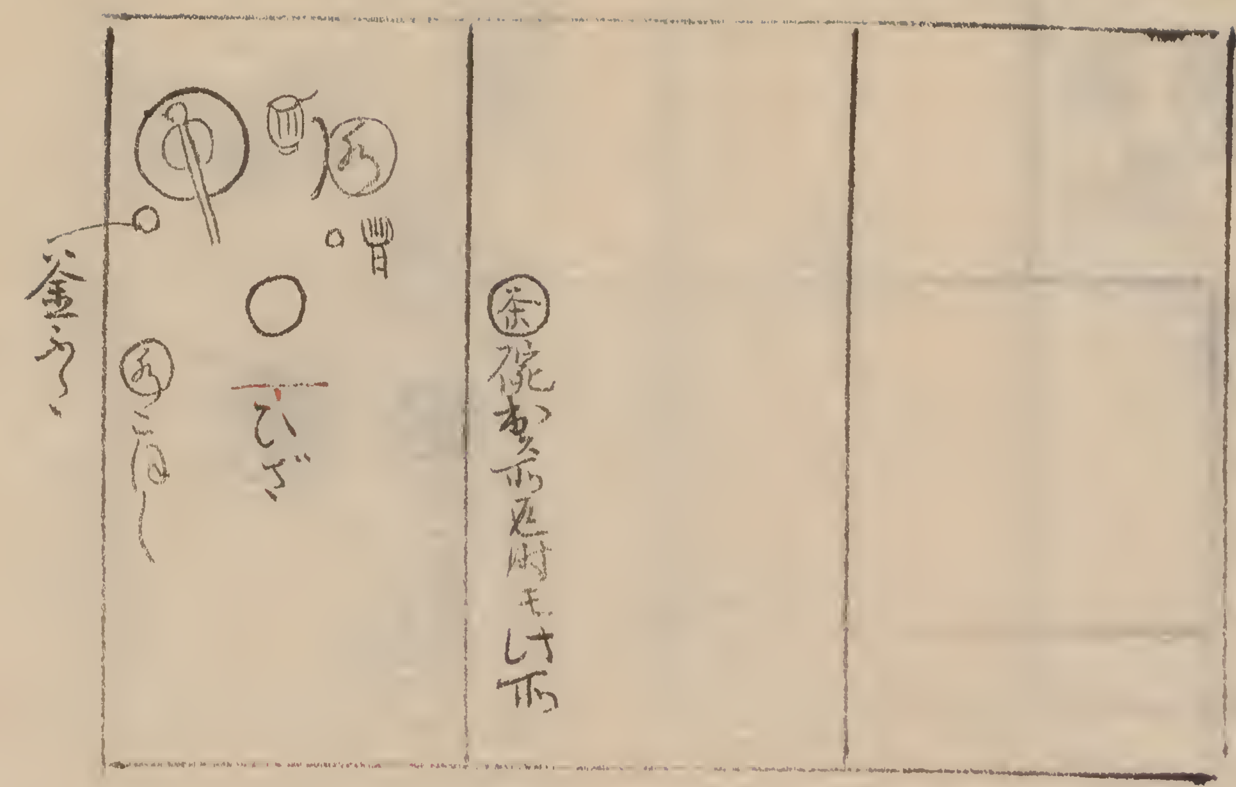

炭
ひさ
○香合

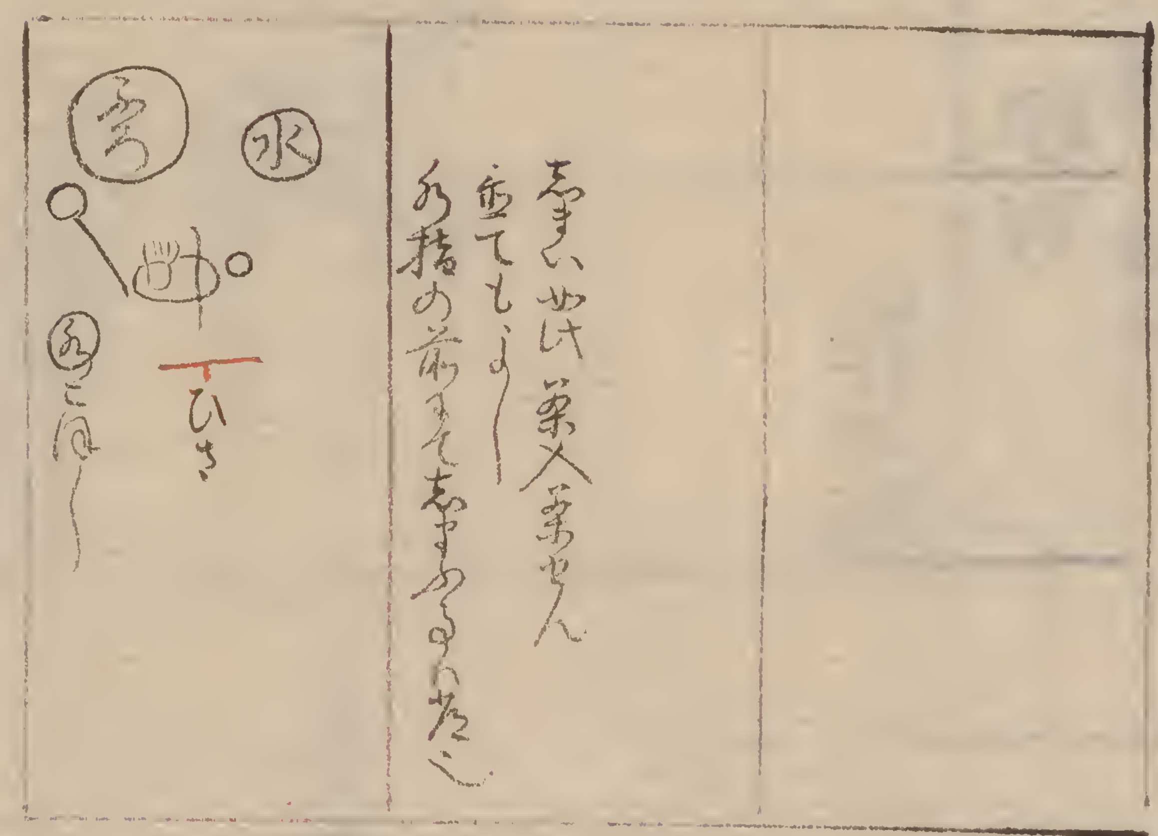

炭

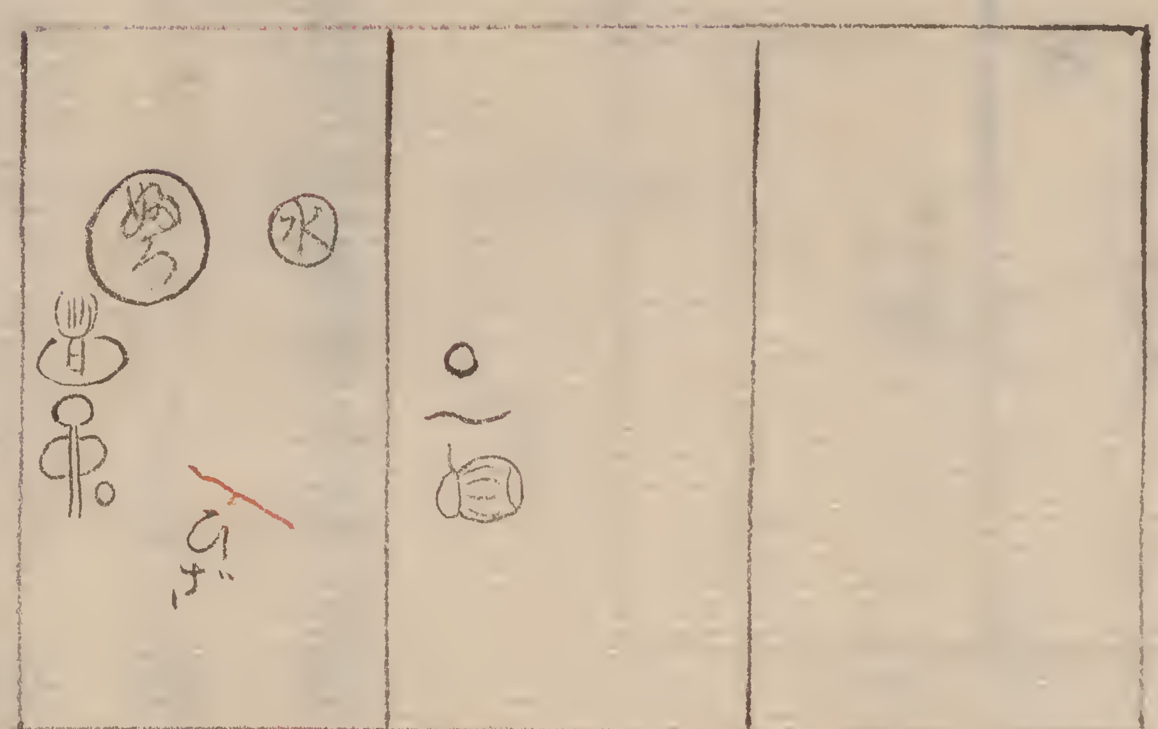

釜
水
ひさ

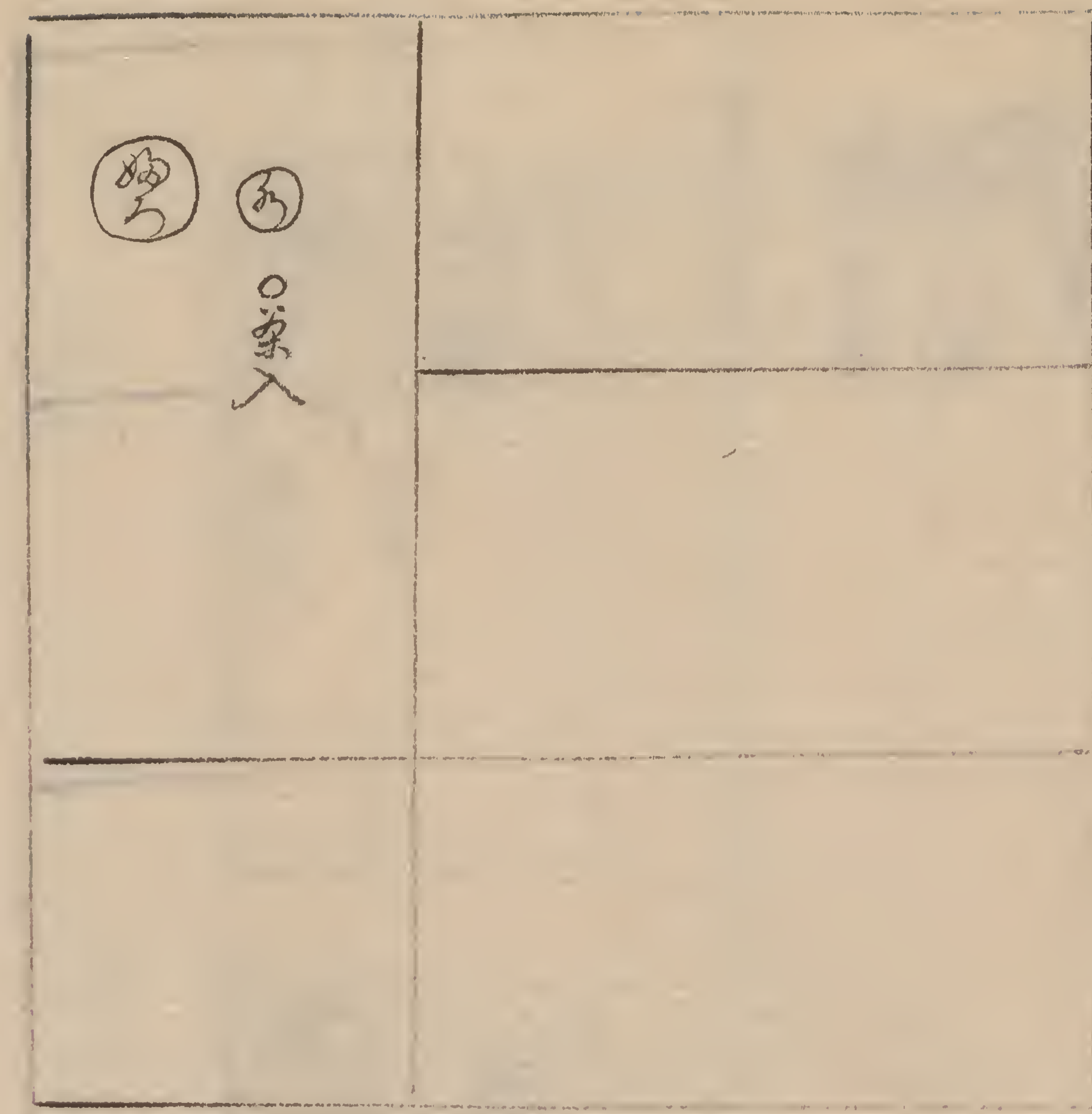

釜
水
ひさ

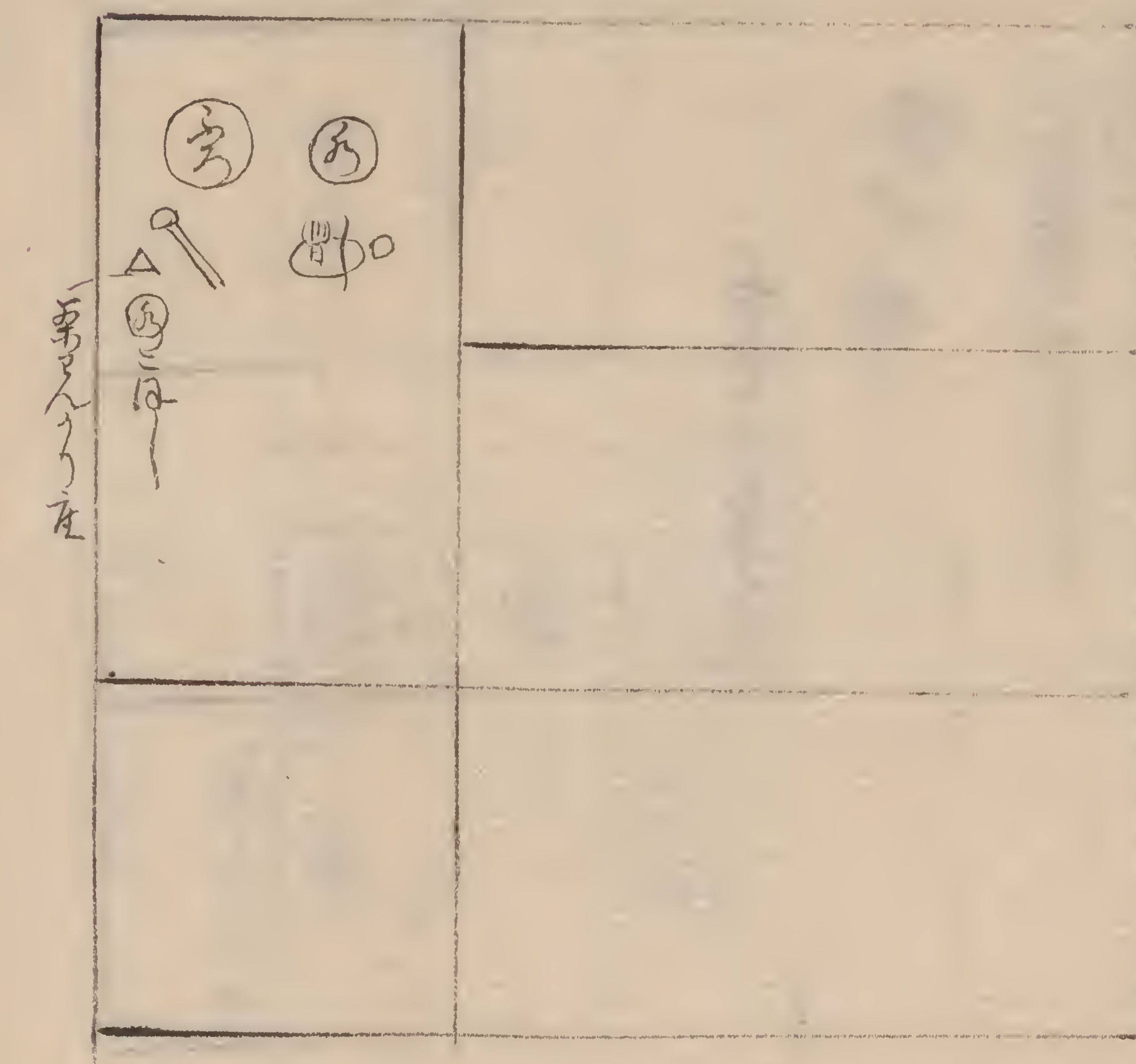

釜


ひざ
こぼし

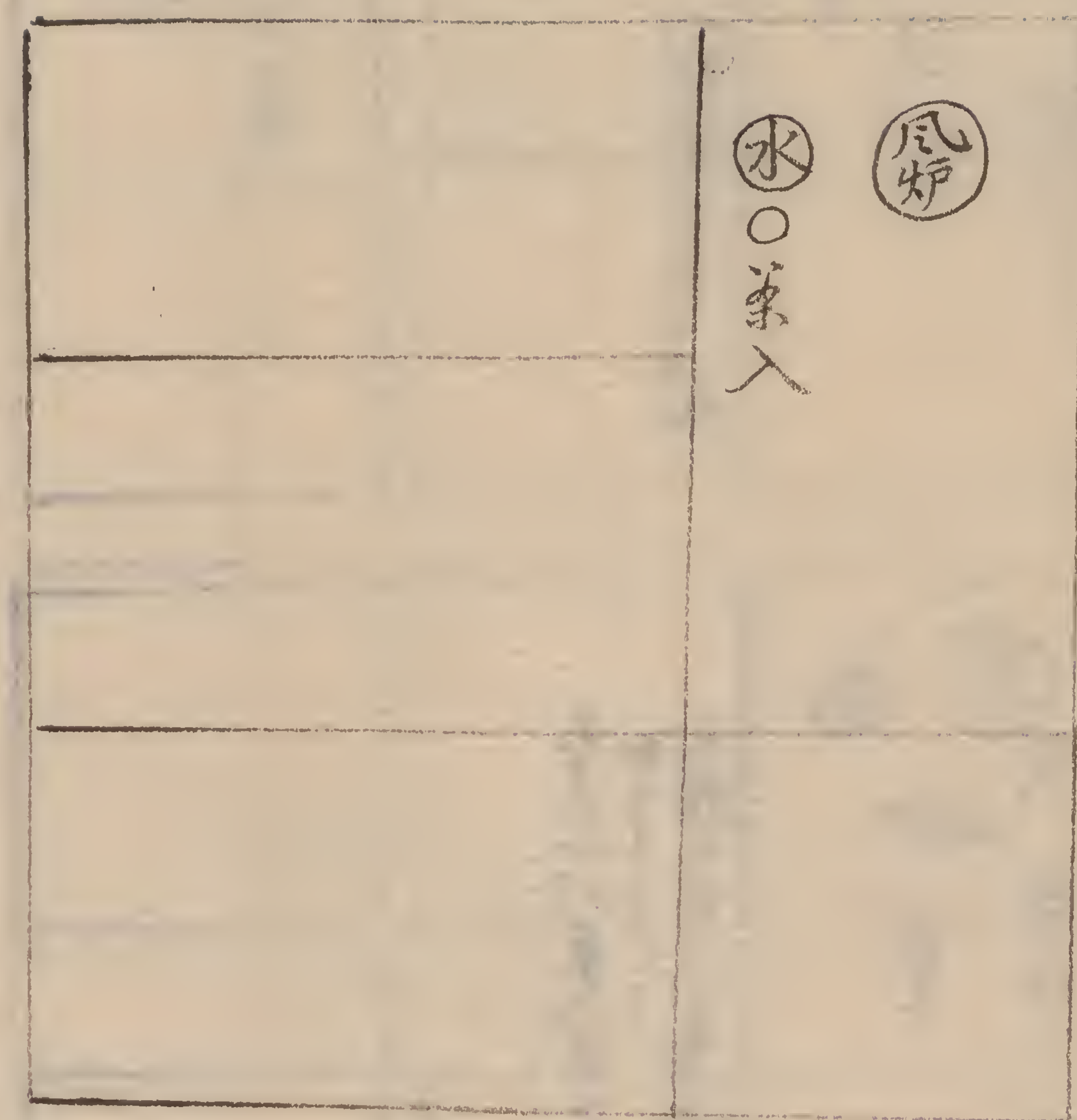

水
ひさ
こぼし


水
ひざ

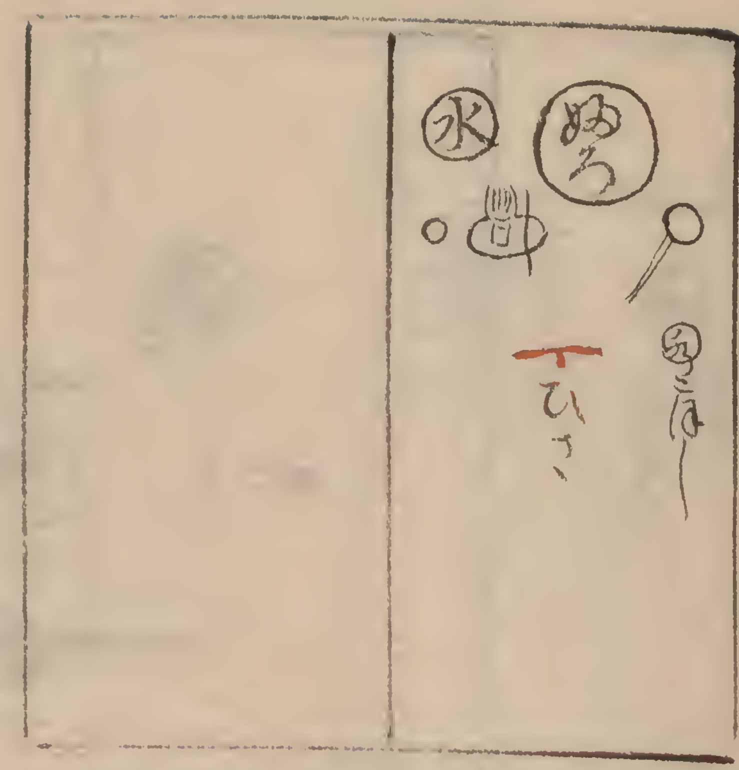

茶入


こぼし

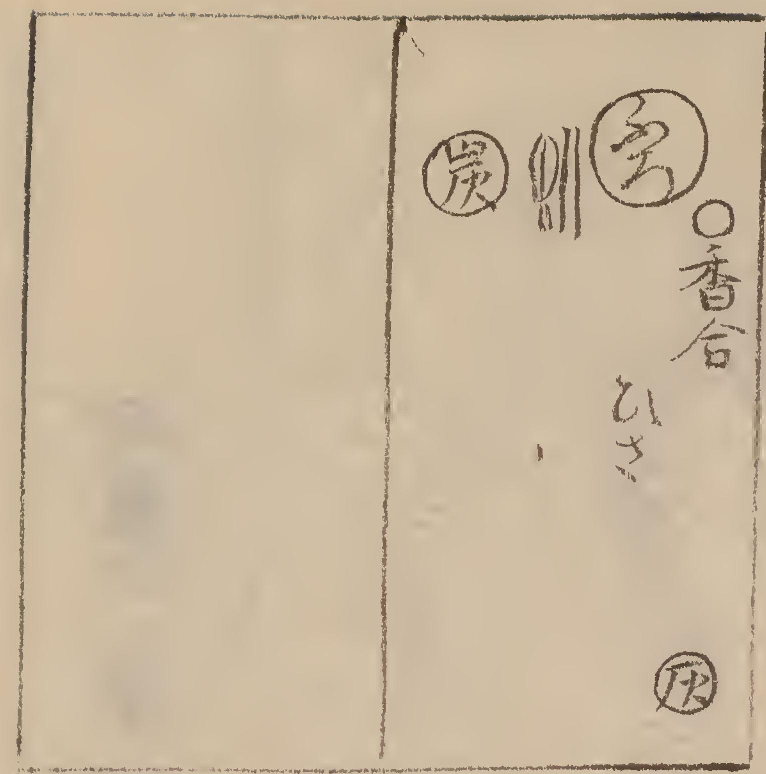
風炉逆勝手



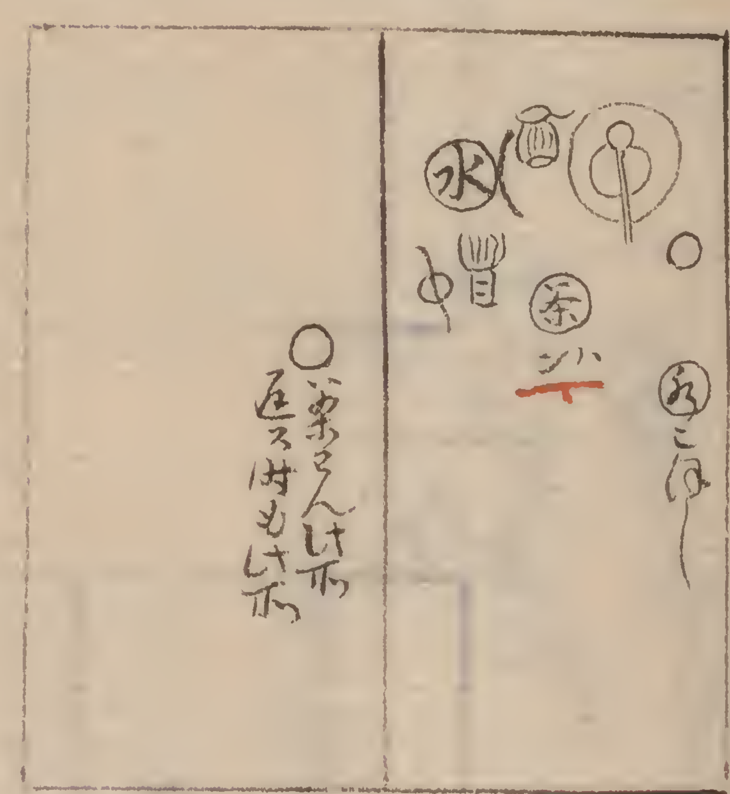
同



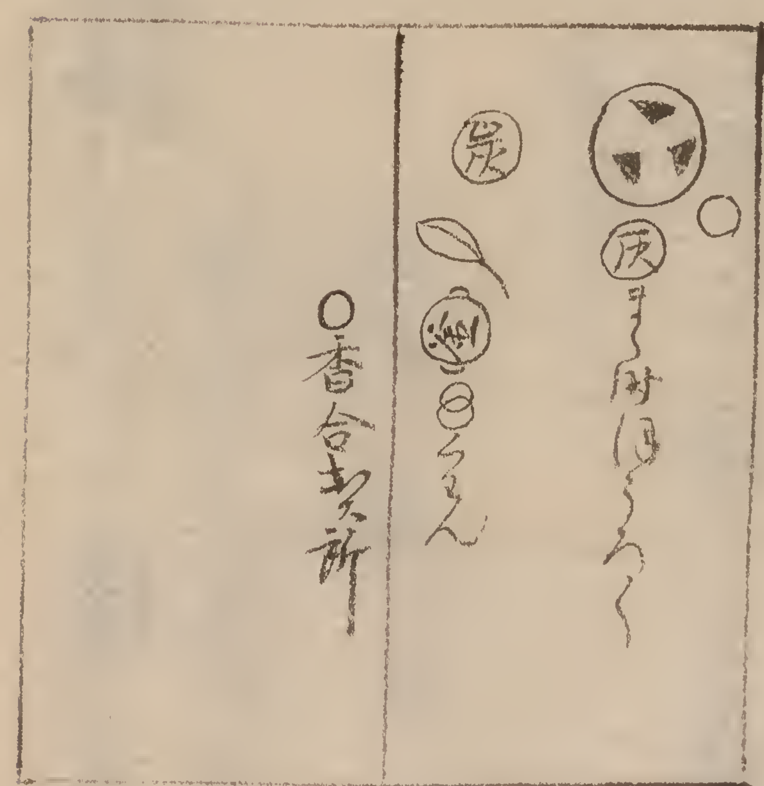
同炭



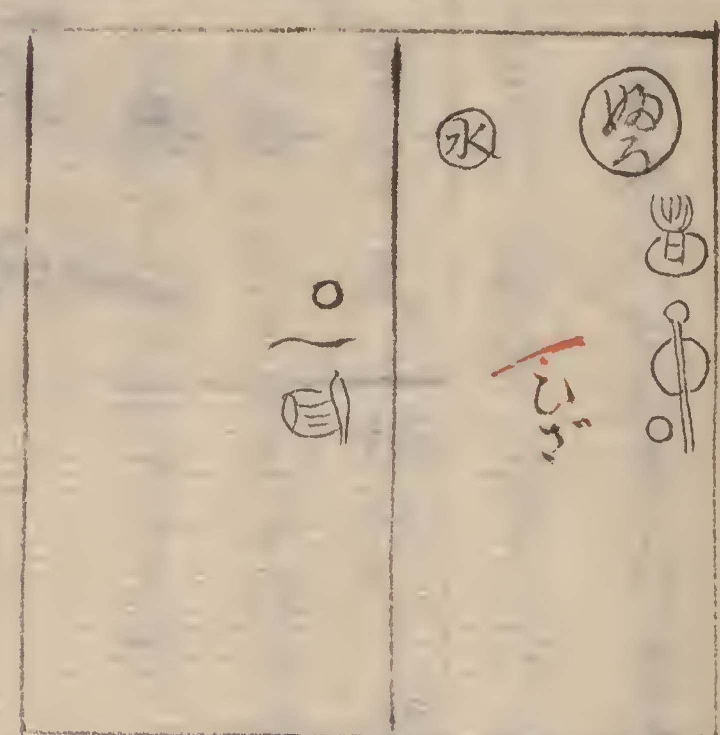
同



同

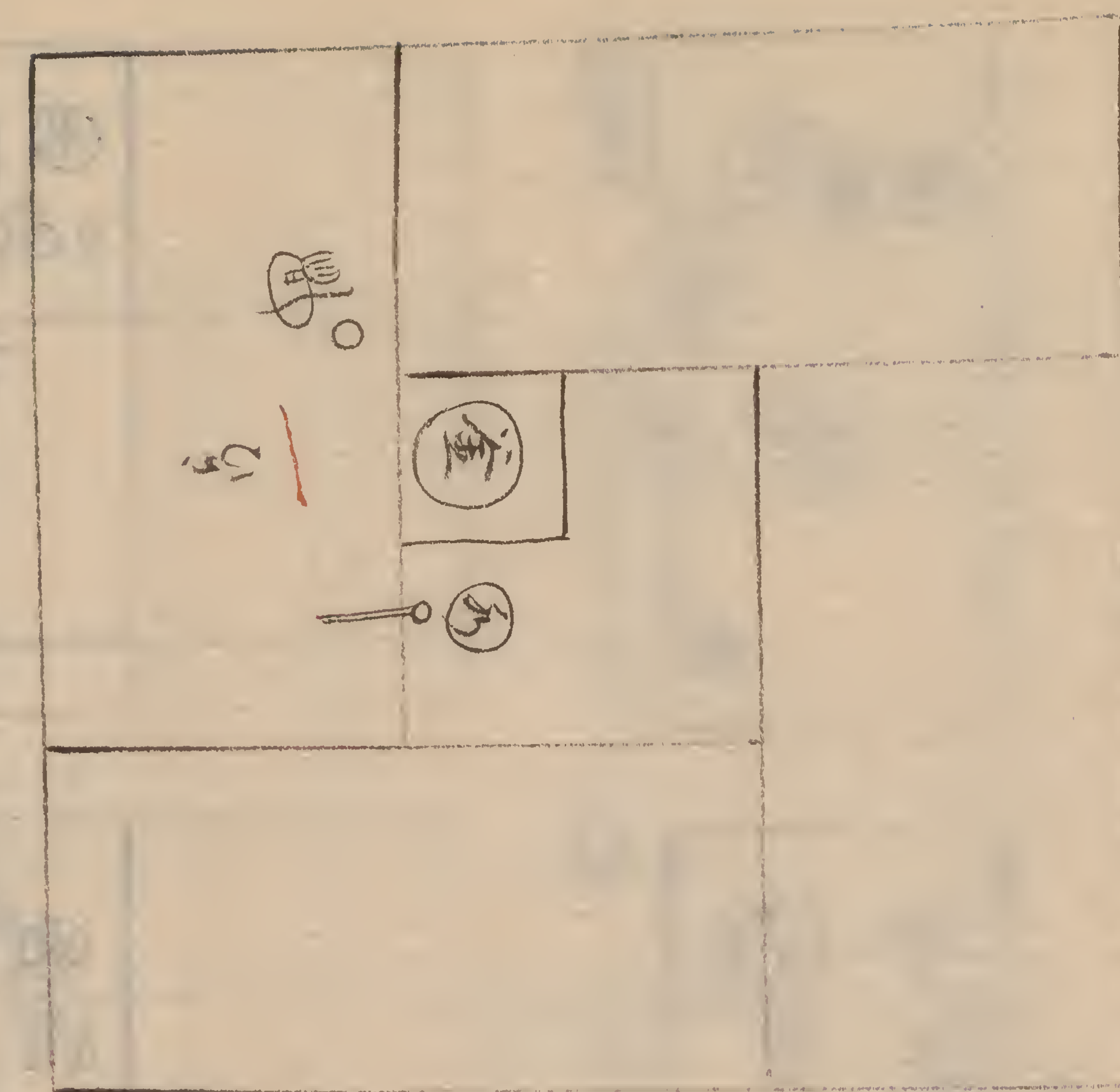


同

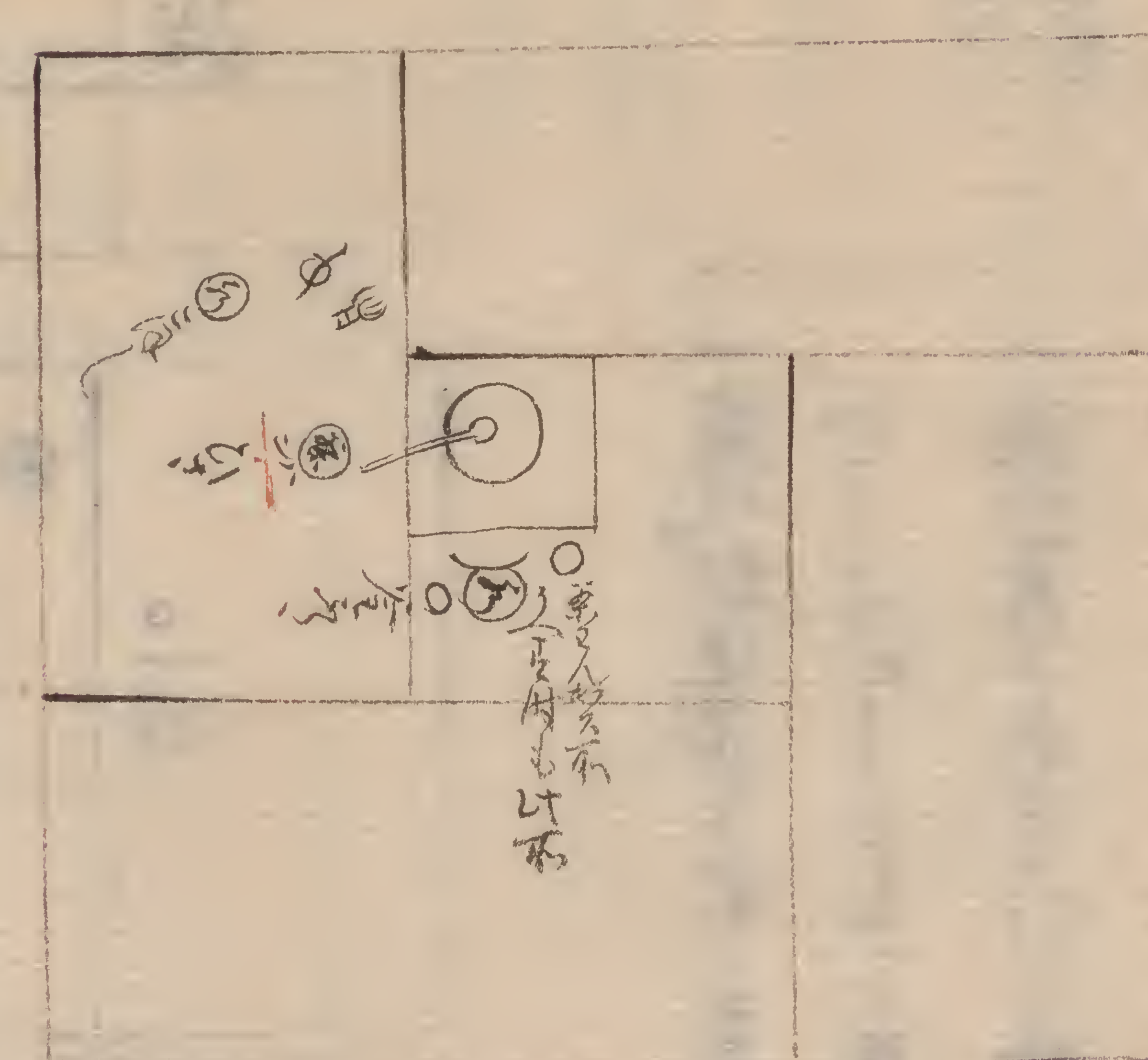


一右風炉逆勝手前ハ茶入棗ハ
何れもかさねるなし皆前の通
一柄杓たて手を入棗重く
一同合ハ柄杓ふたすくひ入なり
余のことし

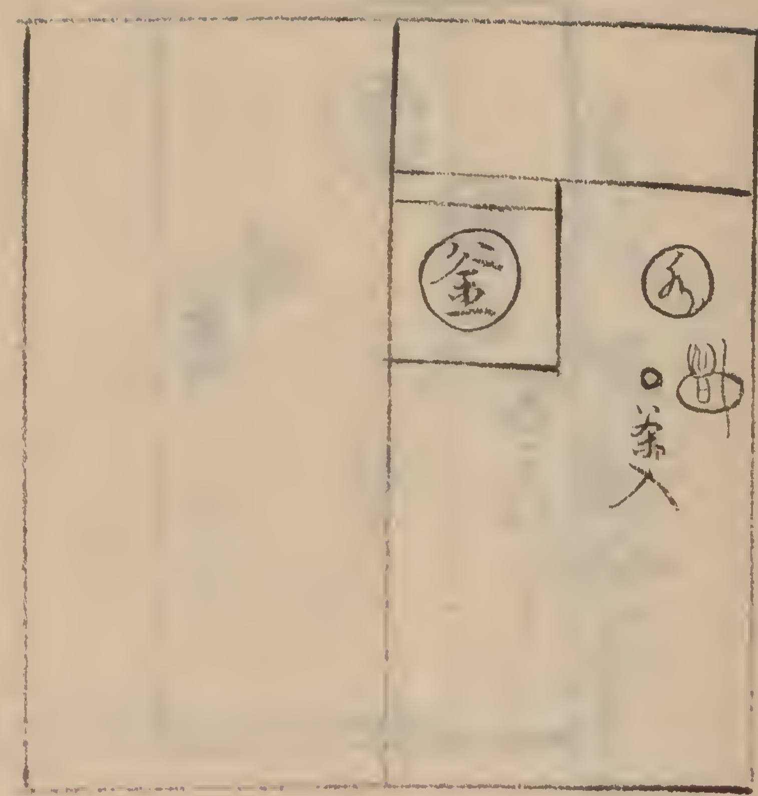
四畳半流飾

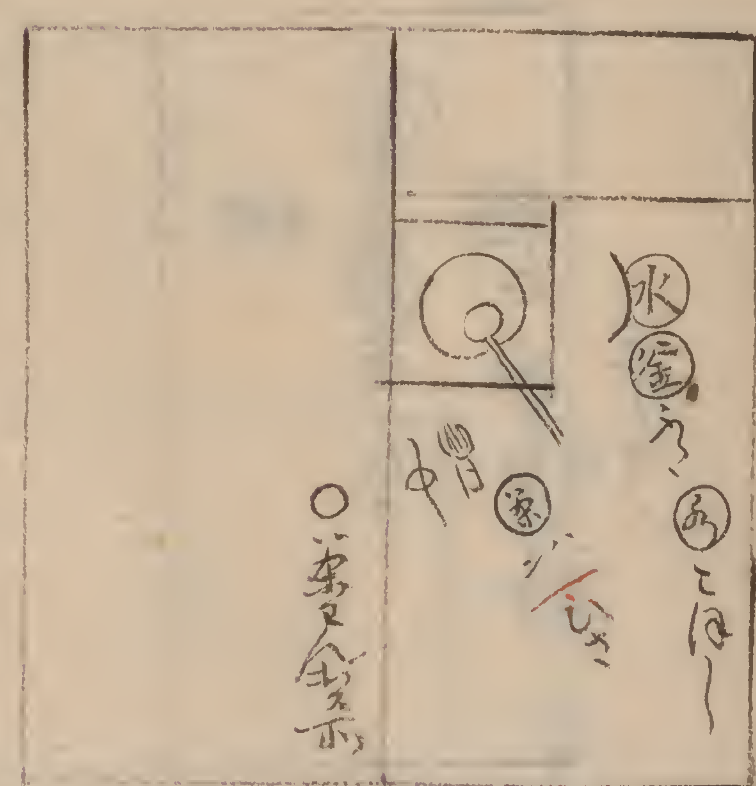


同

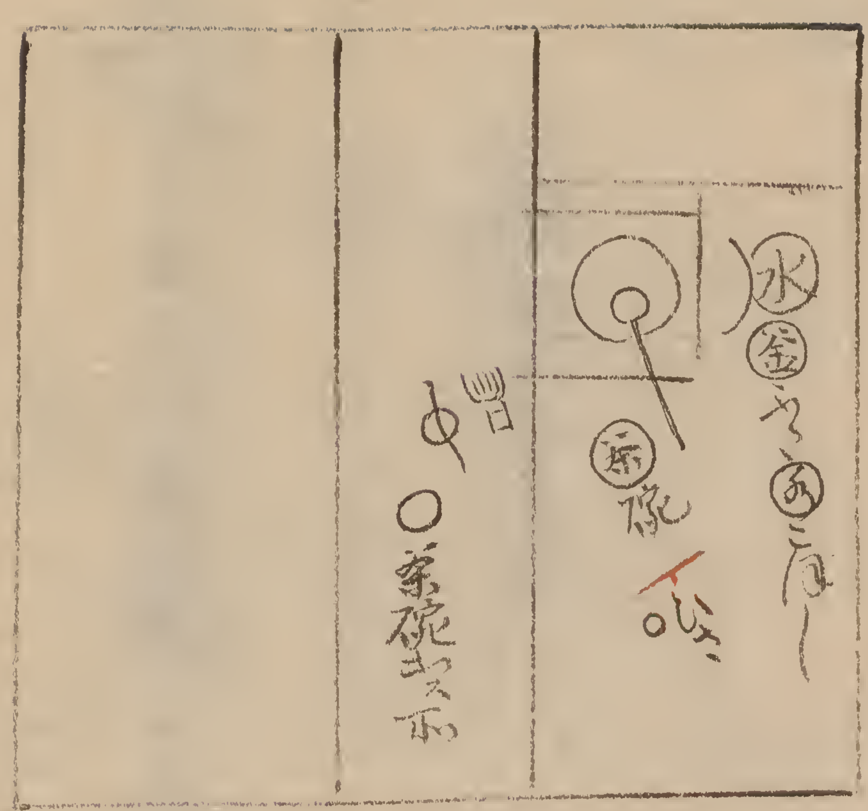


向切逆手右流し飾





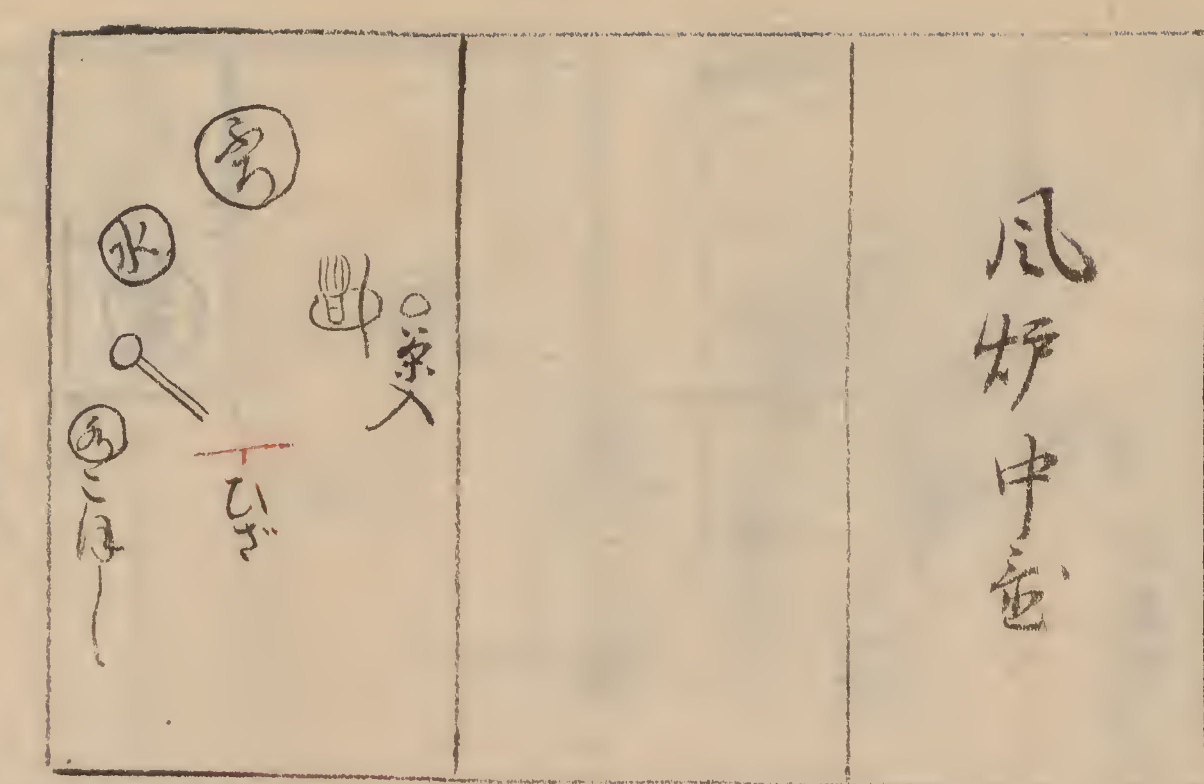
一 うす茶入をふきたり方丝の示く
重つけ 茶杓ふきうけ 茶せん
重合て建水 柄杓をとりたり
持ちるときと出水指の蓋とき
釜れふきとをれるなり

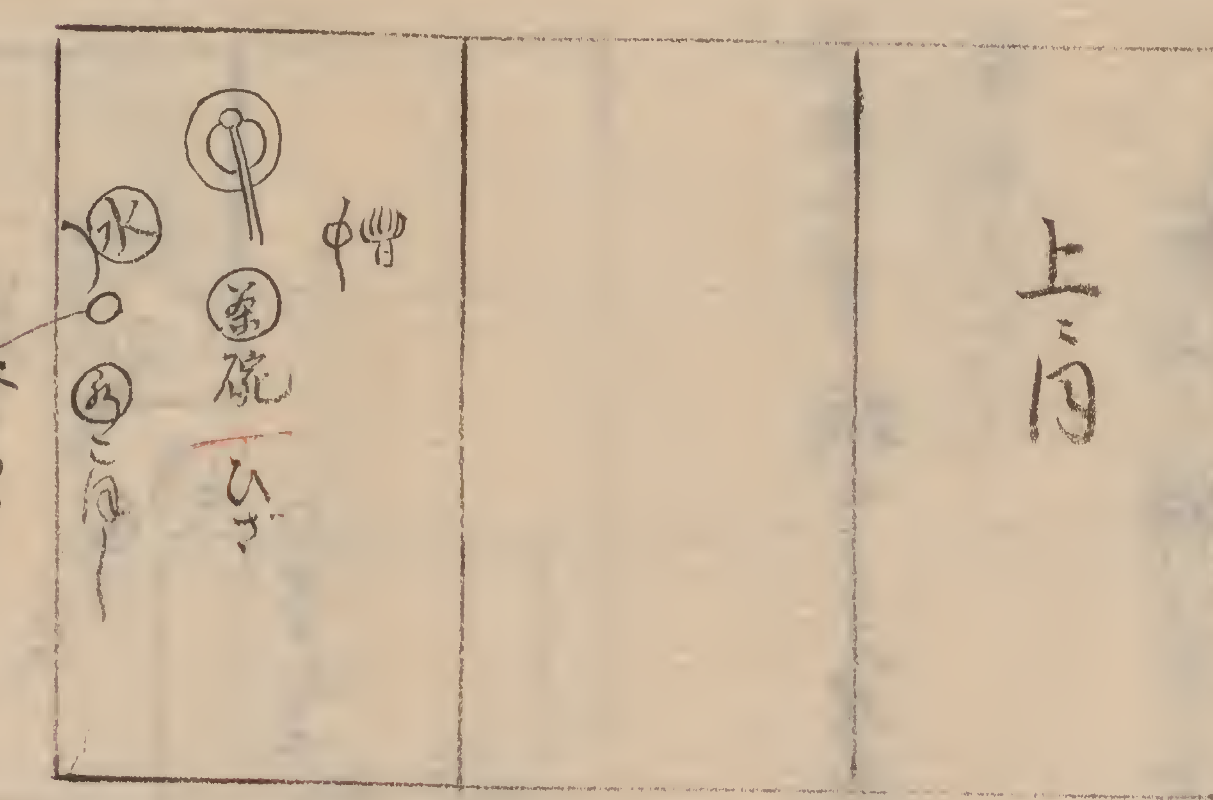


二畳て中板あるは逆勝手は、出来板の上へ茶入茶せんと
重合せて置る

右流し飾は畳て中 本勝手は向切乃
逆勝手二色にかかへ外のは無かし
わかもうす茶 にかかりなり

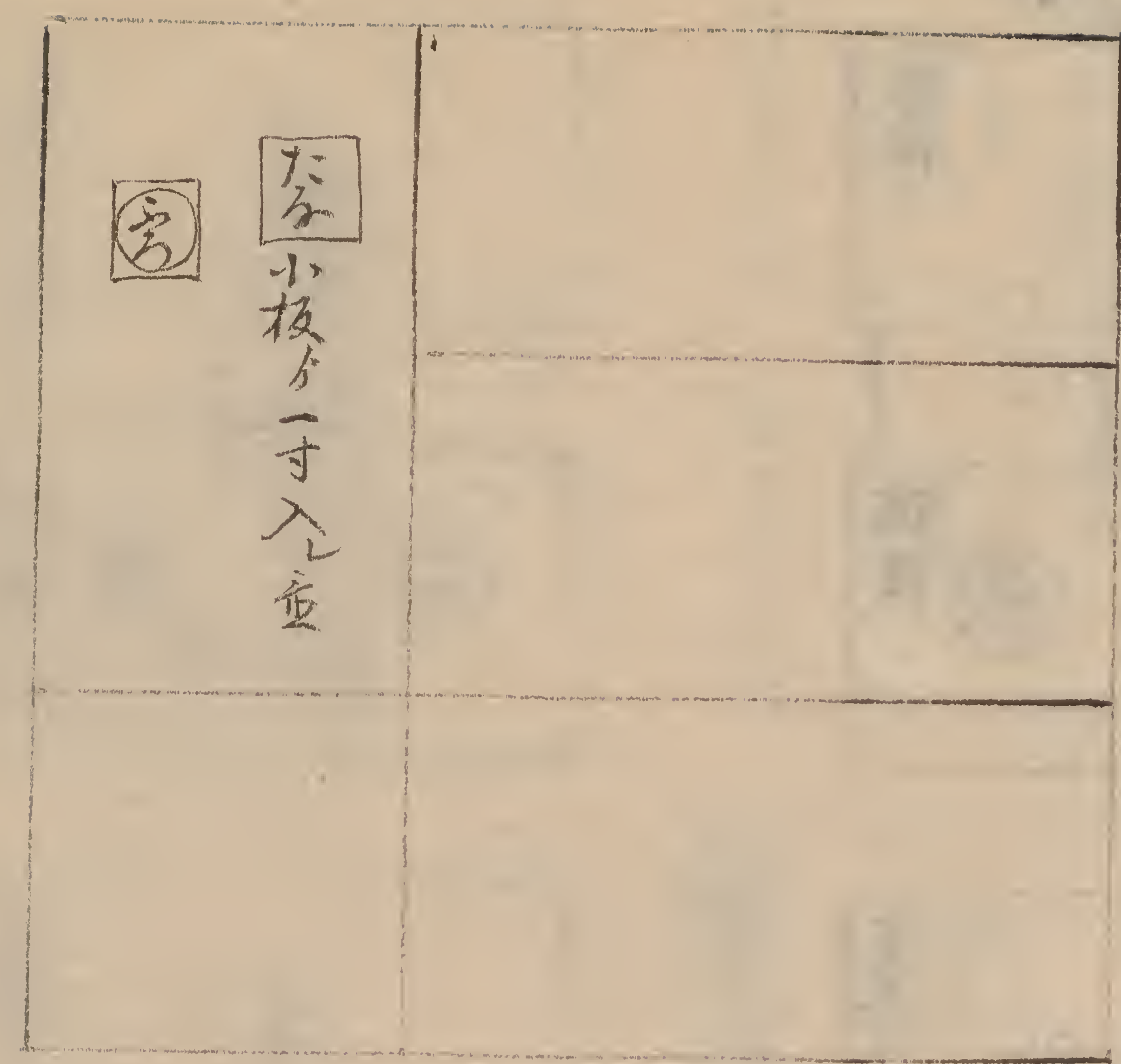
風炉手前茶捨手置合ハ道具おなしことの也（略也



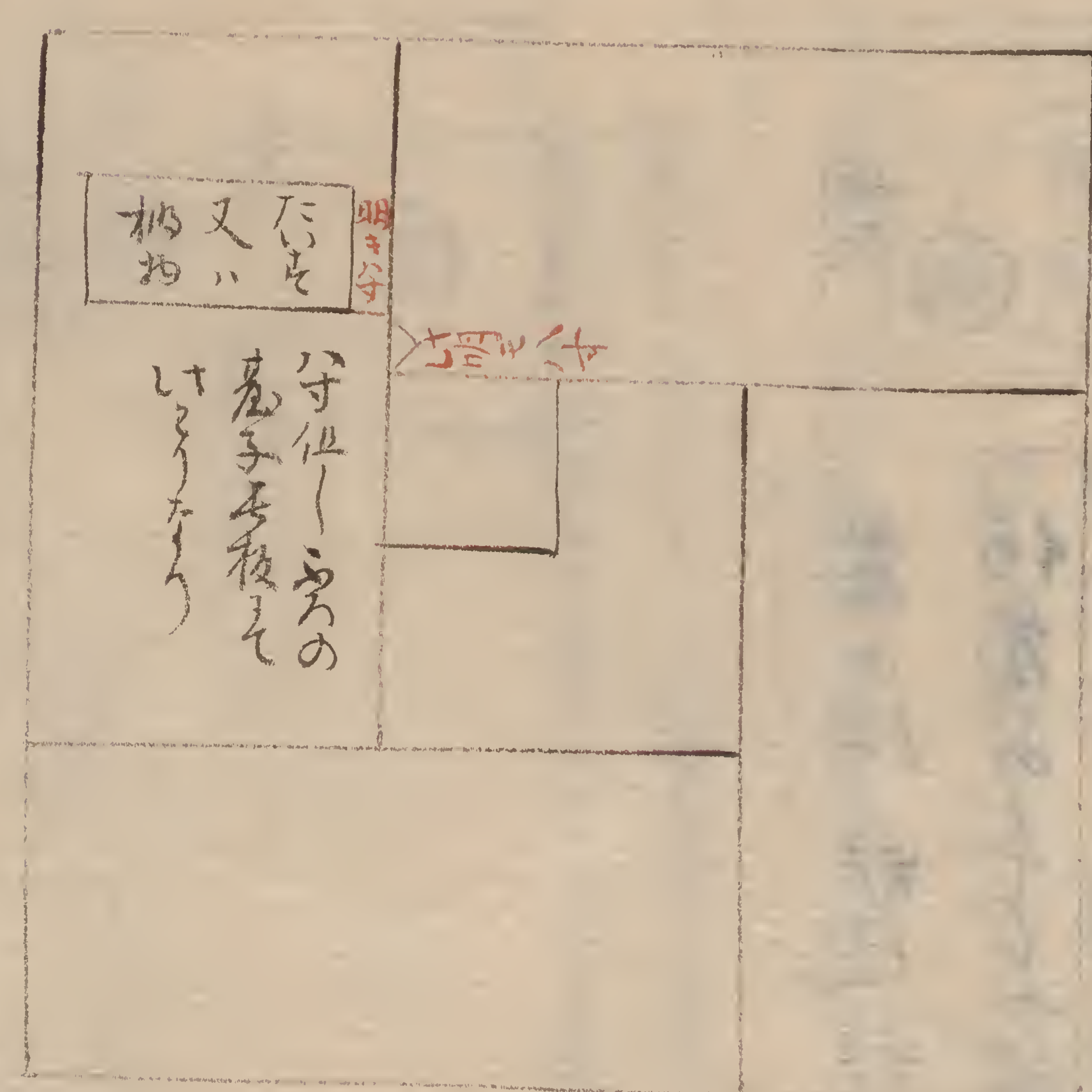


常ハ小板にて出し中置と申おきといふや

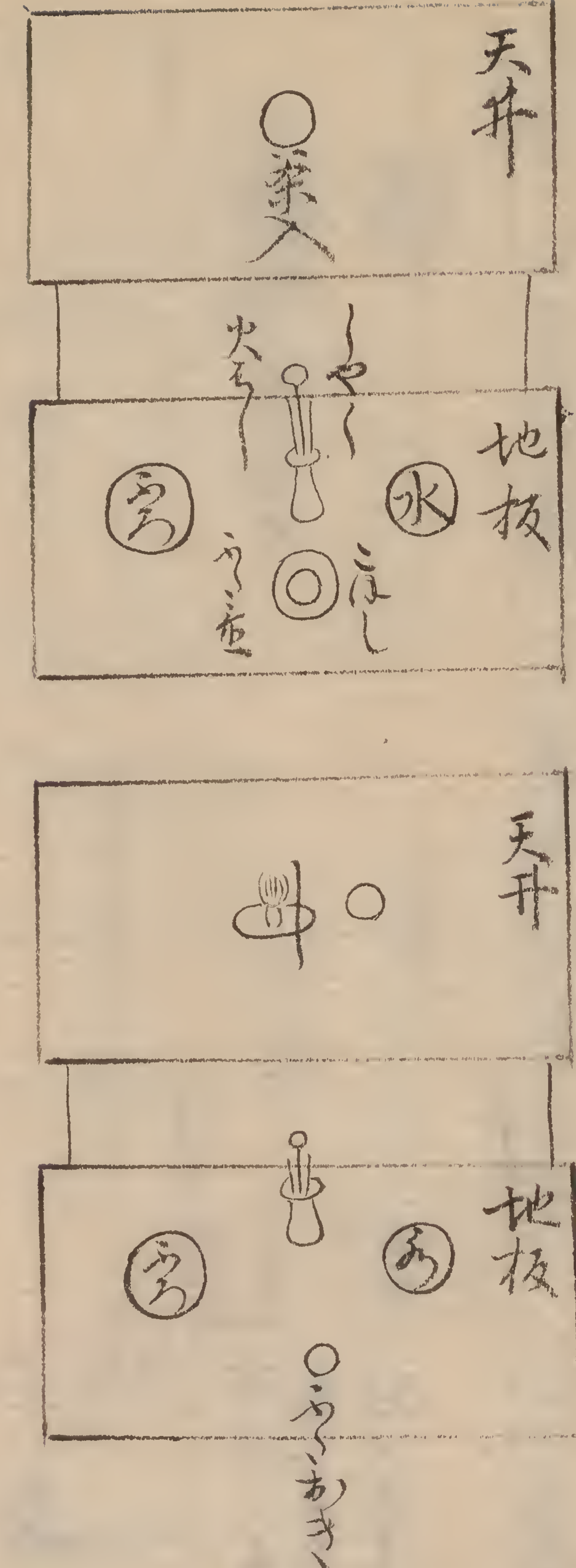
風爐棚置合せ寸法



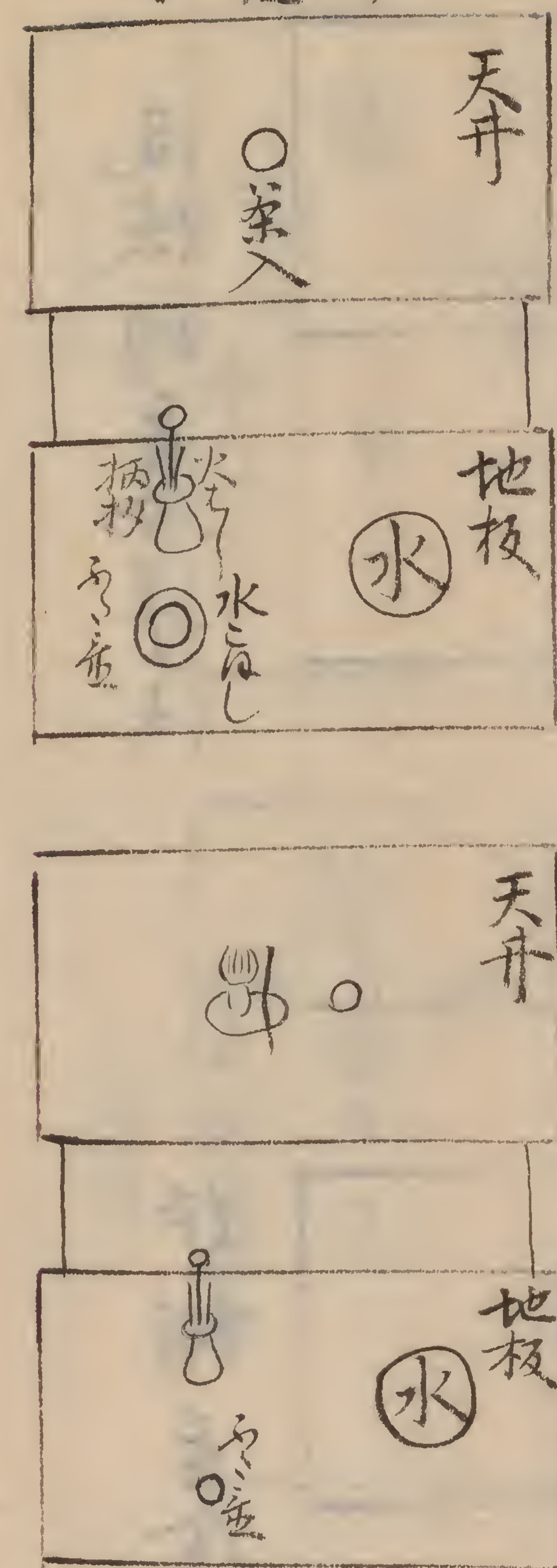
炉棚置合寸法



臺子棚飾釜合

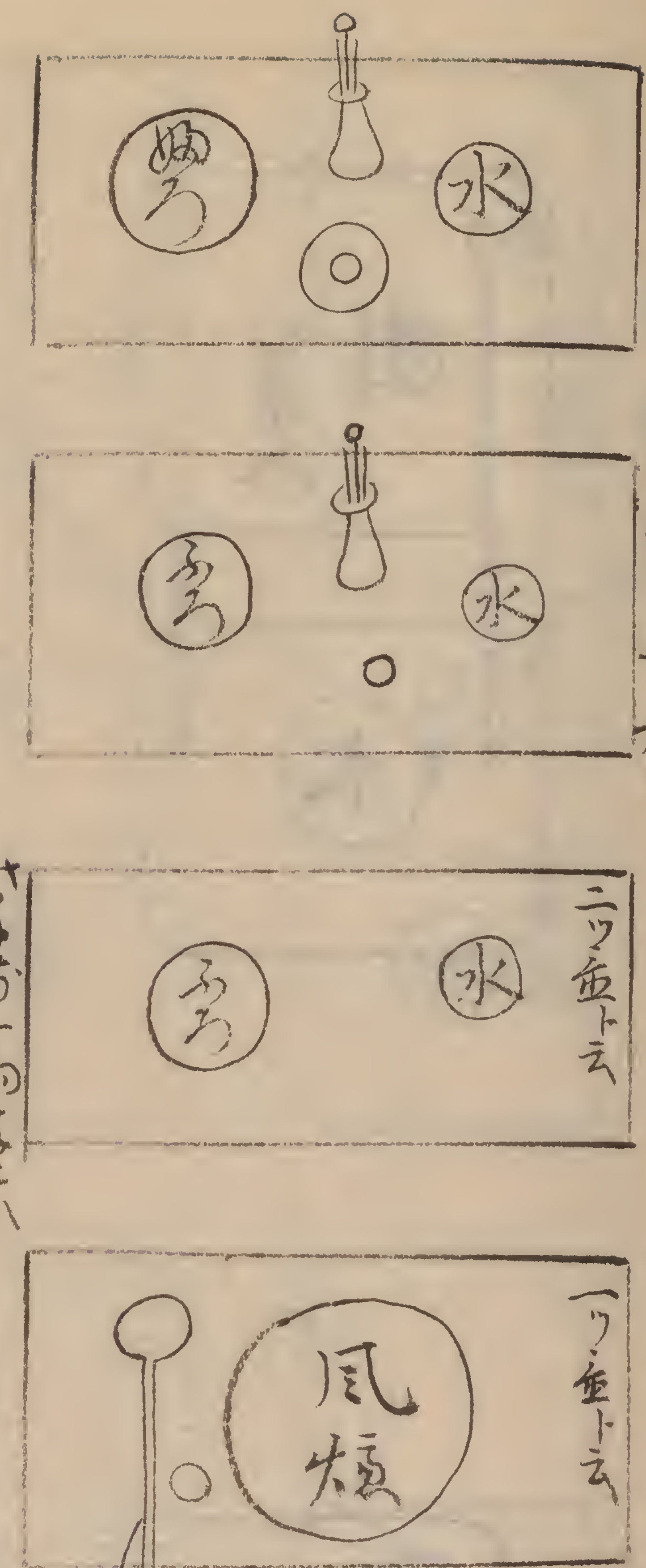


炉臺子



臺子飾炉風炉ともに
何臺子にても此無なり
炉長板にはさし炉臺子
にのりきりあるし

風炉長板

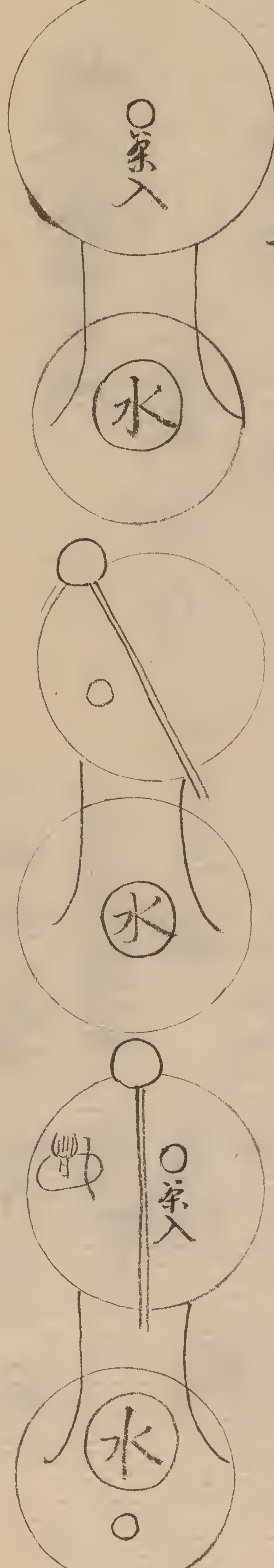


此手前一向ならい
同前なり

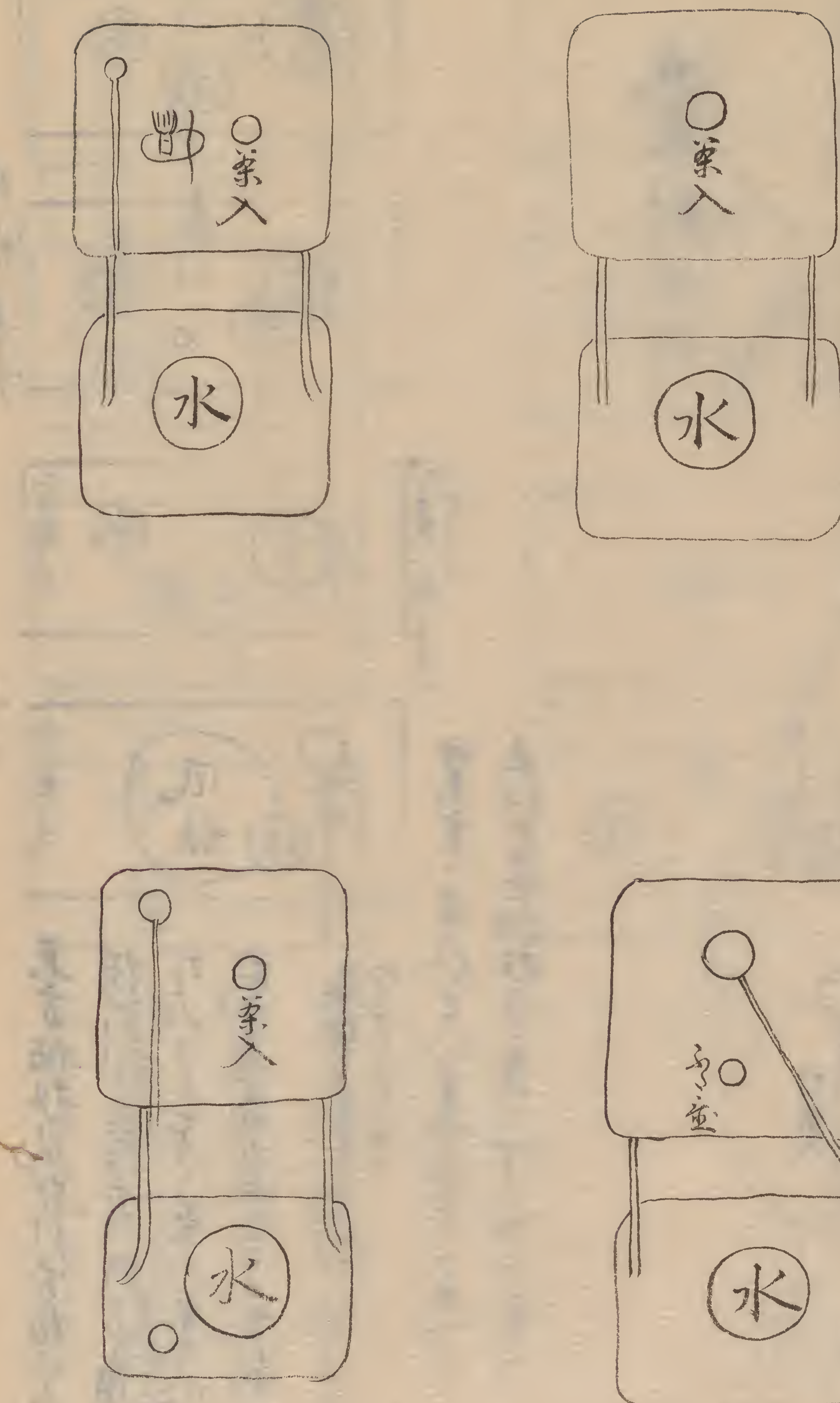
上日

長方柄杓風炉の方板のよこ
横にしくお指左の風炉方角
たゝみのうへをく菓入菓子入へけ
右の方にあの中どりて和
此無たてる菓とりて
のこすなり也
此長方ハ常れさくいお同前よ点てし
点仕廻也此柄杓を釜のこすすなもあり

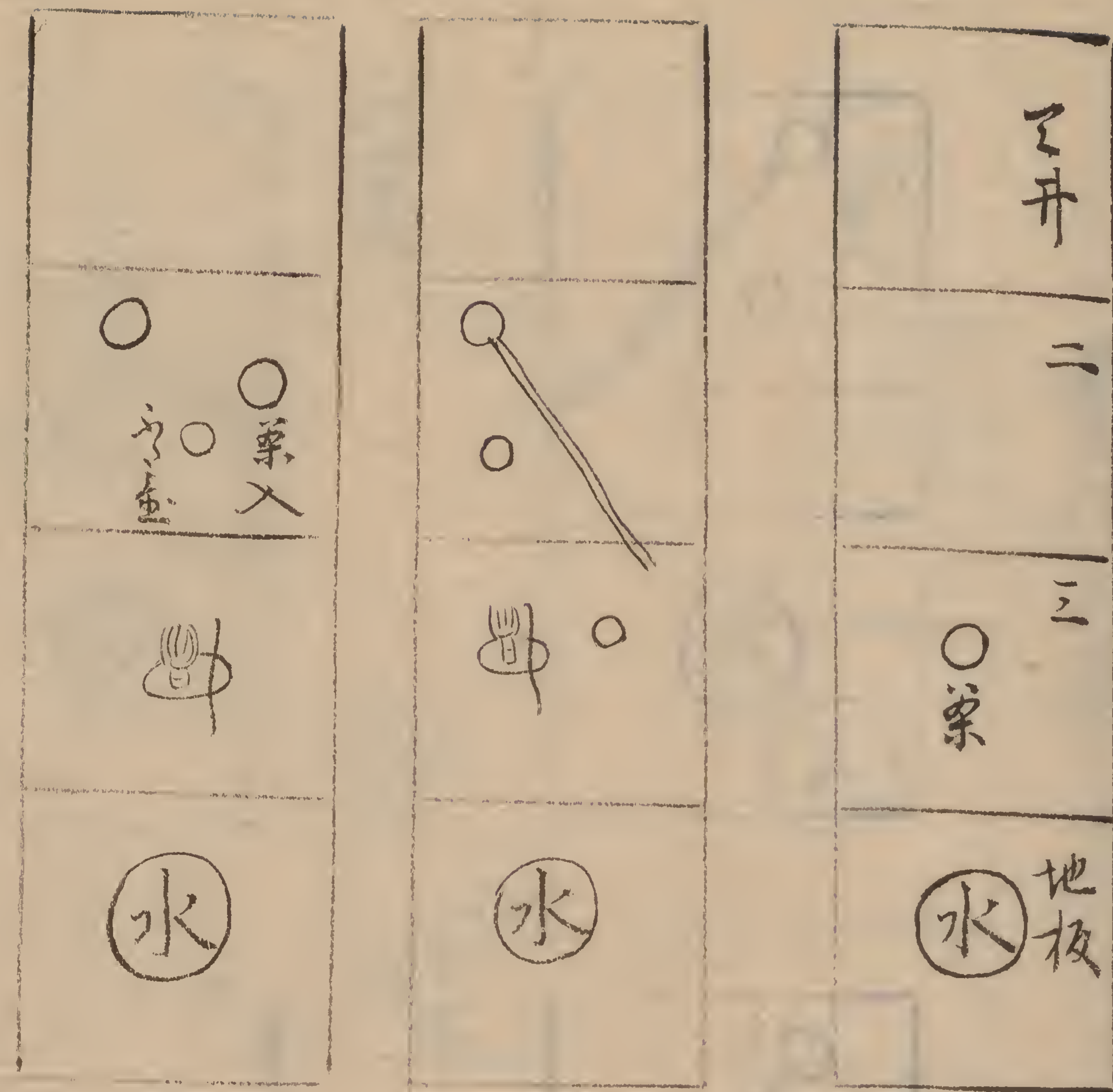
丸卓利休好

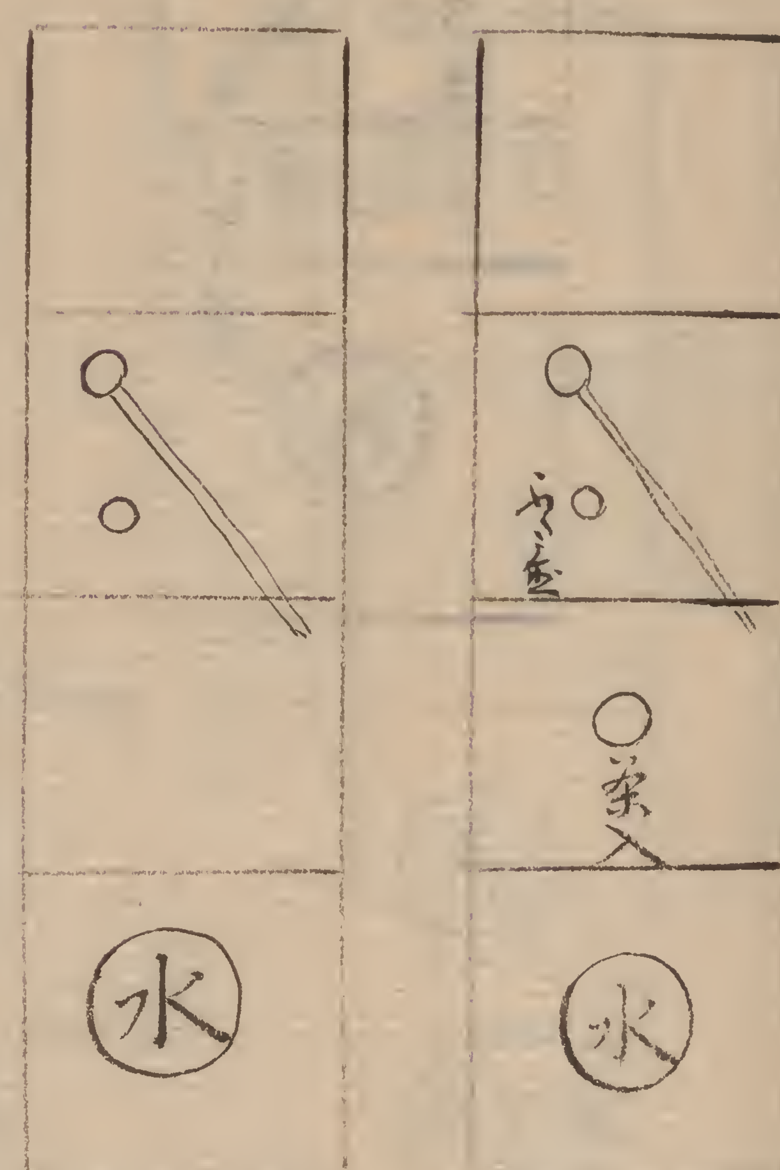


利休好四方棚



三重棚

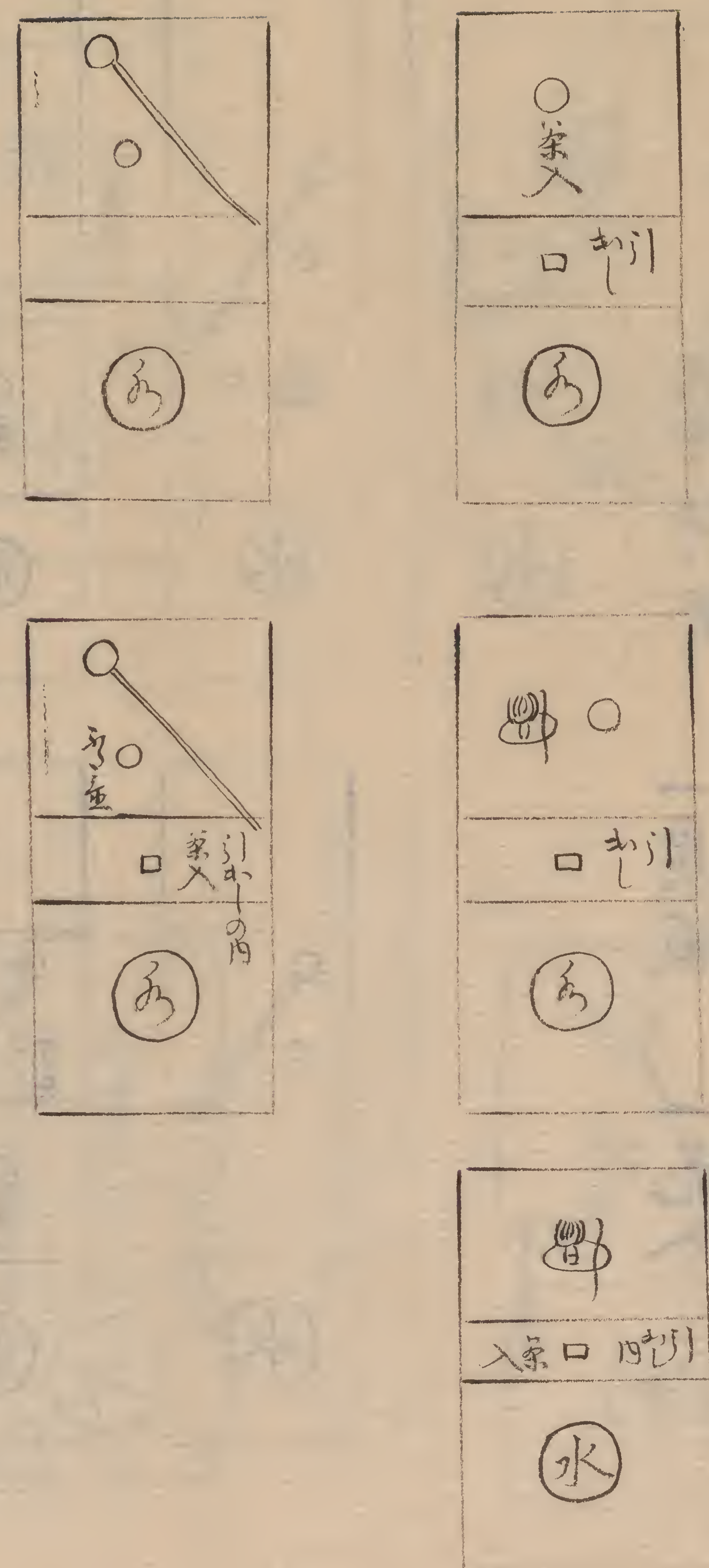




天井飾所

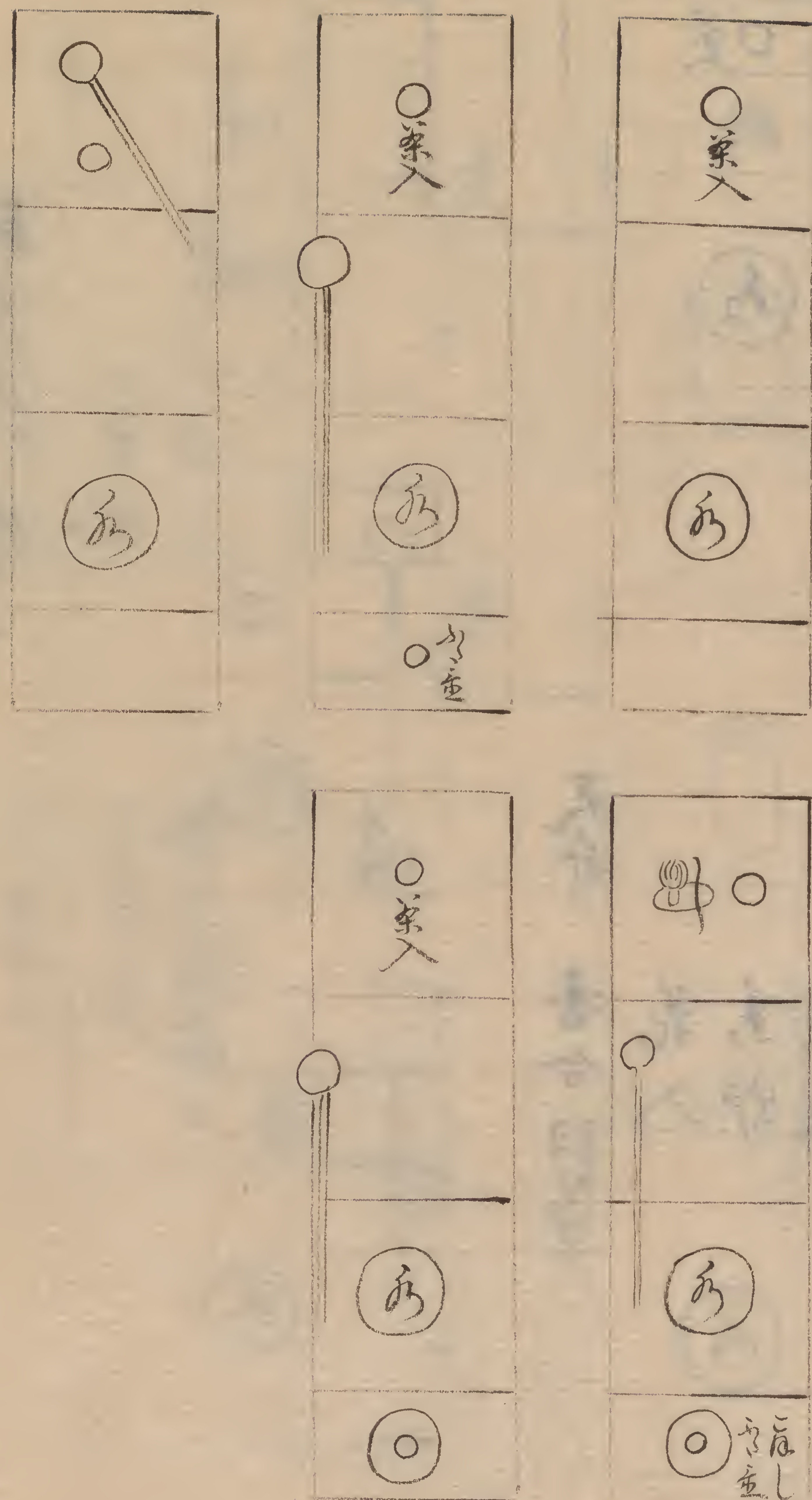
一炭取　一花入
一香合羽帚　一香炉
一料紙硯箱　右何れも飾

江岑棚

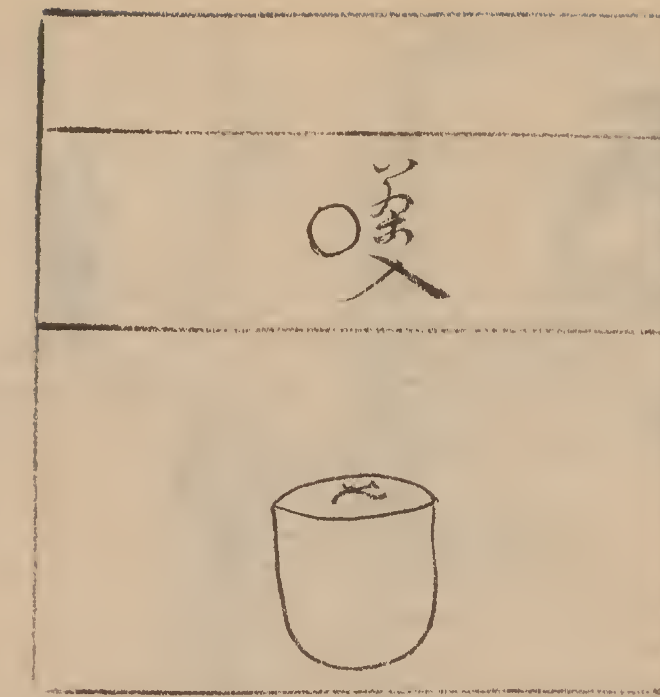


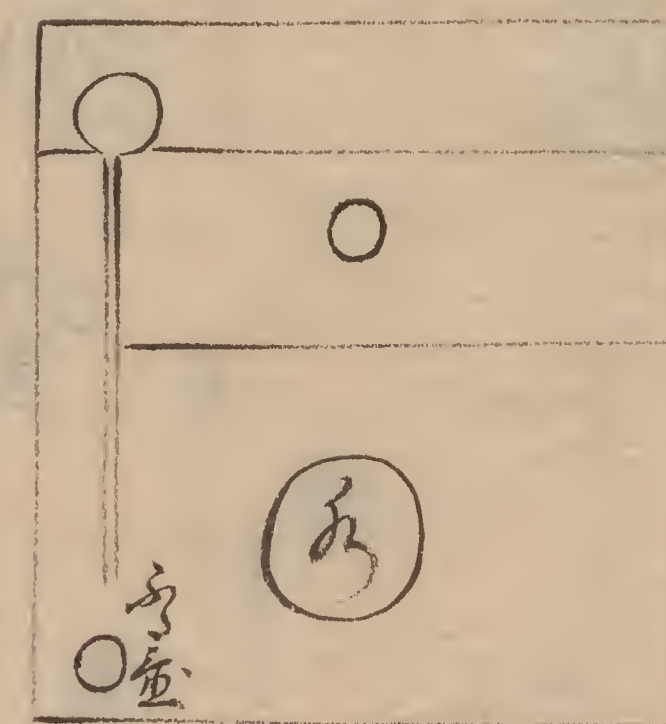
棗形小卓

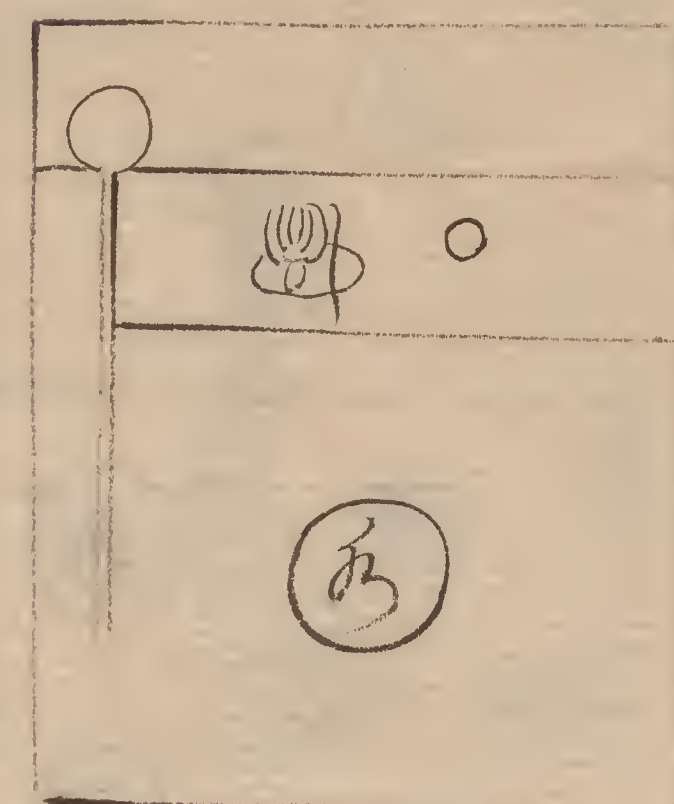
仙叟宗室好

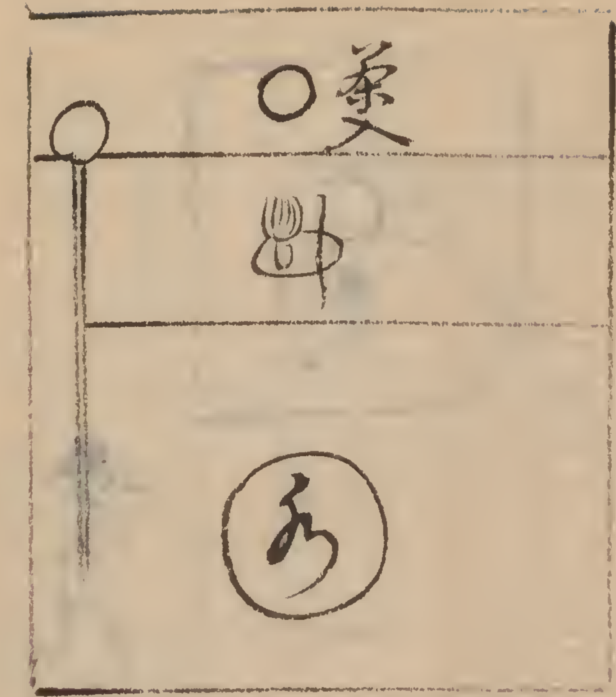


旅箪子 利休好



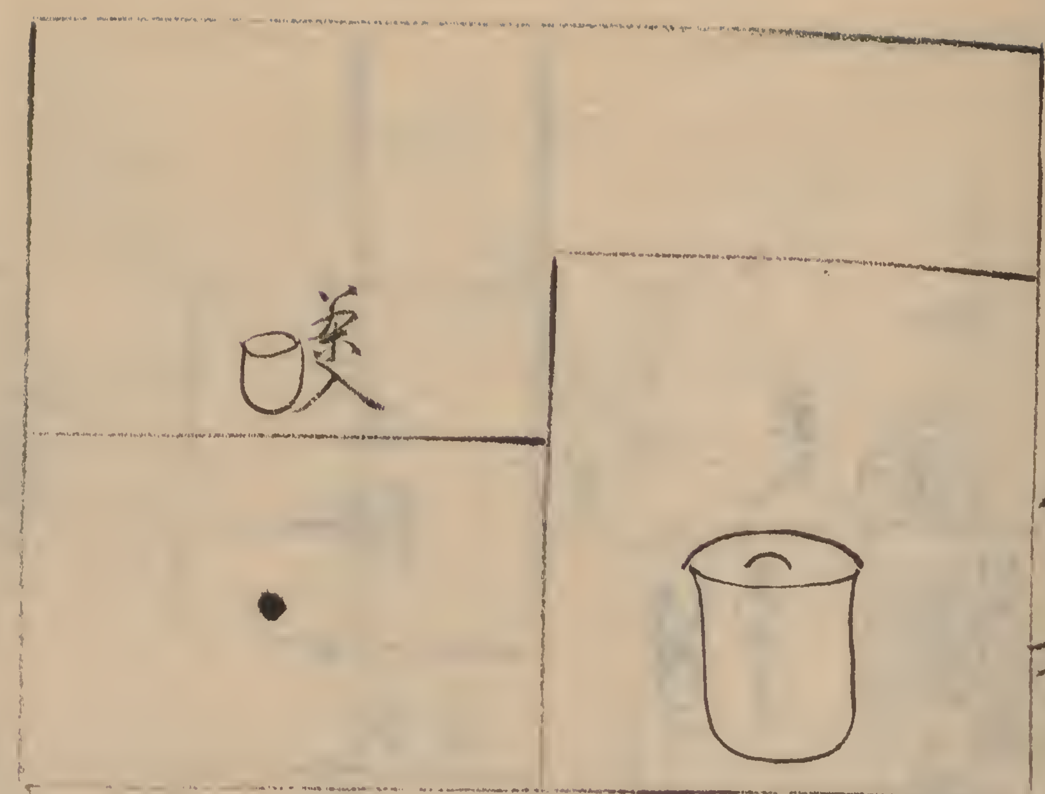


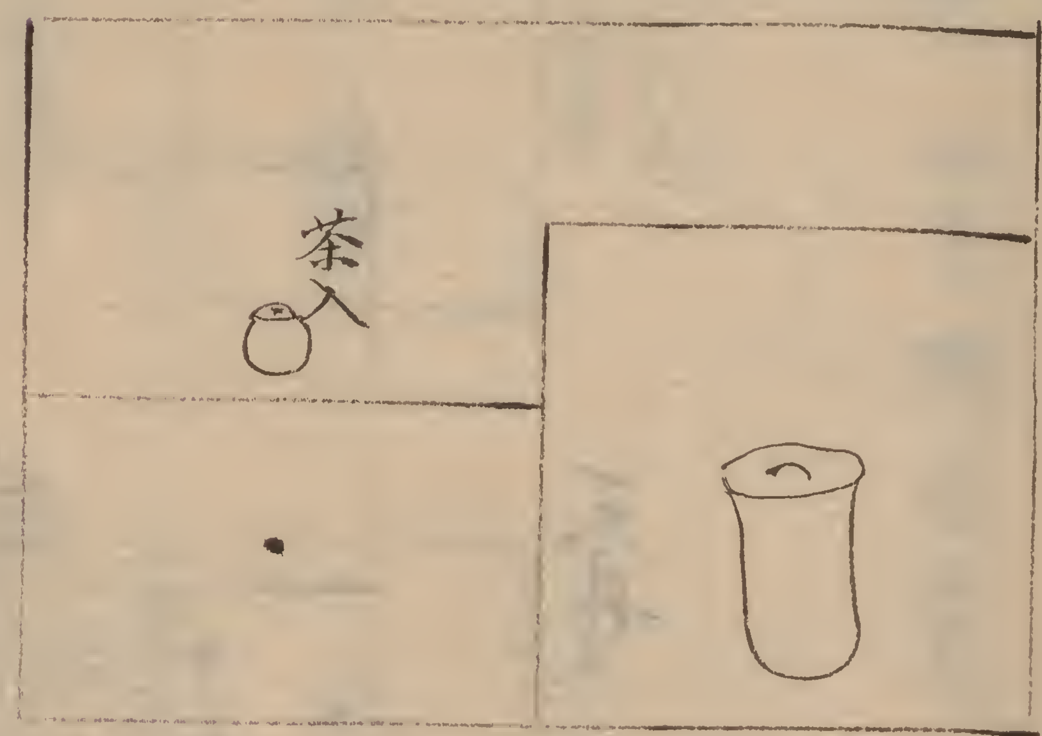


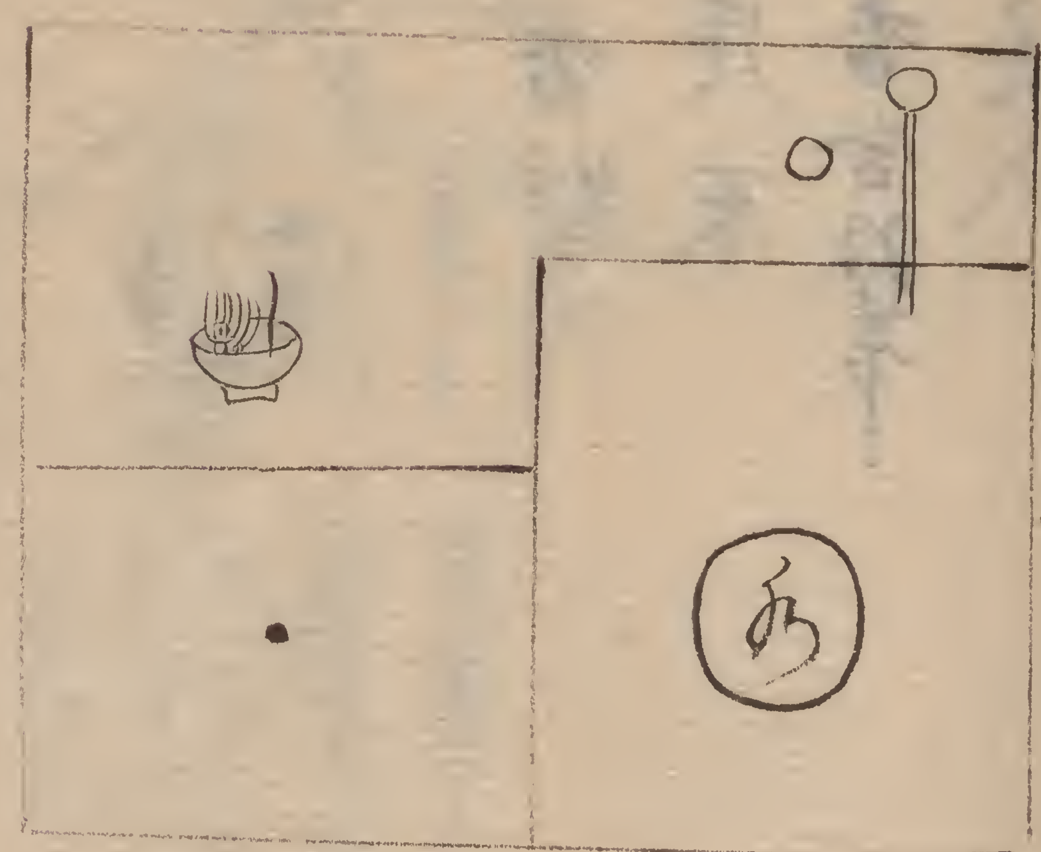


天井 香合 羽箒
花入
香炉
炭取
料紙 硯蓋

袋棚 利休好

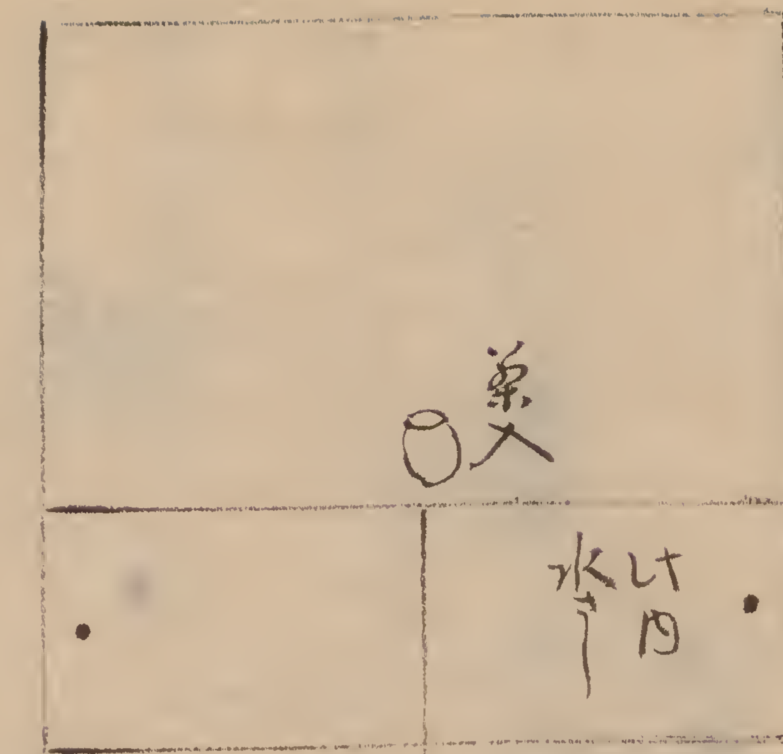


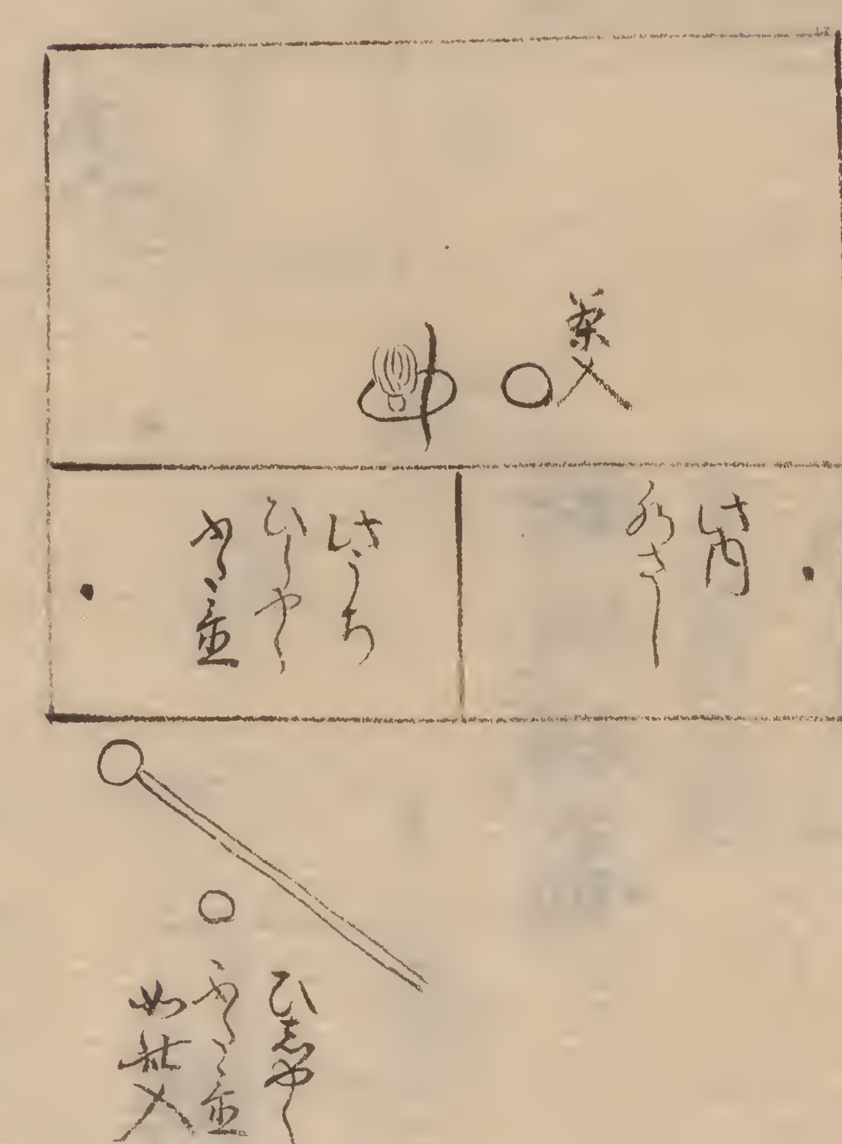




天井
一花入 料紙硯箱
一香炉 戸の内ニ或
一炭取 うへ菓せん
一香箱 羽箒 或いりへ棗

紹鴎棚

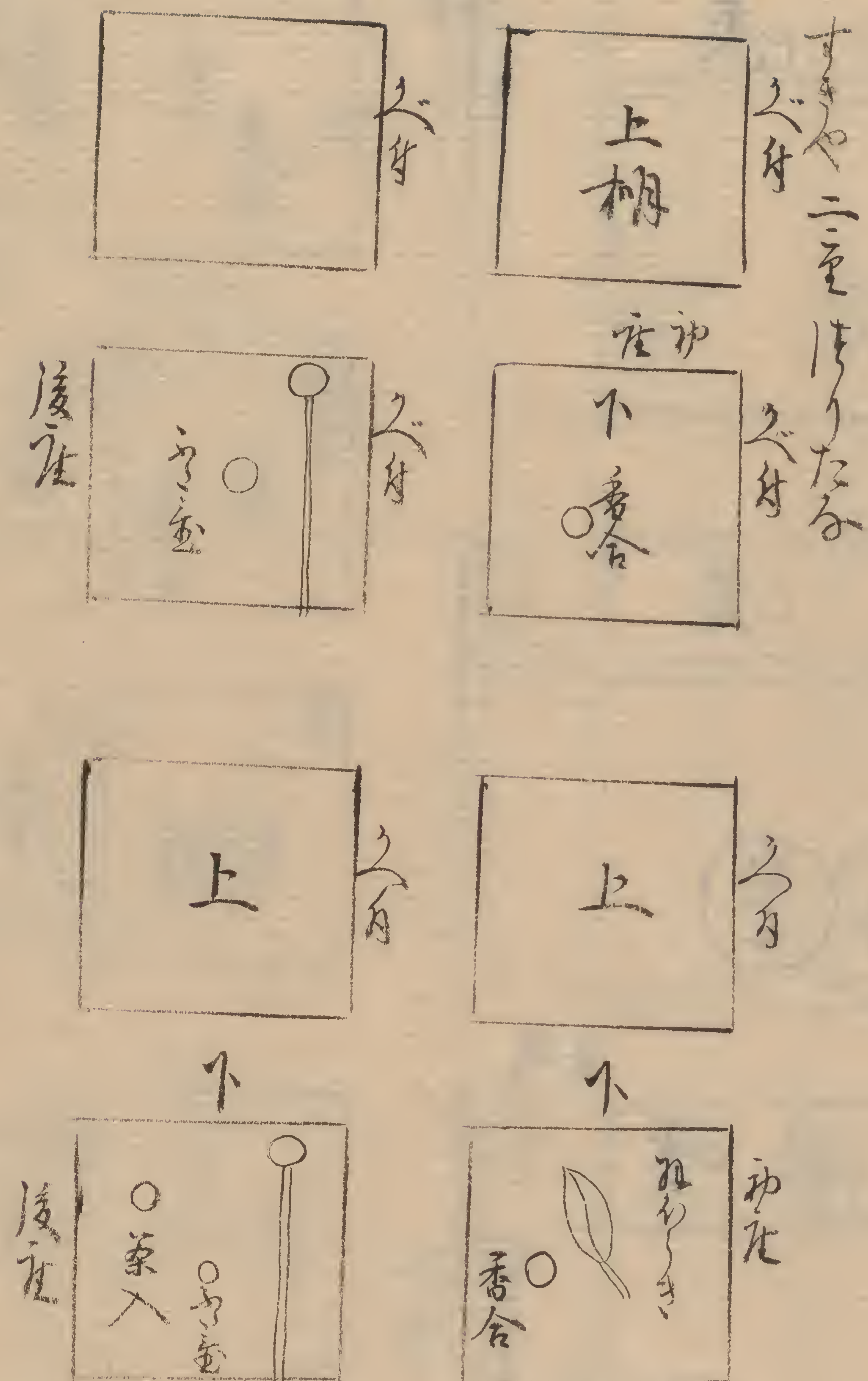




天井
一香炉
一炭取
一香合羽箒
一花入
一料紙硯台

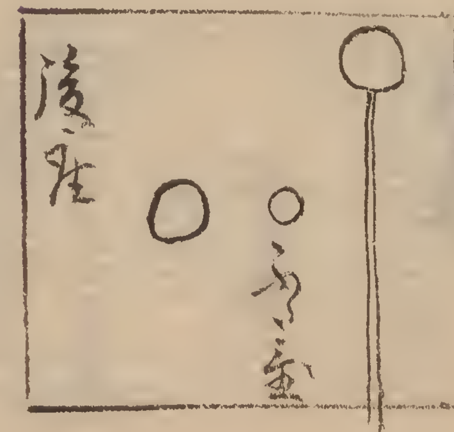
一高麗卓　四方棚同前

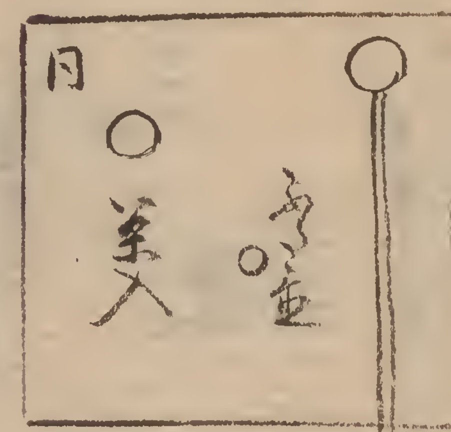
すきや二重法りたる

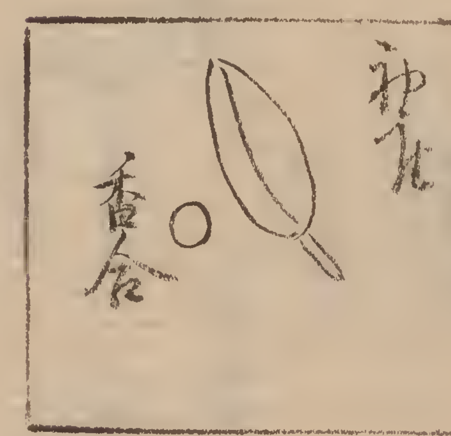


上ハ香炉かざるのもあり
菓子入も上ニかざるもあり
是ハうきうかれ又ハ
只水ほしらいをかざるも
りおなり

一重棚りあゑ

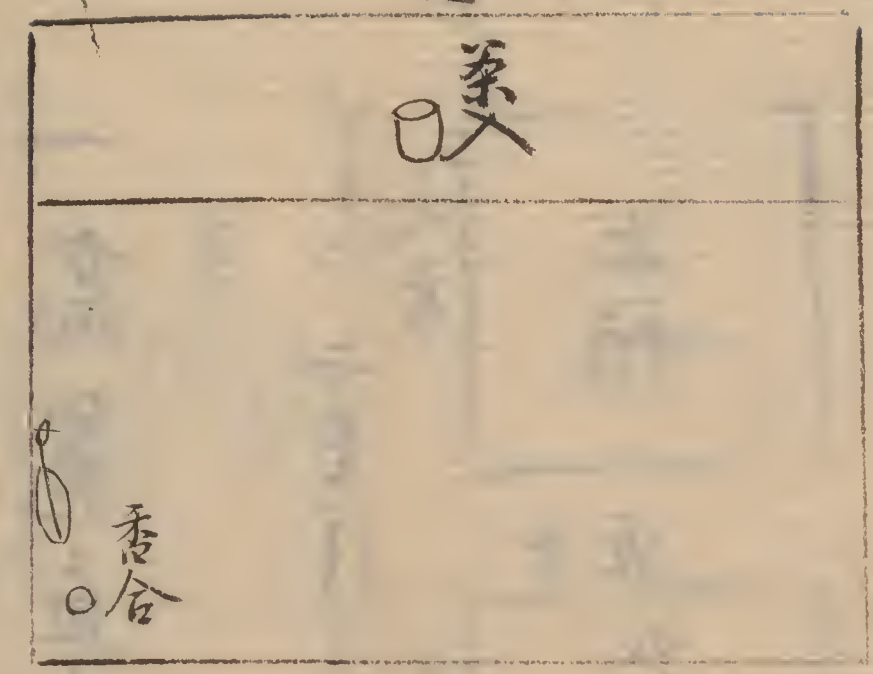


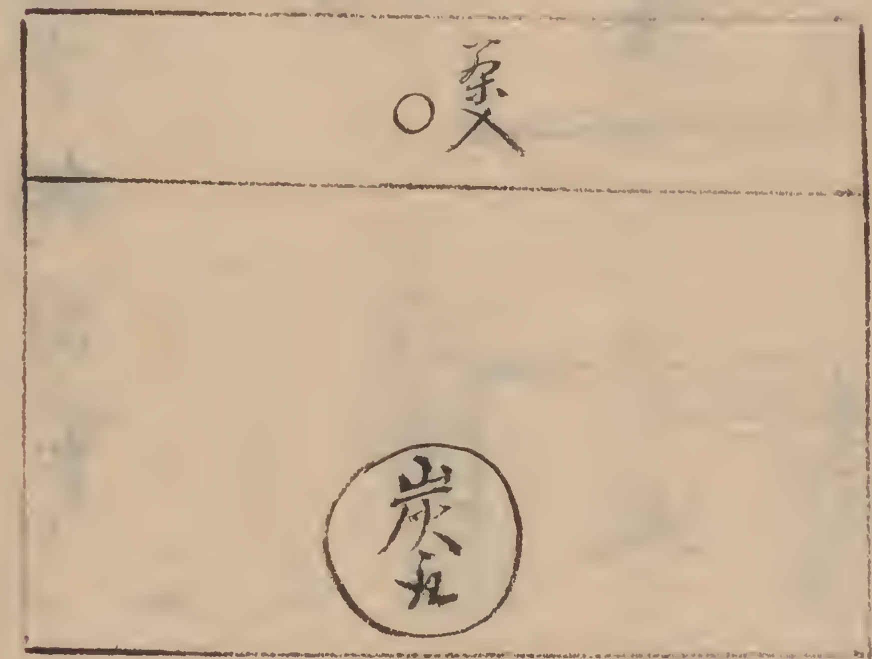




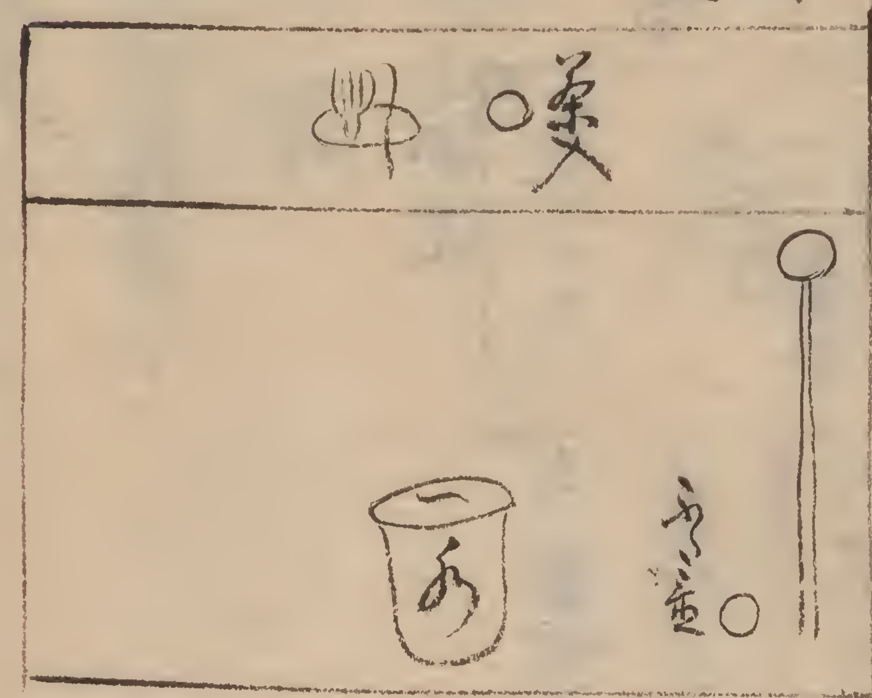
道幸

初座

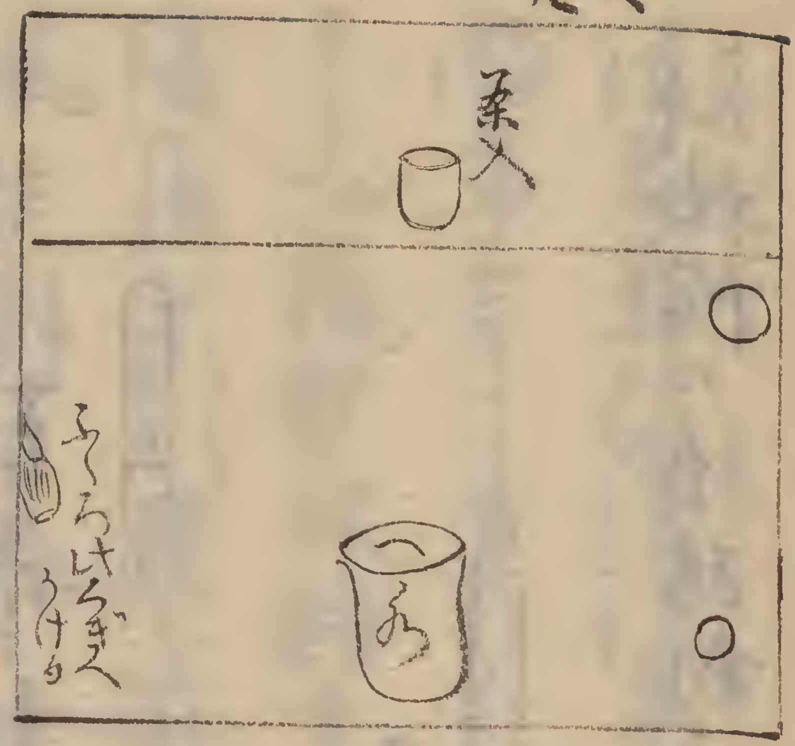


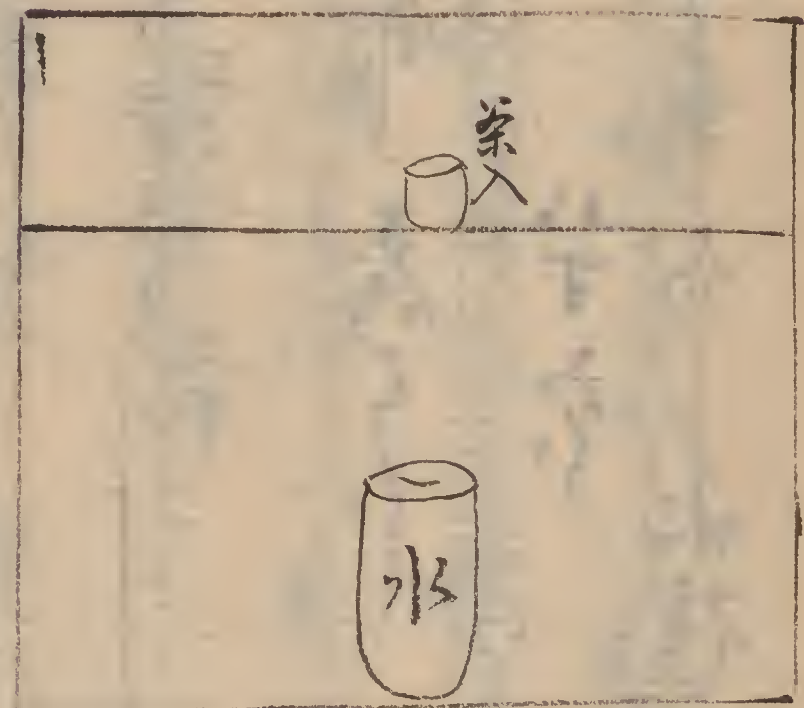


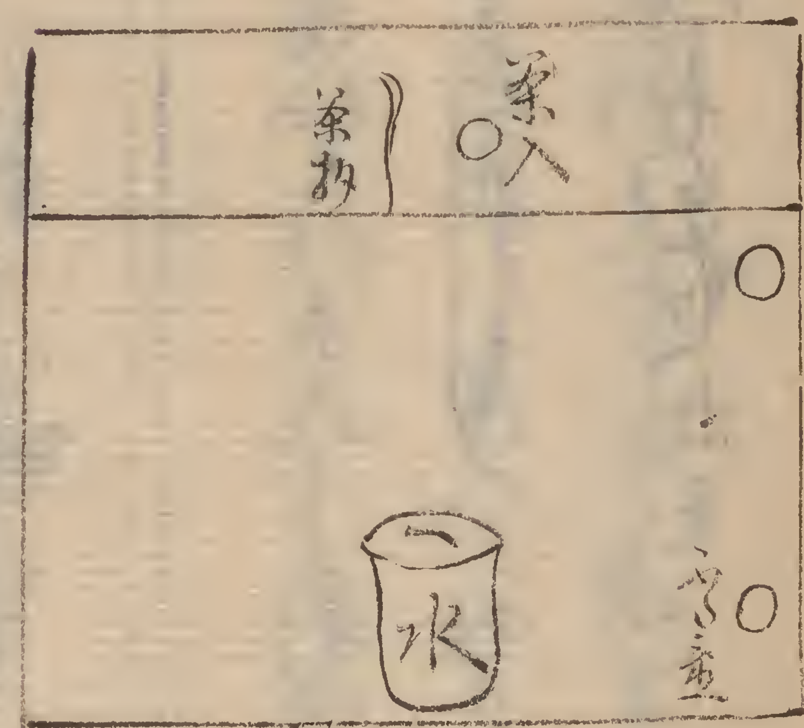
後座



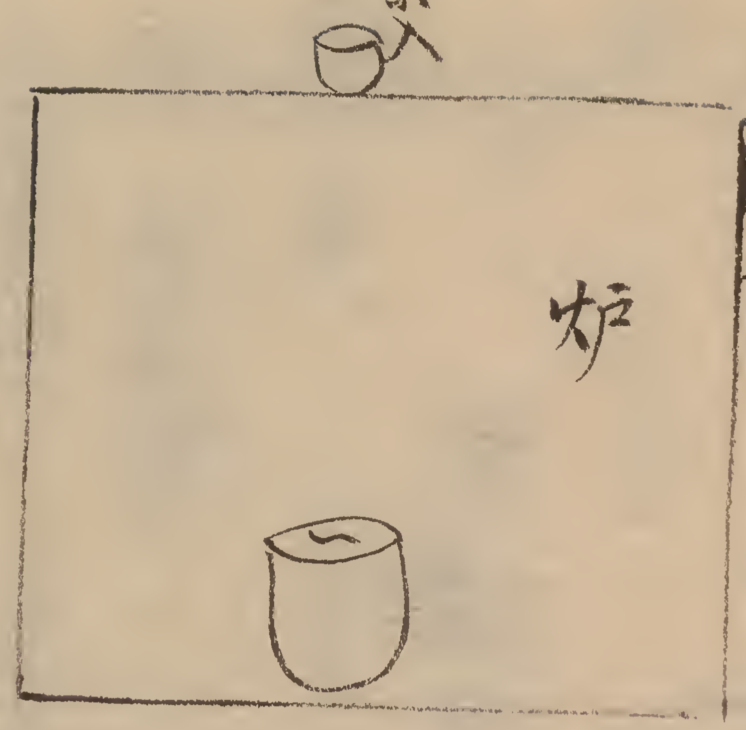
後座



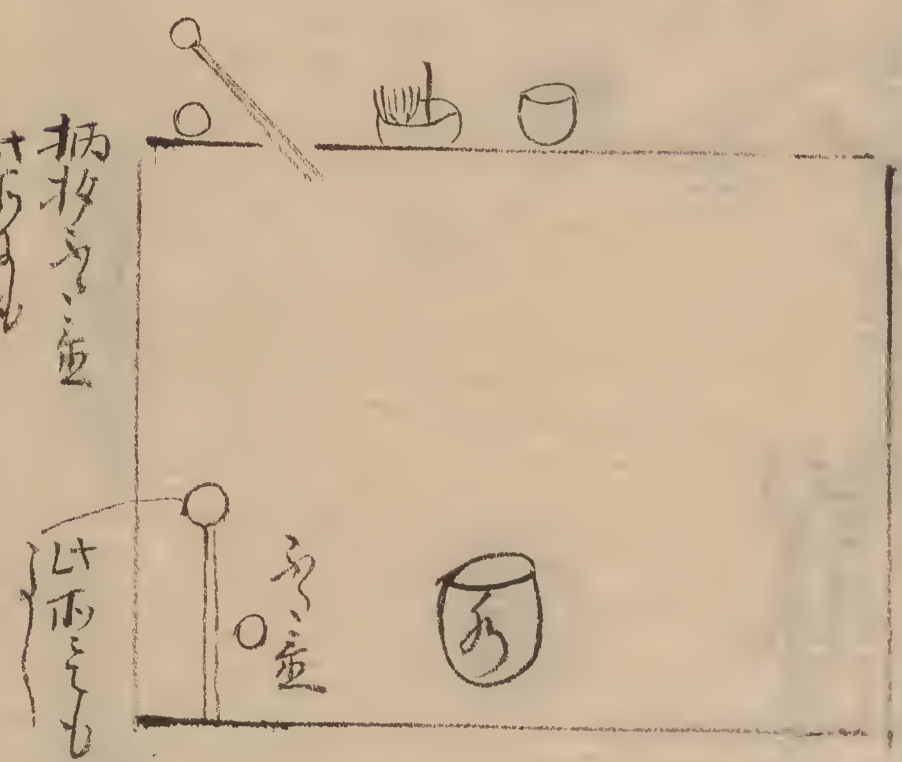




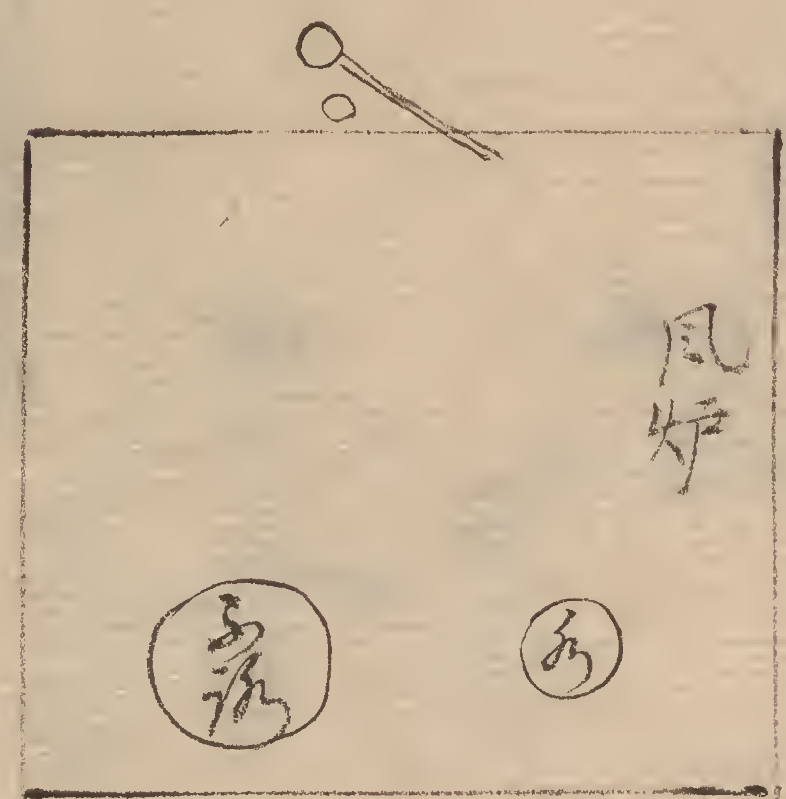
宗甫棚

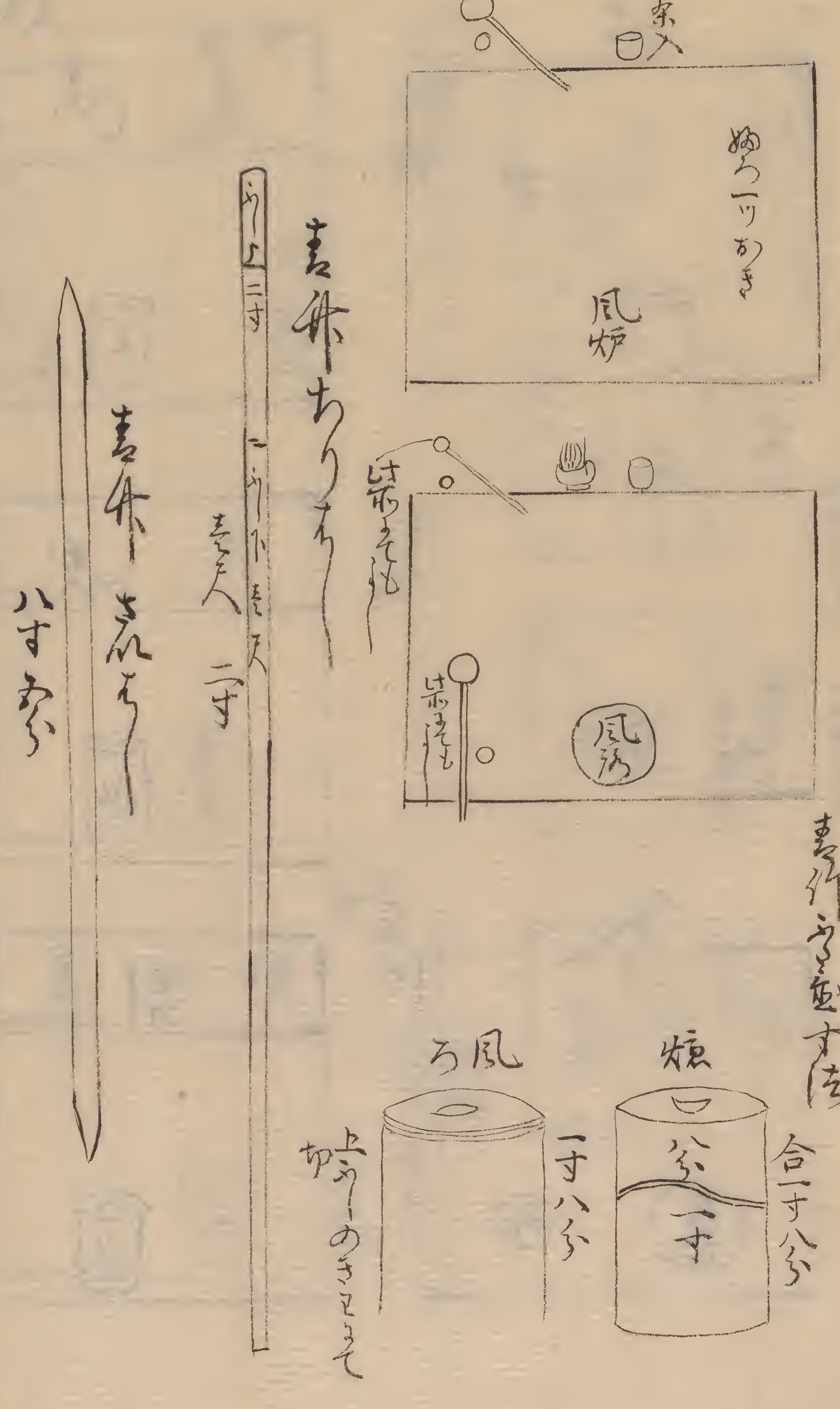


上円



上円





一 引拙柄ハ給鵄柄ニ替事なし水指ハいつれも蓋出ス

一 風呂茶ハ湯仕方前ニて擂る事なし板数ハ不用ゆへ窓をこふ此事ことにまなるまし前ニ云通り炭入て神ハゆかたきゆへ風炉中ハ始き二重度乃敷席ニ而も是あれハとも入へし擂出すなり

一 後擂とハ炭を残し菓子出しおきて

一 風炉朝の茶ハ炉の通り神入て炭残して擂と出る事也

一 右炭焼付釜ハ前之次第也

以上

炭切形炉

一 胴炭　五寸

一 同くた炭

一 まつちやう二寸五分　丸炭より炭くぎ

一 輪すミ 二寸弐分
一 四方すみ 胴炭ハやゝきの炭ニ而木口の寸合切ル之
同く風炉炭
一 胴炭 同寸
一 円くゞ炭
一 きつちや炭 二寸 九すミありすみくゞ炭
一 輪炭 一寸五分
一 四方炭 仕方前ニおなし
以上
一 燈築とうしん七すし長一尺六七寸
円くおしをかしもちそふ様ニ二三寸下ニてむすふ

一 竹築 木燈蓋 菊燈蓋 かね燈蓋・陶燈蓋あんとう
右いつれもとうしん五すし長八寸
一 石燈篭 木燈篭 金とうろう 挑燈ちやうちん
右いつれもとうしん三すし長六七寸
以上

春日形

火袋六角
二方鹿女男
二方雲形ニ日月